
蒼空への扉.WAT

とー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼空への扉・WAT

【Nコード】

N1768Y

【作者名】

とー

【あらすじ】

妙な時間の流れ方、この作品は『蒼空への扉・OSB』の続きとして書かせていただいております。まずは、前作をご覧になれることをお勧めいたします。

本当の一日目

その人物には、あまりいい知らせとは言えなかった。

あまりいい知らせでない、と言うより、あまり望むものではない、と言った方がいい。その人物が所属する吹奏楽部は、いつも通り、その人物の期待を裏切ってくれた、と言うわけだ。本当にいつも通り。

「冬休みの練習については、日程表の通りなんだけど、でも一つだけ訂正」

前にいる顧問の先生が、部員たちに語りかける。

「今日、部会って書いてあるだけなんだけど、ごめん、練習入れる。部長がどうしても入れたいって言うから」

その日は、終業式だった。

冬休み間近の日、そんな日に練習を入れられても、身が入るわけがない。休みに気を取られて、いい演奏になるわけがないのだ。しかし、いい演奏とかそう言ったものではなくて、練習と言う面目さえあればいいのだ。それが、この部活の目的だ、と少なくともその人物は思う。

「東海林、顔が死んどるぞ」

近くで、そんな声が聞こえる。

東海林は、少しばかり怠そうな表情を隠しきれずに、頬杖を突きながら声の方へと視線を向ける。

赤い鱗。

見た目それで覆われていて、ちょこんとした角があり、尻尾があつて、蝙蝠のような翼があつて、鰐のような顎をしている。目の中に見えるのは、禽獣類の鋭い視線。しかし、中身が中身で、全くそんな雰囲気をしていない、あえて言うならドラゴン。

何故ドラゴンがいて、みんながパニックにならないのかと言うと、慣れているから、とかそう言う問題ではなく、みんなは『そこに何

もないように感じている』からだ。ドラゴンは、特殊な人物ではないとみることが出来ない。器、術師だ。器の定義はよく分からないが、術師は術を使える人のことを指す。

そもそも数が少ない、と言うのもあるのか、そこにその赤い龍がいても、全く誰も気にしていない。

「……、」

東海林は、特に声を返すつもりもなかった。返したところで、今東海林の心憂さを消し去ることが出来るわけではなかった。今日はゲームの発売日だ。

なのに、部活がある。部活があつて、明日ゲームを買うことになる。それが、東海林にとってとても陰鬱な雰囲気を作り上げている物だった。

「全く、もう少ししやきつとせい」

赤い龍は言ってくる。

そんなことを言われても、東海林が今、しやきつとできるほどの精神力を持っていなかった。誰も持っていないだろうし、きつと、この先生の知らせを聞いて、東海林と同じように、ゲームが買えない、と思つた生徒がいるはずだ。東海林は納得していた。

「……ということ、予定は大体こんな感じ。今日はずっとパー練（パート練習）だから、サボらないように」

と言つてサボらないやつはいない。

あくまで、東海林が所属しているクラリネットパート以外は、の話だ。

クラリネットパートは、リーダーが真面目で、そう言ったことはちゃんとこなす人だから、そのあたりが等閑になることは無い。しかし、そう言つたことを考えると、クラリネットでない方がよかったかもしれない、と考えることも、少しは出来てしまう。

「赤龍、
いふことは」

東海林は言つた。

聞いた赤龍は、東海林の方に視線を向ける。いつも通り、真っ直

ぐとした視線だった。いつも通りなのはいいことだ。東海林は思っ
「うむ？」

言ってみる。

「俺、帰りたい」

気怠そうに、呟いた。

先生の、軽快そうな口調が、第二音楽室に轟いた。

「それでは、練習開始！」

それでも動かないのは、東海林だった。ただ茫然と座りながら、
物思いにふけ言っているようにも見える。

黒板の方に視線を向けると、そこには『C1 中3F』と書かれ
ている。クラリネットは、中学三年F組で練習してください、と言
うことだ。

「でも、行くしかないか……、」

気怠そうではあるが、東海林はしつかりと立ち上がる。そして赤
龍の方に視線を向ける。「そのいきじゃ！」応援しているのか何だ
か分からない雰囲気で、赤龍は言った。

東海林は、クラリネットの練習する部屋に足を運ぼうとする。

「ショウジン！」

その声に、東海林は聞き覚えがあった。嫌と言っほど、その声に
は聴き覚えがある。

東海林は振り返ると、少しばかり、目を気怠そうに細める。そこ
にいたのは、やはり見覚えのある姿。

「憶羅先輩……、」

小さく呟く。

聞いた憶羅先輩は、「ゲームの発売日だったのにね、残念」東海
林の心を見通しているかのように、そう呟いた。

どうせ見通しているのだと思うが。東海林は思っ。

「はい、まあ……、」

隣にいる赤龍が、憶羅先輩に呟く。

「相変わらず、何もかも見透かしているような口ぶりじゃの、憶羅」

憶羅先輩は、赤龍を見ることが出来る。何故かは分からない。それに、憶羅先輩が変なのは、そこだけではない。

「だって、俺『運命』が分かるからね」

そう言うことだ。

憶羅先輩は、何故だかよく分からないが、運命を知ることが出来る。何故そうあるべきなのか、考える余裕を持たせずに、そう言ったものを知ることが出来る。憶羅先輩が言うには、運命は二種類あって、『A・Flag』、『C・Flag』と勝手に名前を付けている。『絶対にそうでなくてはならない』ものと、『選択を迫られる』ものらしい。憶羅先輩曰く、「どちらを選択しても、大きな流れは変わらない」らしい。

それを信じることは、確かに容易ではない。しかし、東海林には、それを信じるだけの物を、憶羅先輩に見出していたことも事実だ。

「最近は何か見えましたか？」

試し半分で、東海林は憶羅先輩に尋ねてみる。

聞いた憶羅先輩は、「うん、多分今日は、」と話を続ける。

「野良猫が川でおぼれるよ」

意味が分からなかった。

「それが、運命なのかの？」

赤龍は、憶羅先輩に尋ねてみる。赤龍の興味も、憶羅先輩のそれに、少しばかり向いているようだった。

「まあね、絶対あると思うよ？」

言った。

変なことが言い切れるのも、恐らくその『変な能力』のおかげなのだろう。東海林は思う。

「それで東海林君」

急に、憶羅先輩の表情が真面目になる。

さっきまで生真面目そうな、ぬるい表情をしていたのにもかかわらず、だ。そんなものは一切関係ない、と言い切るような、そんな鋭い視線と、それから圧倒感。

「……、」

真面目な話だ。

東海林はそれを、本能的に理解した。

憶羅先輩の視線は、一体どこを見ているのか、東海林にはよく分からない。東海林に向けられているように見えるが、それだけを見ているような気がしない。

「今日、」

何か、運命の話だろうか。

考えながら、息をのむ。

「……、」

赤龍すら、その場で沈黙してしまう。固唾を飲み、憶羅先輩の方に視線を固くする。

「……シヨウジン」

俺か……、

何が来るか、東海林は心を固めておく。きっと何が来ても、東海林なら受け入れられる、と思う。

構えながら、東海林は憶羅先輩の声に耳を傾ける。

「を集中攻撃するからね？」

意味が分からなかった。

それが運命なのか？そうすることが絶対なのか？
考えてみる。

「しゅ、集中攻撃って、どういうことですか……？」

真面目そうな顔で、東海林は憶羅先輩に尋ねる。

昼食の時間にも、その猜疑心は持ち越された。はつきり言って、憶羅先輩の言っていることは、東海林の中で理解しがたいものが多い。しかし、憶羅先輩は元々そう言った人で、おかしな人だ、言うてはおしまいだが、それに準ずる人物であることは確かだ。集中攻撃の意味も、未だ東海林には分かっていない。

「どうということなのじゃろうな、集中攻撃って、」

赤龍は、パンを食べながら東海林に尋ねる。

聞いた東海林は、赤龍の方に視線を向けずに、空の方を向いている。何処までも澄み渡った空が、そこには広がっている。例年よりも温かい冬は、屋上の居心地良さを倍增させていた。しかし、屋上で食べているのは、東海林だけ。

「さあ、でも、きつと憶羅先輩のことだ、何か考えてるんだろ、きつと」

呆然と、東海林は言葉にしてみる。

東海林の中ではそれが正しかったし、憶羅先輩が策士であることも知っている。だからこそ、何も考えていないわけがないのだ。

パンをかじる。その中から出てくるおは、マーガリンとイチゴジヤム。

「しかし、東海林も妙なことばかりに巻き込まれるの」

赤龍は、ぱつと言葉にしてみる。

一瞬東海林は、赤龍の方に一瞥をくれる。何の気なしに、赤龍はパンを食べている。内心はラーメンが食べたがっているようにも見えなくはないが、それをあえて黙っているだけのようにも見える。

確かに、妙なことばかりに巻き込まれている。

赤龍を狙う集団、運命の修正を図ろうとする集団。

世の中には、様々なものがある。それを改めて、思い知らされる。それだけでも、東海林には十分だった。

以前までは、赤龍を狙う集団がポピュラーだった。ポピュラーと言っても、世間的にそうかと言われれば、勿論ノーだ。主として狙ってきたのは、と言うことだ。

だが、今回巻き込まれているのは、憶羅先輩たち、運命の修正を図ろうとする集団だ。別に悪いことではないが、東海林には、それが一体どう言ったものなのか、具体的には知らない。知らされてはいない。

しかし、これは赤龍が招いたことでまない。

「確かに、そうだな。俺もいろんなことに巻き込まれてる」

言いながら、東海林はパンをかじる。空は澄み切っていて、乾燥している空気が、風と共に流れていく。その後どこに行くのかなんて、東海林は考えてもいない。

「ところで、」

赤龍が言った。

東海林は、赤龍の方に視線を向ける。

「^{かな}香奈の足音が聞こえるぞ」

聞いた瞬間、

東海林の頭の中が、お花畑色に染まったことは言うまでもない。龍は基本的に耳がいい。だから、離れている足音でも、聞きとることが出来る。

「これは、屋上にかかるための階段を上る音じゃな」
付け加えるように、赤龍は添えた。

屋上の入口の方に視線を向ける。確かに、そこから香奈の足音が聞こえてくるような、そんな気がした。赤龍が言うのだから、きっとそれは正しい。そう思いたい。

ドアノブが、回された。

東海林は目を凝らす。

ドアが開けられ、東海林の足元から屋上の入口にかけて、花道が浮き彫りになる。

そこにいたのは。

香奈だ。隣にいるのは黄色い龍。

「香奈さん！と^{おつじもっ}黄龍」

どこか大げさそうな雰囲気を感じ、声を張り上げる。強引にねじ込むようにして、語尾に黄龍を入れる。ただそれだけで、挨拶の完成。

「東海林君もここにいたのね？」

微笑みながら、香奈は東海林の方に笑いかける。ほんわかとした気分が、東海林の中で膨れ上がって行く。東海林にだけ、春が一足先に来たような、そんな気分だった。

「うん！香奈さんもここに？」

大きく、笑顔で、元気よく。三拍子そろった頷き方だった。

「うん！今年の冬は、長袖だとしても過ごしやすいから、屋上で食べるのがいいかな？って思ってた」

その気持ち、痛いほどわかるよ香奈さん。

心の中が、お花畑に染まって行く。もう染まった。

「相変わらず、変なやつじやの、」

見ながら、赤龍は小さく呟いた。

それを聞くことなく、東海林は次の言葉を思いつく。

「一緒に食べない？俺と……！」

言葉が詰まる。

ここで、東海林は告白されたことがあった。それが、ある意味複雑な、そんな気持ちを催したことを知っていた。だから東海林は、告白みたいだと考えることはあっても、告白を今ここでしようとは思ってないかった。

「うん！」

これが告白ならよかったかもしれない。

思いながら、困惑とポカポカした気持ちが入り乱れるのを東海林は感じる。こういうのを、ジレンマと言うのだろうか。東海林は考えてみる。

「それじゃあ、隣に隣に、」

ささささ、

と東海林は自分の隣に手を向けながら、『ここに座って！』と言わんばかりの勢いで、香奈に微笑んだ。

香奈は東海林の言ったところに座り、黄龍は赤龍の隣に座る。

「そう言えば、東海林君」

香奈が、東海林に声をかける。

期待をさせながら、東海林は香奈の方に視線を向ける。

「なにになに？どうしたの？」

言ってみる。

「今日、ゲームの発売日よね」

その言葉が、香奈の口から出てくるとまでは思っていなかった。そもそも、そんなことを知っているとも、東海林は予想していなかった。

「よく知ってるね、うん、俺が欲しいゲームの発売日！」

もう、どこにアクセントを入れればいいのか分からない。そもそも、何故香奈がそんなことを知っているのかが分からない。

「だって、東海林君が好きそうなゲームだったから」

小さく、どこかおしとやかに呟いた。さっきまでの香奈の雰囲気と、少しだけ比較して、こちらの方がより大人っぽい、と言えるかもしれない。

「え……、」

もしかして、香奈さんは俺の事……。

東海林は、頭の中で妄想を繰り広げてみる。どんどん広がっていく妄想と、それに沿って大きくなっていく期待。

もしかして香奈さんは、俺へのプレゼントを考えてくれた？もしかしたら、クリスマスプレゼントを渡しそびれちゃったとか、そんな雰囲気？もしかして……、もしかしたら香奈さんは俺のことが……。

「思考がだだもれじゃの、」

見たままを、赤龍は呟いてみる。

隣にいる黄龍は、それに反論することなく、東海林を見つめてみる。そこにあるのは、明らかに東海林の世界だった。

「ええ、駄々漏れね」

その声は、東海林ワールドに届かない。

そうか、こういうことか。

思いながら、東海林はため息を吐きたくなる。赤龍はため息が嫌いだから、東海林はあまり、赤龍の前でため息はしない。これでも、なるべく抑えている方だ。

「はいシヨウジンだめ、」

東海林は、部活でバスクラリネット（バスクラ）を吹いていた。しかし、中三の夏から入ったばかりなので、あまりうまく吹くことができない。あくまで、まだ。

つまり、これは東海林への特訓、と言うことだ。

ある意味、公開処刑と言う言葉も、この場合似つかわしい。クラリネットの全員が休みながら、東海林だけが吹いている。自然とみんな、東海林の音が耳から入って来る。

「今日……、本当に集中攻撃だけなんですか……？」

どこか、脱力気味に東海林は尋ねる。さっきまでの華やかさは、どこかに行ってしまったような、そんな雰囲気か否めない。さっきまであんなにお花畑に染まっていたというのに、今は、灰色な気分が采配している。

「それ以外にないでしょ？みんなやる気ないんだし」

聞くと、東海林は視線を細める。そして、辺りを見つめる。

面倒くさそうな視線と、それから、どうでもよさげな雰囲気。その両方が、今この教室に渦巻いている。授業中のような雰囲気と言えば、きつとそれはそれで間違いではない。しかし、だからと言って、東海林を集中的に特訓する理由が見あたらない。確かに、東海林は入りたて、といえば入りたてになる。まだそんなに、バスクラ経験が豊富というわけではないが。あくまで、みんな一緒にがんばる、と言うのが吹奏楽部としての方針だ。東海林はそう思う。

「何で、俺だけなんですか……？」

訝しげで、どこか強引な敬語を用い、憶羅先輩に尋ねてみる。

そんな東海林には気を使わずに、憶羅先輩が答える。

「ずっとシヨウジンのターンッ！」

はつきり思う。意味が分からない。何となく聞いたことがあるが、その時使っていた言葉の方法とは、恐らく違う。

東海林は心の中で、前言撤回を発動させる。さっき、赤龍のためにため息をなるべくしない、と言ったが、この場合、範囲には入ら

ない。

「はあ……、」

ため息だ。

それを聞いた赤龍は、「東海林、ため息はあまりするでない……」
咎めるように呟いた。

それを聞くことが出来るのは、東海林と憶羅先輩だけだ。それ以外、このパートで龍を見られる人物はいない。

思いながら、どこか憂鬱そうにバスクラへ口を近付ける。憶羅先輩は、東海林の方を見て笑っているのか、赤龍の方を見て笑っているのか、いまいちよく分からない。

息を吸い、バスクラの音を鳴らす。どこか響きそうで響かない、そんな音だったことは確かだ。

それでいて、東海林は指を間違える。つまり、終わる。

「はい、そこね、」

笑いながら、憶羅先輩は東海林に言う。聞いても、東海林はおもしろさもかけらも見いだせない。

みんなはただ呆然としながら、東海林は独りで公開処刑を強いられる。

「東海林も、案外大変なのじゃな、」

呟くように、東海林の足元でとぐろを巻く赤龍が言った。東海林の憂鬱感が分かるのは、きっと東海林だけだ。それを、東海林自身が一番理解していた。

低音の、どこか響かない音が、教室に鳴り渡る。憂鬱感を孕んでいる。

明日も部活だった。今日のような集中攻撃を食らったら、もしかしたら、東海林は体力を回復していたとしても、憶羅先輩に撃沈されるかもしれない。つまり、そう言うことだ。

布団の中に沈みながら、東海林はうめき声を上げた。「うう……、」

「お疲れじゃの、」

言いながら、赤龍は東海林の方に視線を向ける。テーブルの上に乗っているカップラーメンを食べながら、赤龍はずるずると麺を啜る。

「お前は気楽だよな……、赤龍、」

どこか、羨ましそうな感情を含ませた、布団で弱音されている声が聞こえる。聞いても、赤龍は「演奏しているのは東海林じゃからな」気楽そうに、ラーメンを啜る。

「そう言うもんか……」

おもしろくなさそうな声だった。

聞いても、特に赤龍が変わることはない。いつも通り、夕食にラーメンを食べるだけだ。

「うむ、」

赤龍は言った。

心の中で、東海林はため息を吐く。「本当に、気楽でいいな」独白のように呟く。

「でも、明日になれば、みんなやる気が戻るのではないかの？」

ある意味、確信を持っているような、そんな雰囲気です赤龍は言った。

確かに、そうかもしれない。考えてみる。

今日は、そもそも部会だけの予定だった。それだけで、冬休みが訪れると思っていれば、練習がある時のやる気は激減する。しかし、明日の練習は、随分前から決まっていた。としたら、少しはやる気も戻るのではないだろうか。

思い至り、東海林は小さくため息を吐く。

「今のは吐息かの？」

尋ねてみる。

聞くと、数個の思考をまとめながら、赤龍に答える。

「いいや、」

聞くと、赤龍は「じゃろうな」呟いた。

それでいいのかもしれない。

少しだけ考えると、赤龍の方に視線を向ける。そこには、いつも通りの食事風景が広がっている。

思いながら、東海林は布団から起き上がる。「俺も食べる」張るような声で、東海林は言った。

台所に向かうと、東海林はラーメンを取る。塩味しかないのは、赤龍の趣味だ。

お湯を注いで、東海林はタイマーを付ける。タイマーは『3:00』からどんとカウントダウンしていく。

「やっぱり、塩味じゃな」

赤龍の、どこか楽しそうな声が、東海林の耳に届いてくる。反論するように、「塩味しかなかっただけだ」言い放つ。

赤龍は食べ終わると、「ふーむ、満足じゃ、」言った。

それと同時に、タイマーが鳴り響く。タイマーの『STOP』と印刷されたボタンを押すと、「食うの早すぎだ」ばやくように呟いた。

「東海林が、食べるの遅かっただけじゃ」 言っと、赤龍は天井の方に視線を向ける。別にそれは吊り天井でも何でもなくて、蛍光灯が光っているだけの、ただの天井だと言うことは、誰が見ても明らかだった。赤龍が見てもだ。

「そろそろ寝るかの、」

赤龍は言った。

聞いた東海林は、どこか意外そうな表情を、赤龍に向ける。「早いな、今日は、」

「今日は赤龍も、お疲れなのじゃ」

言っと、赤龍はソファの上に横たわり、目をつぶる。雰囲気は、本当に眠そうだと、言うことを表していた。

「寝るのか、そうか」

何となく、微妙な寂寞を感じつつ、東海林は次の言葉を考える。

「……おやすみ、赤龍」

いつか言ったような、そんな口調と同じだった。

赤龍も、「うむ、おやすみじゃ」「言うだけで、いつもと何ら変わらなかった。

少し伸びたラーメンを、静かに啜る。

練習の日の筈の日

まだ明るくなりきっていなかった。

外を見ると、まだ若干、夜と呼べるものが存在しているのも確かだった。しかし、夜よりかは幾分、明るくなっているようにも見える。薄明とでも言う時間帯。東海林は目を覚ました。そんな時間に目を覚ますなんて、東海林にとってはおかしいことではなかった。今日は吹奏楽部の練習日だ。冬休み一日目、何ていう肩書を無視して、吹奏楽部は、短期間ながら、冬休みにも活躍する。

「……、」

東海林は、布団の上で充電されている携帯電話に、呆然と手を伸ばす。手に取ると、眠そうな視線を注ぎ、東海林は携帯電話を開く。

『4:11』

それが、今の時間だった。

つまり、まだ夜に近い朝、と言うわけだ。はっきり言って、その言葉の意味を東海林は理解できないが、そう言うことだ。

「……、眠い」

言つと、眠そうな表情を隠さずに、東海林は布団の中に潜り込む。冬の冷気が、東海林のいる寮にも侵食してきている。

「寒い……」

それが、はじめの感覚だった。

昨日と同じだった。昨日も、東海林はこのくらいの時間帯に起きて、携帯電話を開いて、それから「寒い……」と呟いた。それは確かだった。

「……しかも腹減った……、」

それも、昨日と同じだった。

起き上がることにすら、東海林にとっては面倒だった。面倒ではあるが、食事をとるためには、起き上がらなければならぬ。

と言つても、食事と言える食事は、ラーメンくらいしかない。

思うと、東海林は面倒くさそうに目をこすり、赤龍の方に視線を向ける。赤龍は、ソファアの上でいびきをかいている。

外で、鳥の鳴き声が聞こえる。

なんとなく、中国の古典的思想に似た感情が湧いてくる。今『春暁』でも読んでみれば、きっとその詩に入り込むことが出来る。東海林は同時に、眠たくもあった。しかし、空腹でもあった。

布団から出たくない。

眠たそうな表情を隠さずに、東海林は携帯電話へ手を伸ばす。手だけが寒いのも、東海林にはあまり好きではなかった。

携帯電話は、さつきから何も変わっていない。変わったと言えるのは、時間が一分すぎたくらいだ。時計が一分だけ進んで、『4：12』と表示されている。逆に戻るなんて、あり得ない話だ。

東海林はアラームを設定する。考えて、アラームの時間は『7：00』と言うことにしておく。これ以上眠って入られるが、なんとなく、起きられなくなるような気がしてならない。確か、吹奏楽部の練習は、いつも通り『8：30』から開始される。とはいってもあの部活は案外時間にルーズだ。そんなきつちりとした時間に始まることは、まずないと言っている。だからと言って、遅刻していいと言うことにはならない。あくまで、常識的には。

東海林は思いながら、携帯電話を閉じる。布団の中は温かく、心地が良かった。その温度は、確実に東海林を、睡魔に似たもので包み込んで行った。

その次に聞いた音は、アラームのけたたましい音だったことを、東海林は覚えている。

少しばかり億劫そうに、東海林は目を開ける。アラームが鳴り響いている。携帯電話が光りながら、スピーカーから、東海林を起こすための音が、寮中に響き渡る。

「……、」

つまり、朝だ。

朝の『7:00』くらい。

思うと、東海林は小さくあくびをする。携帯電話に手を伸ばし、目を細めてボタンを押す。この際どんなボタンを押しても、アラームは止まる。本人が起きたと認識されるから、一時的にアラームは止む。

そのままにしておくと、アラームが再開することは分かっている。東海林は思い、暗証番号を早めに入力すると、アラームを解除する。そのまま、東海林はアラームの場所に飛ぶと、携帯電話のアラームを『OFF』にする。明日も使うとは思わなかった。

起き上がる。

その瞬間、東海林の体に寒々しい空気が取り巻いて行く。あまりにも乾燥していて、それでいて寒い空気が、東海林の体を取り巻いて行く。

「うわ……ッ」

一瞬で、東海林は布団の中へ帰還する。しかし、ずっとそうしてあるわけにもいかない。

東海林は息をのみ、目をはっきり冴えさせると、布団を巻いたまま起き上がる。小さく息を吸うと、腹を決める。

布団を取り払う。

もしこの場で水を掛けられたら、東海林は絶対に凍え死んでしまう。そんな気がする。きつと、気のせいでもないだろう。

思いながら、東海林は床に足を着く。勿論、床暖房なんてついていない。この寮に、そもそもそんな設備は無い。

一瞬だけ、東海林はそのことを恨めしく思いながら、立ち上がる。

「あー、寒い」

言うつと、東海林はリモコンでテレビをつける。殆ど時計の役割しか果たしていないテレビは、空しく光を放っている。冬は音が、特にないような気がしてならない。

『7:05』

今日は早めに起きた。

心の中で東海林は思うと、キッチンの方向に向かう。足取りはど
か重く、それでいて、あまり乗り気ではない。

冷蔵庫を開けると、いつも通り、東海林は栄養満天ゼリーを取り
出す。冷蔵庫の中にあるのは、栄養満天ゼリーと、それからめん
つゆくらいだ。それ以外には、これと言って目立ったものは無い。

親の支給金が、そろそろ底をつく。

約一か月前、東海林は親から支給をもらった。いつも通りの金額
で、いつも通りに浸かっていれば、いつも通り、普通にもつはずだ
った。

しかし、今回はゲームの発売日が重なった。昨日のがいい例だ。

東海林は思う。ゲームを買う金はあるが、食料を買う金がない。つ
まり、そう言うことだ。

「はぁ……、」

どちらにため息をしているのか、はつきりとわからない感覚で、東
海林は栄養満天ゼリーの口をひねる。

そして、声。

「ため息は厳禁じゃ、東海林、」

それが赤龍の声でないわけがなかった。

聞いた東海林は、面倒くさそうな表情を浮かべる。声のした方に
視線を向けると、そこには赤龍がいる。さっきまで眠っていた赤龍
だが、いつ赤龍が起きるのかなんて、東海林には分からない。

「またいきなり起きたな、赤龍、」

東海林は目を細めて、赤龍の方に小さく呟く。

「またとはなんじゃ、またとは」

聞くが、東海林はその言葉をそんなに重視はしない。東海林は冷
蔵庫を開けると、再び栄養満天ゼリーを取り出す。赤龍の方に投げ
ると、すぐにキャップをひねる。東海林はその前から、栄養満天ゼ
リーを飲んでいる。聞いた話によると、栄養満天ゼリーを一度にた
くさん飲むと、体に吸収されにくいためか、腹を壊す。だが、東海
林はその話を知っても、信じたことは無い。話はもつともらしいが、

東海林は一度にのみ切って、腹を壊したことがない。

「それで、今日の予定は何じゃったか」

赤龍は東海林に尋ねる。

聞くと、「今日は吹部の練習だな」と呟く。聞いた赤龍は「ふむふむ」数回頷くと、栄養満天ゼリーを飲み込んでいく。

「うむ？」

どこかで、何かが突っ掛ったような、そんな表情を赤龍は浮かべる。物理的ではなく、思考的に。

聞いた東海林は「どうした？」と軽く尋ねてみる。

「吹奏楽部の練習は、冬休みの初めの四日じゃったな」

確認を取るように、赤龍は東海林に呟く。

東海林は、はつきりと一度頷いた。

「ああ、それがどうしたんだ？」

あまり納得がいかないような表情で、赤龍は東海林の方に視線を向ける。「確か、休みの前には終業式と言う物があるの」

何故そんなことを聞くのか、東海林には今一分からない。

「……ああ、」

若干怪訝そうな表情になるが、すぐに東海林は視線を直す。更に突き詰めるようにして、赤龍は東海林に言葉を進める。

「まだ終業式をやっておらんぞ？東海林、」

その言葉には、すぐに反論できる。

それを聞いた東海林は、「いや、」とすぐに頭を横に振った。それは、正しい正しくない云々の話ではなく、そうであったかそうでなかったか、の違いだ。

「昨日終業式だっただろ、赤龍」

それが、事実だった。

終業式の後に、吹奏楽部の練習を食らうなんて言う経験をすれば、絶対に終業式だ、と言うことが分かる。それは絶対だ。

「そうじゃったか？」

どこか納得がいかないような表情をどこかに向けて、赤龍は呟く。栄養満天ゼリーのふたをして、近くにあるごみ袋にそれを捨てる。

「まあ、どちらにしても、赤龍は東海林について行くだけじゃ」

どうでもいい、と言うような雰囲気で、赤龍は東海林に呟いた。それでも、未だに東海林は解せない。

赤龍が言った、『昨日は終業式ではない』と言う一言に関して、解せなかった。赤龍は記憶力が悪い方ではない。むしろ、人間の東海林よりも優れた面がある。なのに、赤龍は、昨日が終業式だったと言うことすら忘れている。

「まあ、いつか」

言いつつも、東海林は未だ解せない。

だからと言って、昨日が終業式だったという事実是不変ならない。今日は吹奏楽部の練習で、午前中には終わる。確か、予定表にはそう書かれていた、はずだ。

東海林も栄養満天ゼリーを飲み終わると、それをごみ袋に捨てる。

勿論、東海林は赤龍に乗って飛んでいく。すっかりドラゴンライダーの名前をもらってもおかしくは無い東海林にとって、飛行はいつものことでしかなかった。飛行はいつものことで、それはあまりにも、日常に溶け込み過ぎた、非日常なのかもしれない。考えてみても、東海林にはしっくりこない。

しっくりくるのは、赤龍の乗り心地だけだ。

「やはり、」

小さく、赤龍は言う。

聞くと、東海林は「ん？」赤龍の方に声を上げる。視線まで、その方向に行ってしまう。

「ラーメンが食いたい」

一瞬だけ、「あれ……、」東海林は小さく呟く。しかし、その言葉は赤龍まで届かない。

どこかで、この台詞を聞いたことがある気がする。
考えてみる。

そもそも、赤龍が「ラーメンが食べたいの」なんて言うことが、そんなに少ないとも考えられない。毎日のように同じ塩ラーメンを食べて、それでも飽きないやつだ、赤龍は。赤龍がラーメンを食べたいのはいつも通りの事で、いつそれを呟いても、おかしいことではない。

「ラーメン、な」

いつか、赤龍が飛びながらラーメンを食べていたのを覚えている。零しはしなかったものの、東海林はひやひやしたのを覚えている。

「飛行中には食べるんじゃないぞ」

一番、飛行中に食べそうな赤龍へ、言葉を呟いた。

「うむ、そうじゃな」

あまり納得がいかなそうな声で、赤龍は言った。

冬だからなのか、空はどんよりとしているように見える。雲はそんなに多くないが、太陽の光が、そんなに強いわけでもない。

少しばかり深呼吸して、冷たい風が肺の中に入って来るのが分かる。だからと言って、東海林は冬の空気が嫌いなわけではない。カラッとした乾燥気味の風は、逆に心地よい物もある。しかし、寒いのは少しきつい。赤龍は、そんなにすらそうでもない。

「お前、寒いのは大丈夫なんだよな」

東海林は、思わずつぶやいてみる。

聞いた赤龍は、「うむ、寒いのは平気じゃ」誇張するような、勢いのある口調で言った。

「赤龍って、『火』のイメージがあるからさ、寒いのは苦手かと思っただけだ」

言ってみる。

「全員にそう言われるぞ、赤龍は」

おどけた風な口調で、赤龍は呟いてみせた。「しかし、」とも赤龍は続ける。

「青龍は寒いのが苦手じゃ。水を操るのに」

それを聞くと、「あ、そう言えばそんなようなこと言ってたな、」東海林は思い出すように呟いた。

「じゃが、赤龍にとつて、心地よい空気であることは間違いないぞ」何かすがすがしそうな声で、赤龍は付け足すように呟いた。

はつきり言つて、東海林には少し肌寒かった。しかし、夏よりは幾分ましに思えるのも、また事実だった。汗だくになるよりも、まだ寒い方がいいのかもしれない。考えて、東海林は思った。

「俺も、暑がりなのかもな」

呟くように、東海林は言った。

いつものように、裏道の、誰も見ていなさそうな場所で赤龍から降りる。こんなのを見られたら、たまったものではない。思いもせず、東海林はいつも通りに、赤龍から降りる。辺りを一度見回す。降りた場所は、昨日とちつとも変わらない場所だ。

「やはり、この方がしっくりくるぞ……、」

赤龍は、二足で立ち上がり、小さく伸びをする。それにつられて、翼まで伸びをしているように見える。確か、昨日も同じようなことをしていたような気がする。だが、東海林は考えてみる。赤龍が伸びをするのは赤龍の勝手だ。昨日したからって、今日しないとは限らない。つまり、そう言うことだ。

「俺も、」

東海林は呟く。

そして、手の平を空に向けて、大きく伸びをして見せる。すがすがしく、それでいて気持ちがいい。体全体がほぐされていくような、そんな感覚がある。

「やはり、伸びは気持ちがいいの」

赤龍は呟いた。

聞くと、「ああ、」東海林は言い、さっきよりも大きく伸びて、小さく息を吐きつけた。

手をぶらりと下げると、赤龍の方に視線を向ける。赤龍は、さつきよりもぱっちりとした視線を向け、東海林の方を見つめている。

「行くか」

東海林は言う、赤龍に小さく微笑む。

「うむ、行くとするかの」

赤龍も、東海林に言った。

歩き出すと、少しばかり、冬にしてはすがすがしい空気が頬を撫でる。確か、例年よりも少しばかり暖かい気温らしい。今朝のテレビで、そんなことを言っていたような気がする。それを、東海林は知っている。朝のテレビは、昨日やっていたニュースの続きのようなものだ。同じことを言ってもおかしくは無い。

そうは思うのだが、やはり、何かがおかしい気がするのも、きっと東海林の気のせいではない。

「去年よりは、まあまあ温かいな」

どこか、回顧するように言った。

それを聞いても、赤龍には答えようがない。「そうなのかの？」
逆に、尋ねるしなくなってしまう。

一瞬だけ「あっそっか、」呟くと、東海林は赤龍に言った。

「お前は、今年の春になる寸前に来たんだっただ」

東海林の記憶が正しければ、それであっているはずだ。思いながら、赤龍の顔をうかがう。赤龍の言葉が返ってくる。「うむ、確かそうじゃったな」

「だよな、」

吐きつけると、東海林は空に視線を向ける。

「今年は、なんだかんだ言って、去年より温かいんだ。理由はどうか、あれ、な」

テレビで言っていたのは、地球温暖化がどうか、と言う話だった。だが、東海林はそれだけが理由だとも思えなかった。それは、きつとみんな同じだろう。

「ふむ、なるほどの」

納得するように、小さく呟く赤龍。

幾分過ぎやすく、すがすがしい後に来る春は、夏のように暑いのだろうか。そんな思考が、東海林の頭の中に巡った。それは、考えるだけ無駄だと言うことを知る。

「ところで赤龍、昼は何が食いたい？」

一応、東海林は尋ねてみる。

案の定、それを聞いた赤龍は、「うむ？」期待に満ちた口調で、東海林の方に声を投げかける。聞いた東海林は、無慈悲だった。

「金がないことを、ちゃんと考慮しろよな」
言って見せる。

「うむ……、やはりそう来るのか……、」

赤龍も馬鹿ではない。単純ではあるが、馬鹿ではない。東海林の懐が寒いことくらいは、赤龍にもわかっていた。

「それでは、焼きそばパンかの」

仕方がなさそうに、赤龍は呟いた。

数回、東海林は頷いた。

「やっぱり、お前は麺類が好きなんだな」

東海林は、一応赤龍の主だ。そのくらいなら、東海林には分かる。あまり愉快そうではない表情で、赤龍は東海林の方に視線を向ける。「まるで、赤龍が麺の事しか考えていないようではないか、それでは」

聞くが、東海林の答えは変わらない。

「え？赤龍って、麺の事しか考えてないんじゃないのか？」

棒読みに近い驚嘆。

不愉快そうな声で、「うむ……、」小さく呟く。だからと言って、赤龍が何をするわけでもないのは、東海林にとって分かりきったことだった。

「まあ、そう言うことにしておくのもいいじゃろっ、」

妥協するというよりも、認めた、と言った方がこの場合正確だ。聞いた東海林は、「いつになく素直じゃないか、」赤龍に言った。

「赤龍が、素直でないことなんてあつたかの？」

聞くと、とても胡散臭いようにしか聞こえないように思える。しかし、それが嘘ではないことを、一番知っているのは東海林だった。

「はは、確かに」

笑顔で、東海林は呟く。

学校の校門に來た時点で、東海林の中の疑問は、一気に膨れ上がった。

記憶によれば、今日は冬休み一日目の筈だ。部活動で学校に來る生徒しか、今ここにはいないはずだ。

いない筈なのだが、そこは人であふれかえっている。正確には、天野下学園中学高等学校の制服を着た生徒たちで、あふれかえっているのだ。

「あれ……？」

東海林は呟いた。

冬休みにも部活動がある部活が、こんなにたくさんあつたとは聞いていない。東海林の経験からすると、いつもの半分いれば多い方になる。東海林はそれを知っているから、今この状況が『妙』だと思えてしまえるのだ。

「今日って、冬休み、だよな……」

しかも、時間としては、いつも通りの授業が始まる時間帯。

「赤龍には、そんな気がせんけどな」

隣で、ちゃっかりとした声が聞こえた。赤龍の声は、きっと気のせいではない。それを東海林は、納得している。

少し怪訝そうな表情をして、東海林は当たりを見つめる。いつも通りの生徒数、と言うのが、そもそもおかしい話だった。

「うーん……、」

考えても、東海林にはよく分からない。それで終わってしまうし、それ以上に考えることもない、と言うのも事実だった。「でも、別

にいいか」東海林はそう呟いて見せる。

「東海林、」

赤龍は、小さく呟いた。

「ん？」

尋ねてみる。

「焼きそばパンじゃ」

ちゃっかりとした口調で、東海林にそう呟いた。

それを聞いた東海林は、どこか呆れたような雰囲気です赤龍に呟く。
「……お前の頭の中、麺類で埋まってるんじゃないか？脳が見えないくらいに」

そもそも、龍の体がどんなふうになっているのなんて、東海林には分からない。しかし、頭の中に麺類が埋まっている生き物は、恐らく東海林の隣にいる赤龍だけだ。それ以外に、いるはずがない。
「きつとそうじゃな」

それを肯定してしまうほど、赤龍は麺類が好きだ、と言うことだろうか。

どうでもいいと思うと、東海林は横断歩道を渡り、学校へ足を急がせる。学校のチャイムは、まだならない。もしかしたら、冬休み初日だから、ならないのかもしれない。

考えた。

しかし、妙な感覚があったことも事実だった。

赤龍の言動にしても、学校の生徒にしても、テレビにしても。

既視感、

とてもいえるべきものだろうか。東海林は思う。またはデジャヴ。こんな感覚があった覚えがあるのは、初めてではない。だが、多くないにしても、東海林の中でデジャヴがこれっきり、と言うわけでもない。

東海林は学校のエントランスの中に入る。

エントランスの中にいる生徒の配置、それから先生の位置。カフエテリアの込み具合。殆どの物が既視感だった、と言えば、確かに

そうなる。デジャヴともいえる。

だからと言って、それが重要と言うわけでもない。

生徒が多かるうが、何だろうが、今日は終業式から一日たった、冬休みだ。それ以外の日だとは思えない。

昨日、東海林は確かに終業式に行った。眠くなるくらい完結しない、校長の長々とした話を聞いた。それに、忌々しい冬休みの課題まで受け取った。課題はきつと、まだバッグの中に入っている。

思いながら、東海林は購買部に滑り込むように入ると、パンコーナーに視線をやる。そこに、『焼きそばパン』と名のあるものは、もう既に『完売』と書かれた札が立っている。つまり『sold out』と言う奴だ、これは。

「かー……、」

昨日のことを覚えている。

確か、昨日もそうだった。焼きそばパンを買おうと思ってなかったから、東海林はジャムパンにしたのだ。見ると、まだジャムパンは残っている。

「赤龍、」

あまり明るい口調ではない物で、東海林は赤龍に尋ねてみる。

あまり期待せずに、赤龍は東海林へと尋ねてみる。「一応聞くが、何じゃ？」つまり、期待はしていない。

「ジャムパンでいいか？」

東海林も、はつきり言って焼きそばパンが食べたかった。

昨日と同じだ。

ジャムパンを買い、東海林は音楽室前の階段を上って行く。歩く足取りは、どこか重々しい。手に持っているのは、ジャムパンの袋。

「はあ……、」

小さく、東海林はため息をする。

聞いた赤龍にも、ため息が移った。「はあ……」

ため息が移る、なんてことは聞いたことがない。しかし、暗い気

分が移ることはよくある。こういうこともあつていいとは思ふ。欠伸だつて、近くにいれば移るのだ。東海林は強引に、思考を結びつける。

「さて……、」

三階の、音楽室前まで上った。

その先にある教室は、音楽室。

九十度回転すると、そこにあつたのは、普通の教室に入つて行く中三生と、音楽室に目もくれず、スタスタと歩いて行く部員。

「……？」

訳が分からなくなる。

「あれ？」

東海林は、思わず小さく呟いてしまふ。これはおかしい、そう言いきれる光景であつたのは間違いない。

今日は冬休み一日目だ。

その一日目に、どうしてこんな、教室への人だかりができるのか、東海林には不思議で仕方がなかった。

「？」

音楽室の方に視線を向ける。

そもそも、時間にルーズと言うこともあつてなのか、誰もない。

そこには、音楽科の先生がいる気配すらない。

「……どうなつてるんだ？」

小さく呟いた東海林の声に、赤龍の面倒くさそうな声が答える。

「今日はまだ、冬休みでない気がするけどの、」

この状況から考えて、余りにも当てはまりすぎている物だった。

しかし、それは非常に妙なことでしかなかった。

昨日、東海林は絶対に終業式に出た。あの完結しない校長の話を長々と聞かされて、眠くなりながらも部活に行つて、それから今日になった。つまり、今日は終業式ではない。今日は終業式ではない、はずなのに、何かがおかしい。

今日が、まるで終業式のような、そんな雰囲気がある。

生徒の数と言い、音楽室の人のいなさと言い、全てがその方向に向いている。今日は冬休み一日目ではなくて、終業式の日だ、と言う方向に。

それはおかしいことではない。

あくまで、東海林はそう認識している。

思った東海林は、少しばかり目を閉じる。若干の諦観が、東海林の中に現れたのは、別におかしな話でもなんでもなかった。

「赤龍、」

徐な口調で、東海林は赤龍に呟く。

聞いた赤龍は、「うむ？」なんでもない、と言ったような視線を東海林の方に向ける。少しばかりこわばった口調で、しかし東海林は、確実に赤龍へと、質問する。

「今日は、終業式の日……、なんだな？」

尋ねた。

もしかしたら、と思う。東海林は昨日、とてもリアルな終業式の夢を見たのだ。だから、終業式があった、と思い込んでしまったのだ。それほどまでにリアルな夢でなかったら、ここまで東海林が混乱することもない。

どこか腑に落ちない。

そう思えるところもある。東海林としては、昨日が終業式だったと思えるのだ。東海林は絶対に終業式へ出た。そして部活をして帰った。はつきりと、記憶の中に残っている。寝る前、赤龍が塩ラーメンを食べていたことだって、東海林は覚えているのだ。

なのに、それはおかしい話なのだ。

終業式は今日で、昨日は終業式ではない。もしそうなのだとしたら、考えられることは結構ある。もしかしたら、東海林だけ一日タイムスリップしてきてしまった、と言うことも考えられる。思わず考えてしまう。もしかしたら、ただのサプライズなのかもしれない、とも東海林は思える。

だが、どれもしっくりは来ない。

おそらく、結果が出てもしつくりくるものではないだろう。東海林は心の中で思うと、赤龍の方を一瞥する。

赤龍は答えを口に描き出そうとしている。

つまり、赤龍なら知っていると云うことだ。今日が何の日で、昨日が終業式であつたかどうかを。

考えるだけ無駄だつた。それなら、考えずに、この流れに乗つてしまえばいいことなのだ。その方が、東海林の精神的負担も軽い。それに、それが一番利口な方法だと思えた。あくまでも、東海林には。

「そうじゃ、今日は終業式じゃ」

言葉は、張りつめている空気と、弛緩しかけた思いを震わせる。それだけだつた。だが、聞いた瞬間、東海林の荷が少しばかり軽くなつたような気がしたのは事実だ。

理由はどうあれ、東海林は今、終業式前の今にいる。昨日やつたと思つていたが、実は今日だつた、と言つただの早とちりだ。もしかしたら、夢で終業式を行つたのかもしれない。さっき考えたように。

これ以上の詮索は無用だ。

思い当たると、東海林は「つてことは、昨日は普通の学校だつたんだな？」と、赤龍に尋ねてみる。

案の定、赤龍は一度頷く。

「うむ、それ以外にないからの」
言つて見せた。

聞いた東海林は、小さく吐息を吐く。それから、音楽室から出て行くこうとする。「それじゃあ、終業式の準備をしないと」あくまで、自分では前向きに進むつもりだ。それ以外は、後退しかない。そんな気がしてならなかつたが、こういったことがあつても、いいのかもしれない。

東海林は思う。また、校長の完結しない話がだらだらと続き、そして、部会だけだと思つていたら部活になる。昨日と同じだ。なら、

東海林は昨日と同じことをすればいいだけだ。
それだけのことだった。

これが、既視感と言う奴だろうか。一瞬だけ、東海林は疑問に思えてくる。

既視感と言うのは、『この出来事、この場所、この会話を、以前どこかでしたことがあるような気がする』物だ。しかし、東海林にあるのは、『この出来事、この会話を、以前した』断定なのだ。もしかしたら、そう言った既視感と言う物も存在するのかもしれない。あまりにもはつきりした既視感、デジャヴ。終業式の繰り返し。

そんな気がするの、きつと東海林だけかもしれない。

しかし、校長に同じことを聞かされているような気がするの、あまりいただけない。部活や終業式だけならいいのだが、何だか、校長に『昨日と同じことを説明されている』ような気がするの、ない。まるで、頭の出来が悪いやつにものを教えるような、そんな勢いな気がしてならない。

「あの校長は、一体何を言っているのじゃ？」

昨日と同じだ。

赤龍の声だ。昨日と全く同じことを言っている。東海林の記憶も若干曖昧だが、そんなようなことを、赤龍が東海林に言ったのは覚えてる。つまり、これも既視感、と言うことになる。

「さあ、」

昨日と同じ返事をする。

同じ質問なのだから、同じことを返してもいいはずだ。そうすれば、きつと同じ答えが返ってくる。

「喋っていて、楽しい物なのかの？」

同じだった。

案の定、赤龍は同じことを言った。

なんとなく、楽しい気がしたのは確かだった。しかし、それ以上ではなかったことは確かだ。あくまで、今楽しむには十分なものだ。「多分、楽しいんじゃないか？」

台詞を変えてみた。

そうしたら、一体どういう会話になるのか、東海林には興味があった。昨日は「さあ、」と言言っただけだったが、今回は、そう言ってみる。

「飽きない物なのかの？」

あれ、

それは、東海林にとって予想外と言えば、予想外だった。しかし、会話の繋がり方としては、別におかしなところは何も無い。しかし、その台詞は昨日と同じものだ。昨日、東海林が「さあ、」と言った後に呟いた言葉と同じ。

少しばかり考えて、東海林は台詞を考えてみる。

「さあ、」

昨日とは違う。昨日、「飽きないからやってられるんじゃないのか？」と言ったが、それに対しての台詞がどう変わるのか、東海林には楽しみだった。

「うーむ、」

同じだ。

予想内だったが、少しばかりそれだとつまらないものがある。

校長の話も、同じ話の繰り返しだ。言いたいことが二点、そのうちの一点についてが二点。一点目の一つ目について……。

どこまで話を細かくしていけば気が済むのか、この校長は。

そう思いながら聞いていたのを覚えている。

思った矢先に、この台詞だった。

「それでは、先ほど述べた三つのことに加えてもう一点。考える、学ぶと言うことの大切さと、思いやる気持ちのことについてが一点、そのうちの一つが、言動にあると、私は解釈しております」

話が、長く、細かく、それでいて、完結しない方向に延びて行っ

ている気がするの、東海林の気のせいだろうか。ここでブーイングをすれば、校長は去るだろうか。

それはあまりにも失礼すぎる、東海林は思うと、小さく深呼吸をした。

「校長と言うのは、話を細かくするのが好きなのじゃな」

赤龍にまで言われてしまうが、これも昨日言ったことだ。

東海林は聞くと、呆然と校長の方に視線を向ける。昨日と言っていることが同じで、完結するのかしないのかも分からない説明を述べている。せめて、バリエーションがあればまだ救いもある気がするが。

「そうだな、」

心無く、東海林は言うしかなかった。

「あんな話をしていて、面白いとは思えんのじゃがな」

小さくぼやくように、赤龍は昨日と同じことを言う。昨日と同じすぎて、東海林はどちらにも呆れてくる。赤龍に対しても、校長に対しても。

あまりにも淡々としすぎているように見えて、東海林は思わずため息を吐いた。

それを言い咎めるのも、なんとなく予想が出来ていた。

終業式が終わり、東海林たちは教室に帰る。昨日と同じような慌ただしい空気が、教室内に漂っていることが分かる。慌ただしくもあり、この空気は、どこかほのぼのとしている。間違っではない。「なんだか、校長の話がいつにもまして、つまらなかった気がする」小さくぼやくように、東海林は赤龍へ呟く。

聞いた赤龍は、「いつもの事じゃ、あの口ぶりは」東海林に答える。冬だからか、暖房がついている。しかし、だからと言って、夏ほど暑くはなかった。春のポカポカとした陽気に近い温度だった。

赤龍には、冬の外気の方がいいのかもしれないが。

「っていうか、最初っから言いたいことが二点って言うてるのに、

どんどんどんどん話を付け加えていつてよ、どんどん細かくなつていくなんで、俺はうんざりするな」

零すように、東海林は言った。

「いつもの口ぶりじゃが、もしずっと、近くでそう言った話し方をする輩がいたら、鬱陶しいことこの上ないかもしれないの」

小さく、例えるように赤龍は言った。

それを聞いた東海林は、そのことを思わず想像してしまう。もし、近くににいる奴（赤龍）がいつも、校長みたいな話し方をしていたら、さっきの一文はきつところなる。

さっきの一文↓「言いたいことは一点、いつも通りの口ぶりと言うことあつて、と言うこともあるのじゃが、それについて一つは、余りにも長々としすぎているという点があると言うことじゃ。二つ目が、話が的を得ていないと思われることもあるじゃろっし、あまり使すべきではないと言うことじゃ。もう一つ言わせてもらつと、二点目が、もしそう言った言葉、さっき言ったような、長々とした話し方、でしゃべる輩が近くにいたとしたら、あまり好意的にはなれない、と言うのと、鬱陶しいことこの上ないと言うことが上がるかもしれない」だめだ、もう訳が分からない。

考えてみるが、東海林には理解不能な語列になる。そもそも、それに細かな意味なんてものが含まれているのか、なんて考えられない。

「うーん……、」

頭の中が、ぐちゃぐちゃとしたもののたまりとなる。思考が低迷し、整理しきれなくなる。

「東海林、」

声が聞こえた。

赤龍の声であることは、確かだった。

聞くと、東海林は赤龍の方に視線を向ける。少し困ったような表情で、東海林は「な、何だよ……、」と呟く。

「何か妙なことを考えておつたの」

核心を突かれた。

もうこれを、さっきの言葉で直すのはこりごりだ。思いながら、東海林は「まあ、な」と小さく言った。

「まあ、どうせろくなことを考えていなかったんじゃろうけど」
その通り。

さっきまでの口調では考えられないほど完結している言葉を連発しているのは、東海林の考えた口調でしゃべっているわけではない赤龍だった。どこか、東海林は焦っている。

「どうせ、誰かの言葉を、さっき言っていたものに直しておったのじゃろ？ どうせ」

目を逸らす。

そこまで見通されているとは思わなかった。「そもそも、そうしようと考えた東海林が、赤龍には分かんがな」どこか軽蔑するような、そんな口調で東海林に言った。それを言い咎める気はしない。「少しは考えてみたくなるもんだよ、」

東海林は小さく、赤龍に言った。

傍にいる赤龍が、やはり分からない、と言うような表情を向け、少しばかりあくびをする。あくび交じりに、「そういうものかの……」声が発せられる。

「そう言うもんだ」

強引に、東海林はそう促した。

その時だった。

隣の生徒が帰ってきた。

東海林の席は、教室の一番隅だ。そこには近くににいる人が二人しかいない。縦と横の二人だ。

その一人に、東海林は声をかけた。

傍には、緑色の龍がいる。

「おい、^{だいすけ}大介」

聞いた大介は、東海林の方に視線を向ける。

それと同時に、緑色の龍も東海林の方へと視線を向ける。

「あ、東海林さん」

どこか明るい口調で、その緑色の龍が答える。

「りょくじゅう緑龍にも、ちょっと聞きたいことがあるんだ」

東海林は言った。

聞いた大介は、さつきと変わらない表情で、「何だ？」と尋ねてくる。すぐに東海林は、二人（一人と一匹）に尋ねる。

「今日って部会だよな」

この質問なら、別におかしなことを勘ぐられずに済む。

案の定、大介は特に何も考えていないような雰囲気で、鈍った口調を使って答える。

「ああ、部会だけだな」

聞いた東海林は、音楽室の方に視線を向ける。音楽室前の廊下には、誰もいる気配がない。先生まで、そこにはいないように見える。「そうか、なるほど」

納得するように東海林は言う、少しばかり考える。

終業式、それから部会。

何もかもが同じだ。まだ部会が部活になると言うことも、大介は知っている様子ではないし、そもそも、本当にそうなるのかも分からない。まだ、部会が部活にはなっていないのだ。夢だったとしても、まだ疑う必要はありそうだ。

思いながら、東海林は小さく吐息を吐く。

「どうしたんですか？」

丁寧語を使うのは、この範囲だと緑龍しかいない。

その声を聞いた東海林は、緑龍の声がした方向に視線を向ける。

そこにいるのは、勿論緑龍だった。

「え？」

小さく、東海林は言ってみる。

緑龍は、すぐに東海林へと言葉を繋げる。

「いや、僕の勘違いかも知れないんですけど……、」

どこか、シャイな雰囲気で緑龍は言う。

しかし、その声がどこか、的を射ているような気がする。東海林にはする。緑龍は、何か気付いているのかもしれない。

「少しだけ、東海林さん、慌ててる？ ような……、気がするんですけど」

それは、間違ったことではない。

聞くと、頭の中でぐちゃぐちゃとしている出来事を、東海林は一気に整理していく。だが、うまく整理できていないことは確かだ。東海林は、少しだけあわてている。

「……、」

答え方が、うまく思い当たらない。

それだけだったか、小さく深呼吸をすると、緑龍の方に視線を向ける。

「大丈夫、慌ててはいないから」

東海林は嘘をついた。

もし、慌てていると言ったら、どうしてかと聞かれるだろう。その時に嘘を付けばいい話だが、どの道、嘘をつく羽目になる。

今日の出来事を、東海林がすでに知っているなんてこと、悟られてはまずい。

「そう……、ですか？」

腑に落ちないような表情で、緑龍は東海林に尋ねてくる。

聞いても、「ああ」としか東海林は答えられない。若干の焦燥が、東海林の中でとぐるを巻いていることは確かだ。

「俺は大丈夫だ」

言ってみせた。

何が大丈夫なのかもわからないし、何が大丈夫でないかなんてもと東海林には分からない。だが、東海林に言えることは、この先憶羅先輩に集中攻撃をされる、と言うことくらいだろうか。

心の中で東海林は思いながら、部会だけになるはずだったミーティングに出席する。話は、やはり以前と同じだ。つまり、こういうことだった。

「冬休みの練習については、日程表の通りなんだけど、でも一つだけ訂正」

あまりにもそのまますぎて、東海林は少し困ってしまう。聞いたことが、何もかも同じだった。勿論、東海林はため息に近い空気を吐き出したくなる。赤龍がいるから、東海林は我慢している。

「今日、部会って書いてあるだけなんだけど、ごめん、練習入れる。部長がどうしても入れたいって言うから」

ため息をしたくなる。

昨日と言っていることが全く同じだ。

訂正と、それから今日の部活について。

つまり、以前聞いたことは、間違いではなかったと言うことだ。

校長の話は、いつも通りあまり聞いてはいなかったし、いつも同じようなことしか言わないから、以前聞いたものと全く同じだという確信がなかった。しかし、余りにも同じすぎるその台詞に、東海林は嫌気がさしてくる。

「東海林、」

赤龍の声だ。

大体、何を言いたがっているのかは分かっている。

「顔が死んどるぞ」

同じだ。

心の中で、そう呟いてみせる。昨日と全く同じだ。同じすぎて、東海林は困ってしまう。だが、同じでなくする方法は簡単だ。

「はあ……、」

ため息を吐く。

聞いた赤龍は、「うむ、」小さく声を発する。赤龍の声は、そもそも一般人には聞こえない。聞こえていたら、今頃パニックになっている。

「東海林、ため息は厳禁じゃ。特に赤龍の近くではの」
大体予想がついたが、昨日とは違う。

聞いた東海林は、「以後気を付けるよ、」心無く赤龍に言った。
「もつと言葉に気持ちを込めるのじゃ、そうでないと、相手に気持ち
ちは伝わらんぞ」

どこかで聞いたような台詞を、赤龍はそのままぞつてみる。そ
んなことを言われても、東海林は気持ちを込めるつもりなんてない。
そもそも、気持ちを込めたところで、きっと今の赤龍には分からな
い。

「……ということで、予定は大体こんな感じ。今日はずっとパー練
だから、サボらないように」

顧問の先生が言っていることは、余りにも以前聞いたことと同じ
だった。同じすぎて、東海林には困ってしまう。みんなの表情を見
てみるが、どこか気怠そうな雰囲気か否めない表情ばかりだった。

それだけは確かだ。

「赤龍、」

言ってみる。

東海林の声を聞いた赤龍は、「うむ？」と小さく言ってみる。

どこか億劫そうな表情で、東海林は呟いてみる。

「俺、帰りたい」

以前も思った。

今回も思っている。

そして、そのすぐ後だ。

「それでは、練習開始！」

顧問である先生の、軽快そうな声が、第二音楽室に轟いた。
少しだけ考えてみる。

だから、次にこう言った行動に出た。それは、ある意味東海林の
中では定石と言える行動だったのかもしれない。

以前と違う方向の告白

東海林は、赤龍に乗っていた。

今日は部活がある。そんなことは以前から知っていた。いきなり言われたことも、もう東海林には予想がついている。

だから、東海林は今飛んでいる。赤龍の背中に乗って、今飛んでいるのだ。

「東海林、」

どこか、腹黒いものを孕ませた口調が、東海林の耳に届く。

「何だ？」

赤龍へ言葉を返す。

昼間の太陽は明るくなく、淡々とした空が、徐々に日中を迎えていく。昨日見た光景とは違う。違うし、これは東海林が選んだことだ。これが運命なのだとしたら、恐らく『C・Flag』だろう。東海林は思う。

「東海林も、サボる時はサボるのじゃな」

楽しそうな、そんな口調だった。

青と深蒼の狭間が、あいまいな空気で覆われている。手を伸ばしても、その先には届きそうもない。朝と昼の間を、東海林は赤龍で飛び交う。

「……、まあ、な」

やることなんてない。

バッグの中には、冬休みの課題が入っている。

それだけのことだ。それだけのことで、東海林の心の中にあるのは、あくまで心憂さだった。どこか億劫だったと言うこともできる。

川の下を覗いてみる。

猫が溺れている。

「そう言えば、」

思い出したように、赤龍が東海林へ声をかける。

聞いた東海林は、赤龍の方にそつと視線を向ける。昨日と違う方向には、何か火がう物が開けているのだろうか。少しだけ、そんなことを考えてしまう。

「昨日言っておつたの、今日はゲームの発売がどうたらと」
的を射ていなかった。

しかし、それはあながち、間違いでもないかもしれない。東海林が以前帰りたいと思つたのは、そう言つた意味も含まれていた。ゲームを買うため、と言うことでもある。今はそれだけではない。

「……そうだな、今日はゲームの発売日だ」
言つた。

もし今日ゲームを買つたら、明日について何か変わるのだろうか。考えてみる。

以前は、部活でゲームを買うことなんてなかった。だが、今はゲームを買うという選択肢が残されている。ゲームを買えば、明日何が変わるのか。

明日も部活で、変わらない。そもそも、明日が部活であつたとしても、部活は午前中だけだ。午後にゲームを買つて、明日やることだつてできる。もともと、東海林はそうするつもりだつたのだ。

今日ゲームを買つても、明日ゲームを買つても、ゲームを買つて言うこと自体は変わらない。変わるのは、今日の部活内容だけだ。東海林がいらないのだから、集中攻撃は出来ないはずだ。と言うことは、きつと誰かがとばつちりを受けているに違いない。

「どうせ、そのためにサボつたのじゃろ？」

赤龍の、分かり切っている、と言うような口調が東海林に届く。一瞬、どう反応していいのか、東海林にはよく分からなくなる。笑えばいいのか、怒ればいいのか、沈黙を保てばいいのか。

何もかもお見通しだと思つている赤龍は、きつと幸せに違いない。考えが至つた。東海林は、その幸せを崩そうとは思わない。

「まあな、よく分かつてるじゃないか、」

無理矢理な口調で、赤龍に呟いた。

強引に口を開いたせいか、いつもより舌回りが悪かったように思える。それを悟られないように、更に言葉を繋げていく。

「俺がゲームを買いたいって、以前も言ってたのもあるだろうけどさ。まあ、そう言うこった」

聞いた赤龍は、「うむ、」どこか、軽快な口調に聞こえる台詞を呟く。

「赤龍には、東海林のことなどお見通しじゃ
もし、

それが本当だったら、そっちの方が東海林にとって、いいことだったのかもしれない。あくまで仮説として、東海林はそれを受け取っておく。あくまで、仮説として。

「かもな、」

あくまで、おどけた風に聞かせた口調で、東海林は言った。

ゲームを買い、寮に戻る。そこから、赤龍と長々とゲームをする。その時間だけ、東海林は妙しながらみから、解放された気分に見える。ゲームだけが、もしかしたら東海林のよりどころかも知れない。そう思える。

「ケアルじゃ！今使わんと……ッ！」

けたたましく、赤龍は東海林に声を張り上げる。しかし、そんな暇はなかった。そんな暇は全くなく、残りHPが、ボスの打撃によって消えていく。そして流れてくるBGMは、レクイエムにも似た暗い曲であることは確かだ。

「あのタイミングでそれは無いだろ、」

呆然としながら、東海林は小さく呟いた。まだ少しHPは残っていた。戦闘不能のパーティーがほとんどだったが、まだHPが残っていた。あつたのは、ほんの少しのHPと、それからボスの打撃。

強引に、スタート画面へ戻される。

それに、東海林はがっかりとする。あまりにも納得のいかない終わり方に、東海林は納得のいかなかったため息を吐く。

「はあ……、」

いつもなら、赤龍がこのため息を言い咎めるところだ。

今日は、少しだけ言い咎め方が違った。

「東海林！ため息をするくらいなら、あのボスを倒しに行くのじゃ！次回は絶対に負けるでないぞ！」

声を張り上げる。

東海林は赤龍の方に視線を向ける。「まあ、頑張るよ」小さく言う
と、再び『続きから』を選択する。その画面に表示されたのは、
見覚えがあるとしか言いようがない、セーブをした場所だった。つ
まり、ボスの前。

レベルとして、まだ全体的に低い。さっきのボス戦でも思ったが、
まだボスと戦って勝てると思えない。

「ちよつとレベル上げしようか、」

小さく言つと、東海林はボスの方から遠ざかり、ダンジョンを戻
つて行く。

「うむ……、あまり腑に落ちんがな」

赤龍もゲーマーの端くれだ。レベル上げがどれだけ重要かくらい
は、少しなら分かつているはずだ。東海林は思いながら、敵にぶつ
かつては、倒していく。

数十回、淡々と繰り返し返したところで、やっとレベルが少し上がっ
た。レベルがいくつか違うだけで、格段に強くなることを、東海林
は知っている。もしここで、やり込み派のゲーマーなら、もっとレ
ベルを高くするかもしれない。それこそ、今の倍くらいにはするは
ずだ。

「さて、行くか、」

言つと、東海林はダンジョンの奥に進んで行く。戻って行くと言
つても間違いではない。ダンジョンのBGMと言つよりも、聞こえ
てくるのは赤龍の声。

「今度こそ、ボスに適うはずじゃな」
小さく言つた。

聞いた東海林は、「多分な」と呟いてみる。

はつきり言つて、勝てるかどうか、は問題ではない。ここで問題になるのは、勝つか負けるかではなくて、どうやって勝つかだ。

ゲームは、ゲームバランスを考えて作られている。それがきつちりとしているから、ちゃんとしたゲームになるのだ。そう認められるのは、プロが作ったゲームくらいだ。東海林は少なくともそう思う。

「今じゃ！サンダガ！」

言われなくとも、東海林はサンダガを繰り出して見せる。

雷のような物が画面に現れ、ボスに命中していく。それと共に、ボスはばらばらになって、風に流されていく。

「ふう……、」

小さく、東海林は安堵の息を吐いた。

「ざつとこんなものじゃな」

何故か、赤龍が画面を見ながら威張るように声を張る。赤龍はそう言う奴だ。東海林はよく知っている。

「まあ、今までそんなにレベルを見てなかったからな、少しはレベルのことも考えろってことだろ」

呟くと、すぐにセーブをして、東海林はゲームを止める。

「うむ、もう終わりかの」

どこか不服そうに、赤龍は小さく呟いた。

聞くと、トップ画面に戻った『or o』を赤龍に見せる。端に、小さく時計が表示されている。時間は『19:22』。

「うむ……、」

その時間を見て、赤龍は少し意外そうな顔をする。意外そうな顔は、東海林にとって予想内の物だったことは確かだ。

「続きをやってもいいけど、やるのは食事の後だ」
呟いた。

思い出された。

以前の食事の内容。それは、塩ラーメンだった。どのラーメンかまでは覚えていないが、塩ラーメンであったことは確かだ。

赤龍が塩ラーメンを取るのは、いつものことだ。それが昨日と同じものなのか、そうでないのかなんて分からない。だが、分かることがある。

東海林以外が、殆どすべて、以前と同じだ。それが、はつきりと見て取れたのだ。

確かに赤龍は、多彩な行動をとるわけではないし、一日の行動に關しても、バリエーションが豊富と言うわけではない。

そう言う問題ではなくて、あくまで、行動順序的なものだった。全く同じ、とまでは言いきれないが、ほとんど同じだった。確かに、それもバリエーションがあるわけではない。赤龍の行動だけでは、以前が同じように繰り返されている、と考えることは難しい。

しかし、それ以上の証拠を、東海林は持っている。そう言いけることも、確かではあった。

今日、終業式が行われた。

それが事実だ。

考えてみれば、それは夢だったのかもしれないし、あまり科学的ではないが、予知夢だったのかもしれない。だからと言って、顧問の先生が言った言葉まで予知してしまうというのは、どこか外れたものがある。せめてあるとしても、今日終業式がある、と言うことだけだ。

本当にそうなのか？

その論には、余りにも猜疑的なものがある。東海林には、どうしても信じられる気がしなかった。

「……、」

あまり面白くなさそうな表情で、東海林はラーメンを見つめている。以前と同じラーメンかどうかは分からない。分かることは、塩ラーメンだと言うことだ。

「お疲れじゃの、」

確信を持った。

赤龍が言っていることを、東海林は聞いたことがある。聞いたことがあるし、答えたこともある。以前は部活帰りについてだったが、今は、少しだけ違う。

「そりゃ、ゲームやってたからな、結構」
言ってみる。

聞いた赤龍は、「まあそうじゃな、休憩も入れずにあんな時間やっていたんじゃ、疲れていても不思議ではあるまい」あまり、何でもないと言った雰囲気です。東海林に言う。

「何だか、他人事みたいだな」
ぼやいてみる。

赤龍は、「じゃって、ゲームをやっているのは赤龍ではなく東海林じゃ、赤龍が疲れる道理は無かるう」以前と同じことを言っている。きつと、本人の意識では無いだろう。どちらかと言うと、思いついた言葉をそのまま告げているだけ、のようにも見える。

「……、まあ、そうか、そう言うもんか」
考えながら、東海林は呟く。

疲れているわけではない。

はつきり言って、東海林があんな短時間ゲームをやっただけで、疲れるわけがなかった。短時間と言っても四時間以上は軽くあるが、それでも、東海林にとってはそんなに長い時間ではない。

問題は、そんなことではない。

東海林は疲れているわけではない。

「……、」

沈黙する。

考える時間がある。東海林には、それなりに考えてから行動するべき思考がある。ゲームをやりたいという思考もあるが、それとこれとは話が別だ。

「やはり、ゲームはもうやめた方がいいのかの？」

赤龍が聞いてくる。

その理由を考えるまでもなく、東海林は赤龍に答える。

「お前が眠いだけだろ」

以前、赤龍は夕食を取ったすぐ後に眠ってしまったのを覚えている。つまり、そう言うことだ。

「む……、そう言うわけではあらん、赤龍はただ、東海林のことを考えてじゃな……、」

言い訳をしている赤龍が、どこか可愛く見えてしまうのは気のせいだろうか。考えてみる。赤龍は、一体いつからこの寮にいたのだろうか。

考えても、無駄なことだと思う。

そう考えると、東海林は小さくため息を吐く。腹を割るような勢いで、東海林の心は固まって行く。

「……、赤龍、」

小さく、名前を呟く。

それを聞いた赤龍は、丸い目を東海林に向ける。「うむ？」軽く、返事をしているつもりで東海林に言った。

言う。それしかない。

考えが固まった。

「実は、俺、」

今日の事、以前にも経験してるんだ。

初め、赤龍には全く意味が分からなかった。

もしかしたら、東海林の思考回路がどこかで焼き切れてしまったのかもしれない。莊も考えていたが、東海林は赤龍に、言葉を続けていく。

「今日の終業式、実は以前と全く同じものをやってるんだ」

聞くと、「どういうことじゃ？」軽く、ラーメンを啜りながら赤龍は尋ねる。「え……、」一瞬だけ東海林は呟くが、改めて、口調を固める。

「校長の話とか、お前の話すこととか、今日の部活の事とか」

赤龍には、いまいち東海林が何を言いたいのかわからない。

「つまり、どういうことじゃ？」

聞いてみる。

東海林は聞くと、喉を少しだけ乾かしながら「ああ、」赤龍に言った。

「今日部会があっただろ？予定表にも部会とだけ書いてあったんだけど、でも、今日は部活になった。そうだよな？」

聞いた赤龍は、疑いようもなく一度頷く。

「そうじゃな、」

そのまま、東海林は話を進めていく。

「それを、以前……、と言うか昨日と、全く同じだったんだ」

赤龍の視線が、東海林の方に一瞥をくれる。しかし、すぐラーメンの方へと視線を向ける。ただ、ラーメンを啜って行く。

「それだけじゃない、俺は昨日、絶対に終業式をやった。でも、今日と同じことを今日もやってた。それだけじゃない、朝のニュースだってそうだ、例年より暖かい気温が続く、昨日も同じニュースだった。気圧についてのニュースだ。俺はそれを昨日見た。俺はもう、昨日のうちに終業式をやってたんだよ！」

ある意味おかしい話だが、

やっと、赤龍の中で、朝に交わした会話のつじつまが合った。

「じゃから、東海林は今朝、今日が冬休み一日目じゃと言ったのじゃな？」

初めて知った。

赤龍は、東海林が考えているほど固い思考を持っていない。もっと柔軟な、何かを持っている。それだけは確かだ。

「……ああ、」

勢いを衰退させずに、東海林は赤龍へ言葉を放った。

ラーメンを勢いよく吸い上げると、赤龍は、「じゃが、」と東海林に呟く。その逆説にも、東海林は驚いてしまう。

「今それを、赤龍が知ったところで何にもなるまい。まあ、東海林の心の荷が軽くなる、と言うのはあるのかもしれないが、の」
呟いた。

まるで、東海林の中にあつた、妙な焦燥感を察知していたようなそんな口ぶりだった。もしかしたら、赤龍は本当に、それを気づいていたのかもしれない。気付いていて、気付いていないふりをしていた。

東海林のため？

それとも、興味がなかったから？

それこそ、赤龍の内面的な話になつてしまう。

しかし、東海林が妙な焦燥感に駆られていたことは確かだ。それは確かなことだし、今さらそれを否定する気もない。

「……よく、分かつてるじゃないか」

小さく呟く。

聞いた赤龍は、微笑するように、東海林へ視線を向ける。「赤龍を誰じゃと心得る？赤龍は赤龍じゃぞ？火炎を司る龍じゃぞ？」どこか誇示するような口調で、しかし穏やかに、東海林へ言葉を放つ。
「そう……、だったな」

小さく笑い飛ばすと、赤龍に言った。

「おみそれしました、火炎と時を司るギールさん」

赤龍の正確な肩書は、確かそうだったはずだ。「そんな妙なことばかり覚えておるから、東海林は勉強が出来んのじゃ」余計な御世話だ。

「しかし、時と言うのがどうも、赤龍にはぱつとせん」

疑問げに、赤龍は呟いた。

そして赤龍は、はつとなる。「もしや、この会話も昨日交わしたのかの？」東海林に尋ねてみる。

聞いた東海林は、「いや、こんな会話はしてないよ」正直に話す。それを聞くと、「ふーむ、同じことを繰り返しているわけではないのじゃな」どこか、何かを納得するような口調で東海林に言った。

「多分、」

東海林の声だ。

赤龍は聞くと、東海林の方へと、視線をまっすぐに向ける。茶を濁す暇もなく、東海林は言葉を繋げていく。

「俺がいるからだと思う」

それは、東海林の率直な意見だった。

「それは？」

尋ねてくるのは、赤龍だった。

「ああ、実は昨日、俺部活出たんだ」

聞いた瞬間、意外そうな視線を、赤龍は東海林へ向ける。てつきり赤龍は、昨日もサボっている物だと思っていた。「何だよその眼は、」東海林は赤龍に問う。

「つまり、東海林が昨日と別のことをしているから、全て同じことを繰り返しているわけではない、と言うことなのじゃな？」

逆に、尋ねられる。

はつきりと断言できるわけではないが、そうでないと言い切れない。「まあ、」と軽く、東海林は返事をする。

「そう考えるとさ、」

東海林は言う。

何かから目を逸らすように、赤龍は東海林へ視線を向ける。

「以前、憶羅先輩の言ってたことが、何となくわかったような、そんな気がするんだ……」

小さく、零すように呟いた。

「どうということかの？」

小さく、零すように尋ねる。

聞いた東海林は、「いや、ほら、」たどたどしい口調を放ち、頭の中で言葉を練り上げていく。

「以前、言ってただろ？『C・Flag』は、どんなものを選んでも、大きな流れは変わらない、って」

赤龍は目を細める。「うむ、確かそんなようなことを言っていた

ような、記憶はあるの」「薄れかけている記憶を、鮮明に蘇らせようとする。

「だからさ、『C・Flag』でもなんでもないことを、そもそも変えようとしたところで、大きな流れは変わらないんだ。ちよつとは変わるけど、本当に、些細なことしか変わらない。小さな会話一つとか、な」

たえて言うなら、この会話だ。

こんな会話を、昨日交わした覚えがなかった。そもそも、昨日はゲームを買った覚えがなかった。

「俺が今日買ったゲームだって、今日買おうが明日買おうが、そんなに大差なかったってことだろうしな」

呟いた。

「はじめはさ、どんな小さなことでも、やってることが変わってたら、後々とっても大きな変化になると思ってたんだ。だから、はじめその憶羅先輩の一言聞いて、とっても疑問だった。運命のどちらを選んでも、大きな流れは変わらない、なんてさ。でも、よく分かった」

どこか、諦観のようなものに近い。

それは、東海林の中にあつた何かを諦観で埋め尽くした。だが、それは虚構でも、机上の空論でも、何でもない。事実だ。

「俺が今日部活に出ようとさぼろうと、ゲームを買おうと買うまいと、大きな流れは、変わらないんだ、ってな」

どこか、悲しいような気がしてならない。

だが、それを悲しむ道理もない。ただ、東海林はそれ自体が悲しいと思えただけだ。ただそれだけだった。

東海林の言うとおりだったし、赤龍にはその感覚が理解できない。ただ、その通りだと思っしかなかった。だからこそ、赤龍はどう東海林に話しかけていいのか、全くと言って分からなかった。

「明日、」

ぽつりと、東海林は呟く。

「うむ……？」

赤龍は言い、東海林の方に視線を向ける。東海林は、伸びきった塩ラーメンの方に視線を向けている。赤龍のカップには、もう何も残っていない。

昨日と同じだ。

「なんて、本当に来るのかなー、なんてさ、ちょっと考えちゃった」
強引な笑みを浮かべる。

どこまで強引かが、赤龍にはよく分かる。それ以上にはつきりと、赤龍には分かる。

「どうなんだろうな、本当に……、」

少しだけ、悲しそうな、そんな雰囲気もあった。

そう考えるのも、間違いではなかった。むしろ、考えて自然なことだった。

昨日と今日が、同じだったのなら、もしかしたら、明日も昨日今日と同じかもしれない。明後日もそうならない可能性がないとは言い切れない。

一日繰り返されてしまったのだから、『絶対はない』なんてことは言いきれない。ただ、『絶対にそうだ』とも言い切れない。

こんな時、少しだけ憶羅先輩がうらやましくなる。

運命が分かっていたいれば、少しくらいは受け入れる準備と言う物もできる。猫がおぼれていることだって、東海林は知っていた。現に、今日は猫がおぼれていた。それを知っているから、知っていたから、東海林はそんなに驚かなかった。

あの猫は、一体どうなったのだろうか。

生きていても、死んでいても、大きな流れにとっては、無いも同然の事なのだろうか。

「大丈夫じゃ、」

勢い任せにしか聞こえない赤龍の声だ。

「……、」

声にならない言葉を呟き、東海林は赤龍の方に視線を向ける。赤龍は、どこか呆れている風な視線を、東海林に向ける。

「もし今日が繰り返されたとしても、東海林ならそれを、面白いものに出来る。それに、嫌になったら、明日が来るようにしてしまう。今までだって、そうやって問題を解決してきたのじゃろ？」

違うのか？東海林、

はつきりとした余韻が残る、赤龍の声だ。

それは間違ったことではない。正しいともわからない。ただ、それがどこまでも赤龍の意見であることを、東海林は理解していた。

「……、……」

考える。

確かに、大きな流れは変わらない。

だからと言って、東海林が嫌な思いをしなければならぬことにはならない。どんなことをしてでも、面白い方に流れを作ってしまった方がいい。大きな流れから見れば、それはとてつもなく小さな流れなのかもしれない。何でも無い流れなのかもしれない。

しかし、だからこそ、東海林は自由なのかもしれない。

いざとなれば、東海林には心強い友人がたくさんいる。

それを、東海林は忘れていない。

勿論、赤龍がその一人（一匹）であることも、東海林は覚えていない。忘れるわけがないのだ。

「……、」

小さく微笑む。

強引でもなんでも無い、自然な微笑みであつたことは確かだ。

「そうだな、いざとなれば、赤龍がいるし」

笑うように、東海林は呟く。

「赤龍かの？」

少しばかり意外そうな、そんな表情で一瞬東海林に呟きかける。しかし、なんとなく、嫌な気がしたわけでもなかった。何かこう、ほんわかした温かいものが、赤龍の心を満たしていくようで、代え

って心地が良かった。

「……、それもそうじゃな」

どこか複雑な笑みを作り、赤龍は東海林の方に笑いかける。

「東海林一人では、何をやらせてもだめじゃからな」

おどけた風に、赤龍は呟く。

あながち間違いいではないような、そんな気がしてしまう。聞くと、

「……でも、赤龍がいれば、な」いつもよりは、寛大だったような気がする。

「それで、東海林」

赤龍の声が、東海林の耳に響き渡る。

聞いた東海林は、「ん？」赤龍に尋ねる。

「ラーメンが伸びておるぞ？」

一瞬、

赤龍が何を言いたいのか分からなかった。だが東海林も、ずっとわからないほど頭がないわけではない。

「……えッ」

言っと、東海林は自分のラーメンへ視線を向ける。

文字通り、ラーメンは伸びていた。勿論、ラーメンの汁を吸って、だ。

伸びたラーメンがどれほど食べられたものではないか、特に何も言うことは無い。待っているのは、東海林への苦悩。

目を細めながら、東海林はラーメンを啜る。

「……伸びてる……、」

ぼそりと、響かない声で呟いた。

そのまま、伸びたラーメンを啜るのは、東海林の作業だった。

共通点を持たないようにするため

特に、予想できていなかったことでは無かった。

だからと言って、それが東海林に何の負担もないかと言うと、それはない。東海林にとってある意味これは苦痛であり、ある意味これは、あまりいいものではなかった。

そもそも、東海林にとってこの出来事は異端であって、日常ではなかった。赤龍に乗って、普通に学校へ通える日が、なんとなくいとおしくなってくる。そう思うのは、今が日常でないからだ。

おかしいことだったし、それは妙なことだった。

どうしてこうなっているのか、それすら東海林には分からない。分かっていたらこんな苦労はしなかったし、そもそも、はじめからこんな空論めいた杞憂で、物憂いにふけいらなくてもよかったのだ。だからと言って、それが虚構でも、虚像でもないことは確かだ。東海林は納得している。

「……、」

舌打ちか、ため息をしたい気分だった。だが、それをする余裕すら、東海林には無い。東海林にあるのは、考える時間と、それから前向きな思考だ。

バッグの中を覗いていた。

昨日一昨日で、終業式のHRに配られた課題が、入っていなかった。

一昨日配られた課題は、その次の日、つまり昨日までバッグに入ればなしだった。しかし、昨日になった瞬間、課題は消滅した。課題は、昨日のHRに配られた。

つまり、一昨日、又は昨日が繰り返されたと言うことだ。

今日もまた、課題が配られる。また、終業式のHRで課題が配られる。それは誰にでも予想できることだし、誰にでもそうなるはずだ。おかしいことはそんなことではない。そもそも、予想できなか

ったおかしいことなんて、今この場には存在しない。

つまり、今日は昨日だ。

または、今日は一昨日でもある。

はつきりと分かっている。課題がバッグの中に入っていないと言うことは、そう言うことなのだ。『昨日一昨日に配られるはずの物』だった、今は『今日配られる予定の物』となったのだ。

だとしたら、課題がバッグの中に入っているわけがない。課題は未だに、学校のどこかで、配られるのをじっと待っているのだ。それがまた学校に戻って行くのかは知らないが、どの道、課題が億劫にならないわけではない。

「……予想的中、か」

ぼそつと、東海林は呟く。

今日も、終業式だ。昨日も一昨日も終業式だった。そんな学校は普通無い。つまりそう言うことだ。

そもそも、時間がおかしくなっているのだ。

東海林は確信した。

憶羅先輩が、こんなことを言っていた。東海林はそれを覚えている。

時間や空間が存在するのは、『運命』があるから。『運命』がなければ、その二つが共通点を持つはずがない。だから『運命』が歪めば、時間や空間が歪む。それと同じで、時間や空間が歪めば、運命はもちろん、空間と時間も歪む。

「運命……か？」

考えてみる。

何かが歪んだから、今こんなことになってしまっているのだ。だが、以前感じた歪みとは、少しパターンが違うようにも思えた。

合宿の時は、時間がループしていたわけではない。

みんながおかしくなったのだ。

それが、『運命』の歪み、と言うのかは東海林に分かることではない。あくまでわかることは、何かが歪んだ、と言うことだけだ。

ただ、今回はその歪んだものが違うだけだ。

予想だと、恐らく『時間』が歪んだものだと思う。あくまで予想。時間のループが一番表立っているように見えるし、それ以外は特に何も無いように見える。時間が歪んだから、他の二つが歪んだ、と考えてもおかしくは無い。しかし、一番歪んでいるのは『時間』。

歪みを理解できるのは、東海林と、憶羅先輩たち。

つまり、ビースター（Beaster）だ。

「……、……？」

そこでまた、東海林には疑問が湧きあがる。

おかしい話だ。

歪みを感じることが出来るのは東海林だけではない。しかも、この歪みは、合宿の時と同じように大きい。それならば、憶羅先輩たちが東海林の協力を要請してもおかしくは無い、はずだ。

なのに、その要請が来ない。

何かの理由があるのか、そうでないのか。

東海林には分からない。

バグの傍から立ち上がると、東海林はとぼとぼと、ベッドの方へ足を運ぶ。たとえ同じことが繰り返される日だと分かっているけど、東海林はそれに沿おうとは考えていない。昨日思ったことと同じだ。ベッドに倒れ込むと、東海林は思考を再開させる。

何らかの理由があつて、ビースターの応援が来ない、と言うのは十分考えられる。特に憶羅先輩のことだ。裏で何を考えているか分からない。もしかしたら、東海林に関わらせてはいけない『運命』にあるのかもしれないし、憶羅先輩自身が、『C・Flag』の何かを選択したのかもしれない。

それは分からない。

もしかしたら、この歪みそのものを、憶羅先輩たちが意図的に作り上げたのかもしれない。何かしらの陰謀やら策略やらがあつて、『ここ』が歪んでいるのかもしれない。その方が、東海林には納得がいく。あまり現実味があるわけではないが、東海林には納得がい

く。

だが、何にしても、東海林のアプローチがなければ、何もなしとは分かっている。このままいけば、憶羅先輩の陰謀のまま、又は考えの下、物事が過ぎ去っていくことになる。それも、どこことなく東海林には癪だった。

だから、東海林は携帯電話をつかむ。
すぐに開くと、メールを作成する。

勿論宛先は、憶羅先輩だ。それ以外の誰も、今東海林が頼れると考えている人物はいない。あくまで、その考えは変わらない。

『宛先 憶羅先輩

添付 なし

件名 質問

本文 先輩だから話せることなんですけど、終業式が、何回も繰り返されているように思えるのですが、一体どうなっているんですか』

淡々とした文で、東海林はそれを送信する。『送信中』と出てくるが、それだけを見ると、東海林は携帯電話を閉じる。

小さくあくびをして、東海林は目を閉じる。

さつきも述べたと思うが、東海林はそもそも、昨日一昨日に沿った今日を送るつもりはない。だから、それなりのリスクがあると分かっているながらも、自分なりに行動してみるつもりだ。

目の前に、闇が広がって行く。

そこには、バスーンの音が響いていた。

バスーンの音は澄み渡っていて、とても心地がいい音色を辺りに放つ。それらは揺蕩い、また消え、結び、それでいて、ひとところにとどまることは絶対がない。

しかし、同じことだった。それは、いつもと同じことではなく、ただ、どこまでも同じ響きを持った、同じことだった。

「……、」

青い龍が、バスーンを吹いている人物の近くに座っている。昨日と同じことをしている奏者が、昨日と同じように、その青い龍へ問いかける。

「ねえ青龍」
せいりゅう

聞くと、青龍は淡々とした視線で、その人物に視線を向ける。バスーンを持ちながら、その人物はどこまでも、微笑んでいる。それは馬鹿にした笑にも見えるし、単純に、無邪気な笑みのようにも見える。

「このアクセントどう思う？もう少しやった方がいいかな？」

気楽そのものの口調が、青龍の耳の中へ飛び込んでくる。その言葉に、青龍は聞き覚えがあった。

「……、昨日も同じこと質問した」
面倒くさそうに、青龍は答える。

聞くと、奏者が「えー、それはないとおもいまんがな」似非関西弁を爆発させる。「そんな事聞いた覚え皆無だし、そもそも」

どこか怪訝そうに、「……、雄大」ゆうだい小さく呟く。

雄大の視線は、いつもと同じだ。いつもと同じくらいおどけていて、いつもと同じくらいふざけている。

それを、青龍が察知できないわけがなかった。

「だって、」

先に言葉を放つのは、雄大だった。

「こんなこと思ったの、今日が初めてだもん。もしかしたら、ちょっとアクセントが足りないかなーなんて思ったり思わなかったりしたの」

小さくふざけているが、大いにまじめだった。

腑に落ちないような表情もせず、青龍は淡々とした視線を雄大に送る。ただ、なんとなく『危機感』に似た何かがあるような、そんな気がしたのは確かだ。

確か、以前東海林と憶羅先輩が、みんな（大介たち、雄大たち、香奈たち）を集めて、先輩たちについての種明かしをしていたのを

覚えている。確か、憶羅先輩は『運命』のような漠然としたものを、察知できる、と聞いていた。

少しだけ考える。

何故東海林だけに話したのか。何故付け加えるようにしか、憶羅先輩たちは自分たちに話をしなかったのか。

なんとなく、今の青龍になら分かるかもしれない。そう考えた。

「……、雄大」

小さく呟く。

バスーンを咥えようとした雄大が、「ん？」と言いながらバスーンを咥え、それから青龍の方に視線を向ける。青龍は、さっきよりも真っ直ぐとした視線で、雄大の方を注意深く見つめている。雄大には、そんな風に思える。

「……覚えてるかは知らない、……けど、こんな話があった」

バスーンを吹き始める。

話よりも、はつきり言ってしまうと、雄大にはバスーンの方が大事だった。それ以上の物は、もしかしたらないかもしれない。

「東海林が言ってた、先輩たちの事」

それを聞くと、「あー、あれね」納得したように呟く。勿論バスーンは口から離す。しかし言い終えると、すぐにバスーンを咥え、再び音を奏でていく。

「……話によれば、『運命』と時間と空間は一緒。……どれかが歪めば、全て歪む」

それについて、特に何を言いたいわけでもなさそうに、雄大はバスーンを吹きならしていく。音に乗っ取らないように、青龍は話を進める。

「……雄大、頼みがある」

少しだけ、それは意外なことだった。

青龍が雄大に、協力を要請する、なんていうことはほとんどないことだった。最近はめっばうなく、自分がいつも通りに食べていければ、特にそう言ったこともしなかったはずだ。

「……、」

雄大は、バースンの音も止めて、沈黙する。
どこか面倒くさそうにバースンを口から離す。そして、沈黙から言葉を拾い上げていく。

「何？」

いつもより、間延びをしていない言葉だった。
はつきりとしたその響きを、青龍は引き継ぐ。

「……、メールを、してほしい」

とても簡単な、一言だった。
それだけは確かだ。

アラームかと思ったら、その音はアラームではなかった。そもそも、アラームだったらバイブレーションではなくて、サウンドもするはずだ。東海林がアラームに設定しているのは、オリジナルの二だ。オリジナルの一は、なんとなく、東海林の趣味に合わない物があった。ただそれだけのことだ。

「……？」

携帯電話が震える、と言うことは、それなりの理由がある、と言うことだ。東海林には分かっている。このバイブレーションの長さは、メールしかない。初期設定のままではないから、メールと電話のバイブレーションの違いは、歴然だった。

手を伸ばし、東海林は携帯電話を開く。表示されているのは、予想通り、メールのアイコンだった。

もしかしたら。

一瞬の思考は、東海林の中で巡って、それから沈んでいく。それを検証するためには、メールを開くことが一番の近道になる。

アイコンをクリックして、東海林は少しだけ驚く。思考が全て崩れ去って行くのが分かったが、それはあまりにも意外だった。

『差出人 雄大』

「雄大から……？」

携帯電話の時間を見てみる。まだ六時前だというのを確認すると、東海林はメールを見る。

『差出人 雄大

添付 なし

件名 non title

本文 昨日が繰り返されている。どういうことか。 (by 青龍

はつとなった。

その前に、驚いた。

東海林が昨日立てた説だと、時間が歪んだから、こんな風に一日がずっと繰り返されているように感じる、と言う物だった。それを感知できるのは、東海林とビースターだけだ。青龍は、東海林でも、ビースターでもない。

「……」

どういうことだ？

一瞬の混乱と、それから、よく分からない思考の停滞を感じたのは、言うまでもない。しかし、青龍がこの歪みを感知できるというこの現状が、東海林には理解しがたい。もしかしたら、憶羅先輩に聞けば、何かしらわかるかもしれないが。

思いながら、返信ボタンを押そうとした、その時だった。

バイブレーションだった。

画面の上の方に、再びメールのアイコンが表示される。つまり、新しいメールが東海林の下に届いた、と言うことだ。

「……、」

今日は、何かが違う。

東海林以外のものが、少しだけ違う。

そんな気がしてならない。そんな気がして、東海林には、微妙に納得がいかない物があった。納得がいかなくても、これが夢でも虚構でもなく、現実であると言うことは分かっていたが。

新たに送られてきたメールは、憶羅先輩の物だった。

開く前に、若干の躊躇いが東海林を取り巻く。

東海林がこの歪みを感じし、尚且つ、青龍もこの歪みを感じた。もし、昨日立てた説の一つである、憶羅先輩陰謀説が正しかったら、ある誤算で、青龍がこの歪みを感じしてしまった、なんてこともあり得る。

頭の中にとどめておきながら、東海林は徐に、メールを開く。

『差出人 憶羅先輩

添付 なし

件名 Re：質問

本文 そんなことがあったの？』

それは、余りにもおかしいものだった。

おかしい、と言う以前の問題だ。確かに東海林は昨日（東海林にとつての昨日）、憶羅先輩にはあつていない。しかし、こんな、一日が繰り返されるなんて言うあまりにも異常な出来事が起これば、東海林に何か一言くらいは言うだろう。

それがなかった。

だが、これは陰謀でもなかった、と言うことだ。

意味が分からなくなる。それだけではない。意味が分からないどころではない。

青龍が感知して、憶羅先輩は感知してない。昨日も一昨日も猫が川でおぼれ、今日も猫が川でおぼれる。同じ運命が繰り返される。

訳が分からない。

「……な、」

小さな声しか出なかった。

それ以上の声は、驚嘆で埋め尽くされてしまっていた。ただ感嘆符の塊だけが、声を為さずに空気となって、東海林の周りを締め付け始める。

「……」

だからといって、まだ陰謀ではない、と決まったわけではない。あくまでこれは憶測の範囲を超えない『予想』でしかないが、それ

でも、東海林の中では信憑性がないわけではなかった。

そのメールに、返信をする。

『宛先 憶羅先輩

添付 なし

件名 Re：質問

本文 話したいことがあります。憶羅先輩とだけ、です。今日の九時に、俺の寮に来てください。待ってます』

送信する。

これで話をしていけば、何か進展があるはずだ。東海林にはなんとなく、確信が持てていた。ただの確信ではない。はつきりとした自信だった。それはある意味では、見えてきた希望のようなものだった。

朝の九時。

つまり、終業式が丁度今日『も』始まる時間だ。東海林に、終業式へ行く気はなかった。昨日一昨日と変えることは、大きくなれば大きくなるほど、勿論変化が大きい。その変化が大きければ大きいほど、昨日と今日の『差』が増えるはずだ。

それが、なんとなく、東海林には『明日』へつながるような気がする。ただ、そんな気がしているだけだ。

画面に『送信しました』と、完了のメッセージが表示される。

東海林の作業は、もう一つ、まだ残っている。

思いながら、東海林はさっきのメールに戻る。念のために、もう一度読み返してみる。そこから読み取れるのは、やはり、という確証。

返信ボタンを押す。

『宛先 雄大

添付 なし

件名 Re：

本文 今日終業式をさぼってくれ。風邪だとか何とか言えば、とりあえずさぼれるだろ。でもって、今日の九時に俺の寮まで来て

くれ。

勿論、青龍を連れて、な』
つまり、そういうことだ。

それなりの情報がそろっていないければ、何をどうしていいかわからなくなってしまうのと同じだ。それなりの役者がいなければ、話が流れて行かないのと同じように。

それをためらいなく、東海林は送信する。

それだけの時間と、それしかない時間。

明日になったら、また一からやり直しになる。そうならないためにも、今日ですべてを納めなければならぬ。

それなりの覚悟は、東海林にはある。

はつきり言つて、意味が分からなかった。そう思うのが賢明だし、それ以外に思ふこともなかった。

憶羅先輩は、そのメールそのものに疑問を抱いていた。内容的な面でも、だ。

そもそも、ビースターが時間と空間の歪みを感知できないわけがないのだ。憶羅先輩にも、その説明がうまくできるわけではない。しかし、だからと言って、その内容が本当の事なのか、それすら憶羅先輩には分からなかった。

猜疑的だった。

それに、指定してきている時間も妙で、場所も妙だった。

今日は終業式だ。

それは、この学校の生徒ならだれでも知っている話だ。今日終業式で、それから部会がある。今日は『A・Flag』として、猫が川でおぼれる予定だ。その後は特に何も決まっていな。つまり、その後猫が死んでようが生きていようが、大きな流れは変わらない、と言ふことだ。

「……、妙だな」

小さく、独白する。

その声は携帯電話に向けられる。誰が聞いているわけでもない。終業式の日、九時に話し合い、それから学校に行っても、終業式が行われている真つ最中だ。つまり、東海林は『終業式を休め』と言っている、と言うことになる。

東海林が、終業式を休んでほしい理由が分からない。

だが、東海林が裏で何かを考えている、とも考えられない。もし何かを考えているのであったら、憶羅先輩に出会う以前に、もう謀を実行しているはずだからだ。つまり、そんなことはありえない。

そうでないのだとしても、これはおかしいことだった。

おかしいことなのなら、追求してみる価値はある。考えるのは、憶羅先輩だけだった。他の先輩を呼ぶな、と言うのも、憶羅先輩にはあまり理解できない。しかし、これはただ単に、東海林の思いやりなのかもしれない。

そう考えると、憶羅先輩は小さくため息を吐く。

楽しそうに微笑みながら、携帯電話の返信ボタンを押した。

『宛先 ショウジン』

添付 なし

件名 Re：質問

本文 了解したよ』

確かに、この状況は、もしかしたらあまり好ましい状況と言うわけではないのかもしれない。時間や空間、『運命』が歪み、それを再び正さなければならぬ。そう考えると、あまりいい状況とは考えられない。

あくまでそれは、客観的な意見でしかない。

憶羅先輩は思う。客観的なもののほど、主観的なことを忘れがちだ。ある意味それは、当たり前な話なのだが。

憶羅先輩は、あくまで主観的でも客観的でもなかった。あえて言うなら主観的で、もっと正確に言うのなら、『利己的』だった。

とても、利己的だった。

それは、憶羅先輩にとって、おもしろそうなこと、のようにしか

思えなかった。それもある意味正しかった。

面白そうなことに、巻き込まれてるねえ、ショウジン。

心の中で呟くと、憶羅先輩は、送信ボタンを押す。ただそれだけだった。

あの後、少しも眠れなかった。眠るというよりも、ぼうつとしていたと言った方が正しい。考え事をしていたわけでも何でもない、ただ天井を見つめていただけだ。それをぼうつとしていると言わないで、一体何をぼうつとしているというのか。

いつの間にか、アラームが鳴っていた。

つまり、いつもの時間と言うわけだ。東海林は思う。

今日（昨日、又は一昨日）は終業式だ。終業式の集合時間は、九時だ。東海林が指定した時間と同じ、九時。

この時間帯は、終業式の日にしては早い、と言うことになる。しかし、いつもの集合時間、八時半から見ると、少し急ぐべき時間。ただ、赤龍がいるから、交通問題にとらわれることは無い。

少しだけ目をこすると、ベッドから起き上がる。太陽はすでに昇っていて、天井をぼんやりと、臍気に照らしている。

東海林は赤龍の方に視線を向ける。ソファで寝ながら、相変わらず変な体勢をして眠っている。どうしてそんな体勢で眠ることが出来るのか、と疑問に思える体勢で、東海林だったら絶対に眠れないような、そんな体勢だ。

立ち上がると、東海林は重い足取りで、赤龍の方に足を運ぶ。もし今日が終業式なのなら、もしかしたら。

考えるが、すれは怖いことではない。想定範囲内だ。

自分に言い聞かせながら、赤龍の肩を軽くゆする。赤龍の軀は、中年の太ったおっさんの様だ。

「おい、赤龍」

言葉を放つ。

聞くと、赤龍は少しだけ顔を歪める。口をむにやむにやと動かすと、赤龍は寝返りを打つ。どうやってこんな体勢で寝返りを打っているのか、東海林にもよく分からない。きっと赤龍にも、よく分からないだろう。

「……、うーむ……」

眠たそうな声だと言っただけは、東海林にもわかった。

つまり、赤龍はまだ眠い、と言っただ。

「起きろ」

分かっていて、東海林は赤龍をゆすり続ける。鱗だらけの肩の感覚は、いつもと変わらない。なんとなく、手にしっくりくる感触であることだけは確かだ。

「……、あと五分……じゃ……」

付け加えるように、語尾を足す。

そもそも、昨日こんな会話を交わしていたかどうかすら、東海林には疑問だった。覚えがない、と言えば覚えがない。しかし、もう既に『今日』は変わりつつある。それを東海林は確信している。

「あと五秒以内に起きなかつたら例の物をお前の鼻に突っ込む」

赤龍はソファアの上で、清々しそうに伸びをする。

「うーむ、朝の空気はすがすがしいのー」

一瞬で、赤龍は起き上がった。それはいつもの事、と言えばいつもの事だった。

なんとなく、東海林は微妙な気分になってくる。よく分からない、と言えば、よく分からない気分にも似た何かだ。

「おはよう、」

少しだけ明るめに、東海林は呟く。

「うむ、お早うじゃ」

何にでも『じゃ』を付ければいいと言っただけではない気がする。心の中で思いながらも、東海林は特に何を言っただけでもない。

そんな事よりも、言っべきことがある。

赤龍に尋ねる。

「赤龍、」

東海林の顔は、真剣そのものだ。それを聞いた赤龍は、「うむ？」尋ねてみる。東海林の視線に孕まれている鋭さは、赤龍のそれに劣らない。

「今日は、終業式、か？」

尋ねてみる。

聞いた赤龍は、よく分からないような、そんな疑問げな表情しか浮かべない。訝しげそうな、そんな表情だ。

少しだけ、落胆する。

だが、これも予想の範囲内だ。東海林は考える。

「何を言っておるのじゃ東海林、」

赤龍は言う。

どうせ、今日は終業式なのだ。赤龍は、そうだと認識している。しかし、東海林にとって今日は、冬休み二日目でなければならない日だ。それは変わらない。

変わらないし、変えられない。

「ああ、分かてる、変なこと聞いたよな、ごめん」

小さく謝ると、東海林は台所の方に足を運ばせる。

冷蔵庫を開けようとしたその時に、赤龍の声が聞こえる。

「昨日が終業式じゃ」

はっとなった。

冷蔵庫を開けようとする手が止まる。思考そのものが、東海林の中で停滞し、方向性を失っていく。

つまり、こういうことだ。

赤龍は、昨日のことを覚えている。

昨日のことを覚えていて、それでいて、今日が冬休み一日目だ、と認識している。つまり、東海林と昨日話したことを、覚えている、

と言うことかもしれない。

振り返り、赤龍の方に視線を向ける。台所の方を、真っ直ぐとした視線で赤龍は見つめる。

「……、もしかして、お前、俺が昨日話したこと、覚えて……るか？」

少しだけ、緊張感に溢れた空気が漂う。空気が、体を締め付けていくのが分かる。少し、東海林は喉を乾かせる。

「うむ、昨日と一昨日が繰り返されている、と」

東海林の予想は、根底から覆された。

赤龍は、覚えていた。

昨日のことを、赤龍は覚えていたのだ。

そう思うと、東海林は冷蔵庫どころではなくなってくる。すぐさま赤龍の方に近寄ると、肩を強く手に取る。体を屈め視線を合わせると、言葉を強引につなげていく。

「分かるんだな、それが」

はつきりとした口調で、確信を持って、尋ねていく。

赤龍も、それなりの緊張感を察知して、「……うむ」答える。「

つまり、繰り返しは解消された、と言うことなのじゃろうか……？」

聞いた東海林は、顔を暗くするしかなかった。

東海林は立ち上がると、自分のバッグが放つてある場所に近づく。目で追うだけの赤龍は、東海林が何をしたがっているのか、全く分からなかった。

バッグを取ると、東海林は赤龍の方に歩み寄る。中身を見せる。

「……本、かの？」

そう、

中に入っているのは、漫画や本しかない。つまり、昨日終業式に行っていれば、絶対に入っていないくはない物が入っていない。

「俺は、このバッグを昨日、寮であけてない。それでもって、赤龍、

流すように、赤龍へ尋ねていく。

「俺は昨日、終業式に行ったよな？」

それを聞いた赤龍は、「うむ、」小さく呟く。

更に確信を得たのは、東海林の方だった。

「このバッグの中には、入ってなきゃいけない物が入ってないんだ。それが、赤龍になら分かるだろ？」

聞くと、難しそうな表情で考え始める。

東海林は昨日終業式に行った↓バッグの中には本だけしか入っていない↓昨日寮でバッグを開けていない↓中身の出し入れを行っていない↓入っているはずの物がない。

入っているはずの物↓終業式の日配布される何か。

それは、成績表だ。

「成績表、じゃな」

少しだけ、東海林は驚く。「……確かに、それもあるな」納得するように呟くと、東海林はひっくり返すように、バッグの中身を床にあける。

入っているのは、漫画、それから本、何だかもうよく分からないゲーム。それ以外は、筆記用具だけだ。

成績表は入っていない。

「……つまり、」

赤龍は呟く。

一度、東海林は頷いた。

「今日も、終業式だ」

はつきりとした口調で、東海林は言った。あるいみ、東海林は確信を持った口調で、赤龍に言った。

「今日『も』、かの」

確認を取るように、赤龍は復唱する。

「多分、みんなにとって今日は、冬休み一日目でも、二日目でもない。終業式だ。昨日、俺とお前が味わったような」

赤龍の視線も、真っ直ぐとしたものになる。

頭の中にあるものを、赤龍は整理する。ある疑問が浮かんだこと

は、確かなことだった。

「東海林、疑問があるのじゃが」

赤龍が言う。

一瞥をくれると、東海林は赤龍に耳を傾ける。

「何故、赤龍がそれを認識できているのじゃ？」

だから、東海林にも想定外だった。

歪みを感知できるのは、ビースターと東海林だけだ。それ以外には見当たらなかった。ましてや、赤龍は合宿で、みんなの流れと同じような雰囲気を持っていた。つまり、歪んでいたと言うことだ。

それを認識できてはいない様子だった。

だが、東海林とビースターは感知できた。ここでまた、妙なことが起こる。

今回の事だけを見ると、ビースターは歪みを感知している様には見えなかった。本来歪みを正す側にいるビースターですら、それを歪みだと認識することは無かった、ということだ。それを歪みだと認識できたのは、東海林だけ、と言うことになる。

しかし、今日（東海林にとっての今日）になってみると、新たに二人、この歪みに気付いた人物がいた。正確には二匹の龍。

赤龍と青龍だ。

それが一体何を意味するのか、東海林には分からない。

「それが分かったら苦労は無いさ」

吐き捨てるように、東海林は言った。

何故そうなったのか、それは分からない。考えてみても、そもそもそれは、東海林の中に答えがないようなことにも思える。

けれども、と東海林は思う。

「でも、赤龍は昨日のことを、覚えてるんだよな」

改めて、尋ねてみる。

聞いた赤龍は、悩みもせずに、一度東海林に頷いた。「昨日が、終業式じゃったことかの？」

頷くと、東海林は言葉を進めていく。

「つてことは、話が早い」

あくまで、東海林は物事を前向きにとらえていくつもりだ。それに、赤龍が昨日のことを覚えていたと言うことに、東海林は猜疑心を抱かなかった。それどころか、そのことに好意的だったと言える。東海林は、赤龍が座っているソファアの隣に腰掛ける。小さく息を吸い込むと、頭の中で言葉を組み立てていく。いつもは簡単な作業だが、今は、いつもより格段に、その処理が遅いと言える。

言葉が、東海林の中で組みあがった。

「今日は終業式に出ない」

言いきった。

赤龍には、東海林が何を言いたいのか、よく分からなかった。「うむ？」目を細めると、赤龍は言葉を繋げていく。

「どう言うことじゃ？つまり、終業式へ行かずに、どこで何をするというのじゃ？」

東海林の頭の中で、物事が整理されている。とてもはっきりとしたものが、東海林の目の前に存在している。

分からないことも多い。

しかし、今はそんなことを見ている余裕もない。だから、結果的に東海林は、前へ進むしかないのだ。どの道、それ以外にこれを解決させる方法なんてない。これが解決するまでは、前に進み続けなければならぬ。

「今日は、ここで話し合いをする」

告げる。

それに対しての問。

「誰とじゃ？」

若干、不敵そうな笑みを東海林は浮かべる。どこかその笑みには、はつきりとした自信が孕まれている。

「憶羅先輩、」

それなら、と赤龍は思う。

「なるほどの、確かに憶羅であれば、何かの情報を持っているはず

じゃ。持っていないとしても、力になることは確かじゃな」

以前、東海林は憶羅先輩と共闘したことがあった。憶羅先輩の實力は、確かなものだ。どう見ても確かで、どう考えても強い。つまり、頼りになる先輩、と言ったところだろうか。

「先輩にアポ取って、承諾してくれたんだ。九時に、俺の寮だ」

聞くと、赤龍は壁に掛けられている時計を見る。刻々と時間を刻む秒針が、永遠に時を刻み続けている。永遠に同じ時間を、同じだけ刻んでいる。

「……、あと一時間ほど、かの？」

一度頷くと、東海林は息を深く吸い込む。

「憶羅先輩と、少しだけメールで話したんだ。でも、先輩は……、」
このことを認識していないようだった。

目を大きく見開く。

それは、赤龍にとつて、予想外のこと以外の何者でもなかった。

以前、憶羅先輩の説明にはこうあった。

「ビースターは歪みを感知できる。しかし、一般人や龍には出来ない。できなかった、と言うべきだ。つまり、歪みはビースターにしか感知できない。あくまで原則的に。」

しかし、今回はそのビースターでさえ、歪みを感知できなかったのだ。おかしいことでしかない。

「つまり、憶羅は東海林が言うまで、それに気づかなかった、と言うことなのじゃな？」

確認するように、赤龍は東海林へ聞いてくる。

小さく頷くと、「……、」吐息を小さく吐きつける。

「憶羅先輩でも、それに気づいてはいなかった、らしいんだ。気付けたのは、俺と、それからもう一人」

「うむ、もう一人とな？」

赤龍は、話に食いついてくる。

一度東海林は頷く。そして、「お前は、俺が昨日言ったから、気付けたのかもしれない」小さく、漏らすように呟いた。

聞いた赤龍は、「確かに、東海林が言わんかったら終業式と勘違いして、東海林が言ったら、終業式ではないと分かった」頭の中で、色々な物を整理していく。

「でも、多分もう一人は、自力だったと思う」

はつきりとした視線を、東海林の方に向ける赤龍。

「誰なのじゃ、その自力でわかった人物とは」

真剣な眼差しは、はつきりとした力を持っていた。

「ああ、そいつは、」

青龍だ。

ある意味、それは衝撃的だろう。

実際、東海林だって衝撃だった。青龍が、この歪みを感知できた、と言つのは、予想だになかったものだ。

「……！」

一瞬驚くと、出す言葉を忘れてしまう。

だが、赤龍は懸命になつて次の言葉を探そうとする。何処にそれがあるのかは、探しきれていない。

「青龍が、終業式とその次の日を、認識した？のかの??」

そこにあつたのは、疑問だった。それしかなかった。さっきまでの真剣な力が、全て疑問に変わってしまったような、そんな雰囲気すらあつた。

「ああ」

軽く頷くと、東海林は携帯電話をテーブルから手に取る。開き、すぐにメールフォルダを選択する。勿論受信だ。

それほど過去に受信したものではないメールの一つを、東海林は選択する。それを、東海林は赤龍に見せる。

「……、」

訝しげな表情を浮かべると、赤龍は「うむう……、」と若干の唸りを漏らす。

「青龍は、二日目で感知出来た。と言つことになるの」

東海林は、「そうだな、」と言つと、携帯電話を閉じる。

「ちなみに、雄大と青龍も、話し合いに呼んである。多分この話し合いでは、最低俺とお前、雄大と青龍、それから憶羅先輩が必要だ」あくまで、最低。

東海林が必要な理由は言うまでもないとして、赤龍が必要な理由は、二日目に東海林が言ったことによつて感知できたから。青龍は自力で、三日目に感知できた。雄大は出来ていない。そして憶羅先輩は、ビースター、つまり力になる。

つまり、一通りのパターンがそろっている、と言うわけだ。

考えながら、東海林はリモコンでテレビをつける。見ても、そこには『今日が終業式』だという証拠しかなかった。

昨日と言っていることが同じだった。

「また、暖冬についてかの」

赤龍は呟く。

「仕方ないだろ、」

面倒くさそうにリモコンのボタンを押すと、東海林はテーブルの上に置く。他のことに関して、余りにも変わったことと言う物が無い。

「言ってみれば、昨日が繰り返されてるんだからな」

ただ、全てが全て繰り返されている、と言うわけではない。それだけは断言できる。

そのための行動だ。東海林はそのために動いているし、きっと、あの三人なら協力してくれる。関係が比較的少ない先輩や、大介と香奈には、なるべく迷惑を掛けないようにする。そうして、『明日』を迎える。

「俺たちは、明日のために動いてるんだ」

こんなことをするとは、全く思っていなかった。それに、したいと思わなかった。いつもなら、面倒くさがって何もしたくないが、もうそうも言っていられないのも事実だ。これは、東海林の問題でもあり、言ってしまうえば、この世界全ての問題でもある。

「明日が、ちゃんと来るように、かの？」

尋ねる。

それを聞いた東海林は、軽く「勿論、」付け加える。

「でも、」

と東海林は、言葉を区切る。

立ち上がると、東海林は赤龍の方に微笑んだ。

「流石に、腹が減っては戦はできぬ、だろ？」

特に、赤龍は。

それを知っているから、東海林は台所へと足を運ぶ。「無論じゃ。赤龍には、武士は食わねど高楊枝、の意味が分かりかねぬ。絶対に、最高のコンディションとは言えんからの」

まさか、赤龍がコンディションなんていう言葉を使うとは、毛頭思っていなかった。赤龍は比較的、カタカナを使わない。

「確かに、そうだな」

言つと、冷蔵庫の中から、栄養満天ゼリーを取り出す。冷蔵庫の中に入っている栄養満天ゼリーも、減っている様には思えない。昨日一昨日から、減っているような気がしない。きっとそれは、東海林の思い違いなんかではない。

それだけは言いきれぬ。はつきりと。

「はいよ、」

東海林は言つと、赤龍に栄養満天ゼリーを投げつける。「うむ、」
と言いながらキャッチすると、すぐに赤龍はキャップをひねり、中身をごくごくと飲み込んでいく。

東海林も、キャップに手を掛けようとした。

その時だった。

ピンポン ピンポン

それは、ドアベルの音だった。

東海林たちは、玄関の方に視線を向ける。さっき見た通り、まだ集合には一時間以上時間がある。

「……、誰だ？」

言いながら、東海林は玄関の方に歩き出す。

若干の焦燥と、それから不安。

昨日も一昨日も、こんな時間に東海林がいる寮のドアベルを押した人物はいない。

「と言うことは、」

小さく独白すると、誰が玄関の前にいるのか、東海林は想像してみる。

そうしてみると、大体の目星は着く。

誰かの目星がつけば、どうしてそこにいるのか、と言うのも大体わかる。何故東海林の寮に来たのか、と言う理由が。

玄関の鍵を開け、東海林はドアノブを下げる。
光が開ける。

その先にいたのは、雄大と青龍だった。

やっぱり、と思える物がそこにはあった。

「おはよーん」

能天気な声を張り上げるのは、何故かバスーンを背負っている雄大だ。バスーンを常備しているのはいいが、ここにまで持つてこれると、少しだけ驚くものがある。しかし、いつも学校では隠しながら飾ってあるネックレスが、今日は服の表に出ている。ついているのは、薄紅色をした、正八面体の結晶だ。

「……、」

変わらず、青龍は何も言わない。

何を言うわけでもないし、きっと東海林から何かを言わない限り、何も言わないと思う。

「やっぱりか、」

予想の範囲だった。

想像できなくはなかった、と言うべきだろうか。

「……、来ることを知っていたような口ぶり」

ぼそつと、青龍は言った。赤龍よりもほっそりとした体格だが、やはりしつかりとした力を、青龍から感じる。

「まあ、想像はしてたな」

言うつと、「とりあえず、」言葉を繋げる。

「入れよ」

中へ薦めるように、東海林は玄関を更にあける。

二人（一人と一匹）が寮に入つて来る。

実際にこうなるとは思っていなかったが、東海林はこの状況を予想していた、とは言える。青龍が感知したことを知ってから、早めに来るかもしれない、と言う考えはあった。その理由も、東海林にははっきりしている。

「一応聞くけど、」

言葉を放つ。

ソファアの向かいにある椅子に腰かけている雄大が、青龍の方に視線を向ける。全くと言っていいほど、青龍は動じていない。

「何で俺の所に、わざわざ一時間も早く？」

東海林はパジャマのままだった。

しかし、そんなことはどうでもいいことだった。いま大切なのは、青龍の意志だ。

「というかさーあー、」

おどけたような口調をするのは、雄大だった。聞きすぎると耳障りになるその口調は、特に何も気にされず、更に言葉を紡いでいく。「どうということなの？朝いきなりさー、青龍がおかしなこと言い出したと思ったら、お前もおかしなこと言いだすし、おかしなおかしかつかしじゃないか」

赤龍には、雄大が言っていることの方がよっぽど意味不明だと思う。それは赤龍の気のせいではない。

「お前にだけは言われたくないな」

小さく、東海林はぼやくように言った。

そして一瞬、青龍の方に一瞥をくれる。特に何も思っていないよ
うな、そんな冷たい視線を放っている。それだけは確かだ。

雄大の方に向き直ると、東海林は話を続ける。

「青龍の言ったままだ、昨日が繰り返されてる」

聞くと、「……、やはり」本当に小さく、青龍が呟いた。

それが、東海林たちの耳まで届くことは無い。だが、赤龍はその
声を聞き逃さない。小さくとも、その声は落とさなかった。

「繰り返されてるって言われても、でも今日は終業式……、」

呟きかける。

その話に、東海林は軽く歯止めをかける。

「でも、」

雄大が放とうとしていた言葉は、東海林の一言で止められる。小
さく息を吸うと、頭の中でいろいろと整理する。

「俺たちにとっては、少なくとも、昨日は終業式だ」

今さら、東海林たちにとって驚くべき事実ではない。

だからと言って、それが雄大にインパクトを与えないか、と聞か
れれば、それは違う。その言葉に慣れていなければ、相当な衝撃を
与えられるはずだ。青龍だけならまだしも、東海林まで言えば、そ
の衝撃は絶大なものになる。

「昨日が終業式って……、それじゃあ今日は何なんだ？」

こんなにも雄大が食いついてくる話と言うのも、案外珍しいのか
もしれない。

思いながら、東海林は低徊している思考を、上へ持ち上げていく。
整理すると、それを言葉にしようと試みる。

「今日は、昨日の繰り返しだ。俺はそう思ってる」
はっきりと告げた。

もし逆の立場だったらどうだろう。東海林は少しだけ考えてみる。
もし雄大と東海林が逆の立場だったら、今の言葉に疑問を感じない
わけがない。ましてや、その疑問は不審と言ってもいいものに変わ
ってしまう。

「証拠にはならないかもしれないけど、今日の朝のニュースは、暖冬についてだ。それから校長先生の話はいつも通りまとまらない。今日の部会は、実は部活になる。楽器を演奏する羽目になる」

そこまではつきりと言われて、困ってしまうのは雄大だ。

聞いた青龍が、小さく一度頷く。反応を見せないと思っていたが、その行動は、東海林には少しだけ意外なことだった。

「それ以外の部活は、予定通りじゃそうな」

付け加えるように、赤龍が言った。

青龍の視線が、赤龍の方に向けられる。

「……まさか、お前も」

小さく、しかしさつきよりも響く音で、青龍は赤龍に呟いた。聞いた赤龍は、「うむ、」軽く言い放つ。

「昨日のことは覚えておる」

あたりを見回すのは、雄大だった。

可能性として考えられたのは、二通りだ。

一つは、質の悪いいたずら。

もう一つは、それが何もかもとは言わないがほとんどが本気で、本当に東海林たちが、終業式を二回繰り返しているのか、と言うことだ。

一つ目が本当だと仮定してみる。

もしかしたら、これは巧妙に組まれているドッキリのようなもので、雄大を陥れるための策なのかもしれない。どこかにカメラが隠してあって、雄大のことをそれで撮影している、とも考えられなくはない。

ただ、それに青龍が参加した意味が分からない。それに、もしそんなことをするんだったら、もっと大人数で、少なくとも、大介くらいは入って来る。そのくらいいたら、信憑性が少しは増す。なのに、そうはしなかった。

二つ目が本当だと仮定する。

本当なのだとしたら、相当おかしい話になってしまう。東海林た

ちにとって終業式は繰り返されたもので、何もかも同じ、と言うことになる。

だが、雄大は覚えている。

憶羅先輩の言ったことと、それから謝罪を、まだ覚えている。

それから、実際にこの結晶が存在しているという事実と、バースンの確かな感覚。蒼空への扉が実在するという事実。

それを踏まえると、そう言ったことがあっても不思議ではないよな、そんな気がしてしまう。むしろ、いつものパターンで言うのなら、こっちが本場で、本当に世界がむちゃくちゃなことになっている、と言う方が正しいのだ。

考えが至ると、雄大はテレビのリモコンを取り、電源ボタンを押す。

画面が一気に明るくなり、ニュース番組がやっている。日付は今日、終業式が行われる日。そしてやっているニュースは、『暖冬』について。

「……、なーるほど」

雄大は呟くと、ビデオデッキもDVDプレイヤーも、どんなプレイヤーもついていないことを確認する。ついているのは、真正銘テレビだけだ。ゲームすらついていない。東海林が携帯ゲーム派だと言うことは前から知っていたが、本当にテレビ以外何もない。

「タネも仕掛けもない、みたいだね」

聞いた東海林は、少しだけ息を整える。

「信じて、もらえたか？」

はつきり言つて、そう簡単に信じられることでもない。それは東海林自身、よく分かっている。逆に、こんなことをホイホイ信じてしまうような奴は、危ない奴だ。それを知っているから、東海林は尋ねたのだ。

「よくわかんない」

それが、雄大の答えだった。能天気な口調と、それからいつも通りの、どうでもよさそうな顔が戻ってくる。さっきまでの真剣そう

な表情は、どこかに飛んで行ってしまったかのように思える。

あまりにも拍子抜けな答えに、東海林は目を細めた。しかし、その口調はいつもの雄大であることを確信させるものだった、と言え、確かにそうだったと言えなくもなかった。

「難しいし、本当かなんて分かんない」

青龍の視線は、全く揺らがない。殆どの感情がないような、そんな風にも見て取れる。

「だからー、面白そうな方向に行くー」

その口調と言い、選択の仕方と言い、全てが雄大であることは確かだった。なんとなくくみ取れた安堵は、そこから来たものかもしれない。少しだけ、東海林は考えてみた。

「つまり、信じるのかの？信じないのかの？」

はつきりした答えを求める赤龍が、テーブルに身を乗り出しながら、雄大を凝視する。「ちよつと、近い」言いながら、鬱陶しそうに手の甲を向け、地面を払うようなしぐさを見せる。「シッシッシ」つまり、あっち行け。

「じゃから、赤龍は信じるのか信じないのかと聞いておる！」

声を張り上げる。つまり、雄大が言った言葉の意図を、思いつき取り違えている、ということだ。

それを聞くと、「だーかーらー」面倒くさそうに言葉を繋げる。

雄大は大きくため息を吐くと、赤龍の方にわざと吐きつける。赤龍は目を細める。「それは赤龍が嫌がっていると分かっているやつがいる所業じゃな！けしからん！灰と化させてやるぞ！」言う、赤龍は大きく幾を吸い込み始める。

東海林は楽しそうに、赤龍の首元に手剣を繰り出す。

がごつ、と、赤龍の頭が揺れると、テーブルの上に赤龍は突っ伏す。白目を剥いているように見えるのは、きつと気のせいではない。大丈夫、死んでないから。

「あははー赤龍君気絶しちゃったーどうしちゃったんだろー」

棒読みをする東海林だった。

雄大が言うことには、面白い方に行くと言うことだ。

つまり、終業式や部活の方が面白ければそっちに行くし、東海林たちがやっていることの方が面白そうであれば、東海林たちの方に行く、と言うことだ。赤龍は意味を取り違えているとしか思えなかった。

すべては雄大の気分したい、ということだ。

「ひどい目にあったぞ、」

小さく、ぼやくように赤龍が言う。首の付け根辺りをさすりながら、少しだけ目を細めている。

「一回やってみたかったんだよな、これ」

言いながら、東海林は微笑む。手剣を作りながら、それをちらちらと赤龍に見せている。

「う、うむ……、」

感心している様子はなく、赤龍はどこか、苦々しそうな視線で東海林の手を見る。特に、手剣を作っている方。

「東海林と一緒にいると、退屈しないな」

ほめているのか、そうでないのか、はつきり言ってよく分からない台詞であったことは確かだ。心の中で思う。

「……すごい脱線のしよう」

ぼそつと呟くのは、青龍だった。

思い出したかのように、「あ、そうだ」と言いながら時計を見る。あと三十分あたりで、憶羅先輩がこの寮に来る。

「九時までには、話をつけておこうか」

青龍に、東海林は言った。

「……、」

あまり、面白そうな視線をしていなかったのは事実だ。何も考えていないような表情をしているのは、雄大だけ、と言うことになる。「多分、青龍が聞きたいのは、何が起こってるのか、とか、どうして自分が、昨日と今日が同じだと分かったのか、ってところだろ」

聞いてみる。

面白くなさそうに、青龍は目を閉じた。

「実際、俺にもよく分からない。多分、また歪みが生まれたせいだと思っただけど……、でも、それでも納得がいかない」

東海林は、漏らすように呟く。

雄大が、東海林の方に視線を上げる。

「何が？ 時間か空間か『運命』が、歪んだだけなんじゃないの？」

語尾がよく分からないが、特に気にしないことにしておく。ただ、雄大が言うことは正しい。あくまで、現段階ではそれが正しいと思う。

「多分、な」

頭の中で、ある情報が引つかかる。

「でも、それだと先輩たち、ビースターもそれに気づいてるってことになってるんだ」

はつきりと東海林は言った。

目を細めるのは青龍だ。疑問げな表情をしたのは、雄大だ。

「どういうこと？」

想像力が乏しいと言つべきなのか、どういうべきなのかは東海林にも分からない。しかし、雄大の疑問は、もつともなものだ。

「……、気付いていなかった」

答えをくみ取った青龍が、小さく呟いた。それはあまりにもおかしいことではない、おかしい出来事に他ならないのだが。

「ああ、」

一度、東海林は頷く。

今までの前提が、覆される、と言つことだ。おかしいことだ。それはとてつもなく、理に適っていない状況だ。

雄大が、少しばかり変な表情をする。考えているようにも見えれば、驚いているようにも見える、ある意味ふざけが表情。

「何で？ どうして？ ええーっ！」

意味が分からない。

しかし、雄大の言いたいことも、東海林には分からなくはない。先輩たち、ビースターは気づいていてもいいはずなのに、それに気づいていなかったのだ。その反面、歪みを感じできない筈の赤龍と青龍が、感知できたのだ。

驚くのも、ある意味あたりまえだ。

「……、でも」

青龍が、東海林に言葉を呟く。

「……俺は、感知できた」

言いきつたのを聞くと、東海林は少しだけ吐息を漏らす。これで青龍に、「……何故」と聞かれても、東海林には説明できない。説明できない、と言うよりも、知らない。そもそも、答えがあるのかどうかすら、東海林には分からない。

「妙なことに、な」

付け加える。

期待していた言葉と違うようで、青龍の興味が、その言葉から削がれていく。

「何で青龍が感知出来てるのか、それは俺にもよく分からない。赤龍が感知できる理由も分からない。でも、感知出来てるっていうのは事実だ」

極論だった。

聞いた青龍は、「……、」もう言葉を挟もうとしなくなる。ただ空気と一緒に、時間を流して行っているような、そんな感覚に近い。

「確かに、細かな理由とか、そう言うのが気になるのも分かる。俺だって気になるんだ。でも、今はそれどころじゃない」

それも、極論でしかなかった。

理由と言う物が一切無視すれば、見えてくるものは一つだ。ただ、理由と言う物が分かれば、もっと細かなことも分かってくる。

「明日が来ることだ」

東海林は言った。

一瞬だけ、青龍は顔を上げる。東海林の顔を一瞥する。

「明日が来ないと、今日がずっと繰り返されるってことなんだ。それは分かってるだろ？青龍」

何と言っているのか、青龍には分からない。分からないというよりも、それにどう反論して、同感すればいいのか、青龍にはよく分からなかった。

「確かに、今日が永遠に続けば、課題をやる苦勞もないし、金にも困らない。ずっとこうやって過ごしてられる」
言う。

少しだけ、雄大はその言葉に惹かれる。もしずっと今日が繰り返されて、そう言った苦勞をしなくていいのなら、もしかしたら、雄大はそっちの方がいいかもしれない。毎日毎日進展がないが、課題をやるよりはましかもしれない。

「でも、そんなの、本来この世界があるべき姿じゃないと思うんだ」
はつきりと、呟いてみる。それが本当に正しいか正しくないか、そんなことはこの際関係ない。関係あるのは、自分がどう思っているかだ。

自分がどう思っていて、どうであってほしいのか。
それだけだ。

「明日が来れば、ずっと同じ時間が繰り返されてた世界が、一気に解放されるんだ。確かに不安も多いし、明日が一気に真つ暗闇になるかもしれない。でも、」

俺はぐずぐずしてる方がやだ。

自分には、はじめから世界の歪みが感知出来ていた。

感知出来ただけではない。なんとなくではあったが、明日が来てほしい、と思う気持ちもあった。むしろ、そっちの方が強かった。でも、赤龍が昨日のことを覚えていてくれて、少しだけはあるが、東海林は心が軽くなった。それも事実だ。

だからと言って、今日が繰り返されて欲しくは無い。確かに、も

し今日がずっと繰り返されていたら、とてつもなく楽かもしれない。何もなくていいし、何も心配しなくていいのだ。課題の事も、将来の事も、何もかも。

しかし、東海林は思っている。

それは、余りにもつまらない。

進展がない、ただ繰り返しに気付けた奴だけが楽をできる世界なんて、東海林は好きではなかった。

だから、今こうして、話をしているのだ。

それに、と東海林は思う。

東海林がこのことに気付けたのも、何かの『運命』なのかもしれない。『A・Flag』でも『C・Flag』でもない、何かもつと大きなもの。それが運命と定義されていることなのかも、東海林には分からない。しかし、そんな気がしたのは、確かなことだった。

「俺は、俺たちにしかできないことを、しようと思うんだ」

はつきり言つて、ここで雄大に手を切られても、文句は言えなかった。雄大はそもそも、この件に対してほとんど何の関係もない。

関係があるのは青龍の方で、雄大は何もない。

それに、もし雄大がこの繰り返しを望んでいるとしたら、東海林は雄大を強制できない。雄大はそれを望んでいないのだから、仕方がない。

「ふーん、」

つまらなさそうに、雄大が答えた。少なくとも、東海林にはそんな風に聞こえる。

「つまり、元通りにしましうって感じ？」

確認を取るような口調で、雄大は言葉を進めていく。

聞いた東海林は、少しだけ気が重くなりながら、「ああ、雄大に一度言葉を放った。これで、いつものあのふざけた口調で「いやだ」と言われたらおしまいだ。それに対して、東海林は文句を言えない。だからと言って、雄大と東海林の関係が崩れるわけでも何

でもない。ただ、どう選択するか、と言うことだけだ。

「まー、いんじゃない？」

どうでもよさそうな、そんな口調で呟いた。

東海林は、驚きを隠せないまま、雄大の方に目をやった。どうでもよさそうな口調と、どうでもよさそうな表情。そして、隣にいる、何かをほくそえんだような表情をした青龍。

「反対、しないんだな」

少し意外だった。

雄大なら、もしかしたら反対をすることもしていない、と考えていた。と言うか、絶対に反対すると思っていた。しかし、実際はしなかった。それは東海林にとって、意外以外の何者でもなかった。

「だって、どうせ繰り返し返されたところで、俺が感知できるわけじゃないしー、どうせ明日が来たら、課題やんなきゃいけないしー、まき」

語尾は分らない。

ふざけた口調と、それでいて適当そうな雰囲気。

いつもの雄大だったことは、確かだ。

聞いていると、東海林は少しだけ、悪いような気になってしまう。雄大に対して、猜疑的になっていたような気が、東海林にはしなくもない。

「ああ、ありがとう」

小さく、東海林は呟いた。

聞いた雄大は、「あつたりまえだつてー俺たち、トモダチぢゃないかーわが友よハグしよう」とりあえずふざけたことをぬかしたので、東海林は一応頭を軽く叩いておく。

「しない」

はつきりと、東海林は告げた。

「全く、緊張感のかけらもあらん奴じゃな、雄大」

赤龍に呆れられたらおしまいだ。東海林は思いながら、雄大の方に視線を向ける。予想通り、雄大はどうでもよさそうな表情をして

いる。

「……、」

青龍も、なんとなく呆れているような、そんな雰囲気は隠してはいなかった。

ふと、東海林は思い出す。

「あ！」

赤龍はそれを聞くと、東海林の方に視線を向ける。「どうしたのじゃ？」心配そうな口調で、東海林尋ねる。

「俺、」

言葉を紡いでいく。

「まだ、学校に風邪で休むって言ってねー」

空気が凍る。それか、空気が死ぬ。

あまりの温度差に、赤龍は目を細める。「……、東海林、まさかそれだけとは言わせぬぞ……？」赤龍の殺気を感じた東海林。

「え……、それだけ」

東海林は言った。

そして、赤龍のため息。つまり、赤龍は相当呆れている、ということだ。「全く……、」吐き捨てるように言っと、東海林の方に少しだけ目を細める。

「心配させおつて、」

面倒くさそうに、赤龍は言った。

携帯電話を取ると、東海林は学校の電話番号にコールする。鼻を軽くつまむと、先生の声が聞こえてくる。

『はいこちら天野下学園大学付属中学高等学校の清原きよはらです』

あ、と一瞬東海林は思う。

「あの、寺山です。中三の」

清原先生は、東海林がいるクラスの担任だ。

その声を聞いて、担任なら誰だかわかるはずだ。

『あら、東海林？』

生徒に呼び捨てはどうなのだろう。

一瞬考えるが、この際あまり考えないことにしておく。東海林はどこか気怠そうな口調で、清原先生に告げていく。

「あの、今日風っぱくて、三十八度くらいあるので、休ませてもらいます」

聞くと、『東海林もなの？』言われてしまう。

なんとなく、どうしてだかわかる気がするののは、東海林の気のせいではない。きっと、この寮にいる誰かのことだと思う。

「俺の他に、誰か休んでるんですか？」

それらしき人物を見ながら、東海林は尋ねてみる。

「ええ、雄大がね、風邪だって、何でも四十五度熱があるそうよ」
思わず東海林はくしゃみをする。『大丈夫？』清原先生の優しい言葉に対して、「大丈夫、です」いかにも大丈夫ではなさそうに、東海林は呟いた。

雄大は、四十五度の高熱を出しました。きっと本当にそうなら、天野下の生徒はきっと全滅だろう。

それはもう死んでいる。雄大、お前はもう（ry。

「それは大変ですね、それじゃあ俺も、ゴホゴホ」

強引に咽てみる。そんなに大袈裟でもない。

聞いた清原先生は、『本当に大丈夫？』と再度尋ねてくる。

「ええ、何とか」

終業式には二回出た。それで十分だと思う。

東海林は心の中で思いながら、少しだけ目を細める。

「それじゃあ、課題は部活の時に渡すわ。今日はゆっくり休みなさい」

電話越しに小さく頷くと、「はい、では」言う。そして携帯電話を耳から離し、電源ボタンを押す。

次にすべきことは、雄大を睨むこと。

「お前、何だよ四十五度って」

青龍は、目を軽く閉じる。

雄大は、「だって、大袈裟の方がいいでしょ？」ふざけたことをぬかす。大袈裟にしてもほどがある。

「お前、四十五度って普通死んでるからな、ちゃんと考えて物は言えよ？」

何でそんな嘘に、先生が引つかかったのかが、逆に分からない。

分からない、とか言う問題ではない。病気だ、みんな病気。

「はい」

心のこもっていない返事。

それだけは分かった。

だが、ここまで雄大が馬鹿だとは思っていなかった。四十五度と聞いた時は、思わずくしゃみをしてしまうほどだった。

「四十五度、とな……」

その言葉の余韻を、かみしめてみるのは赤龍だった。

「そんな言葉吟味しなくていいからな赤龍」

呆れた風に、東海林は赤龍へ呟いた。

全く。

思うが、雄大らしい理由づけだというのも、なんとなくうかがえた。それは東海林にとって、ほほえましいことなのかもしれない。ほんの少しだけ思った。

その時だ。

丁度、寮のドアベルが鳴り響いたのは。

これで、全員そろったことになる。少なくとも、東海林が呼んだメンバーは、全員ここに集結している。

「おはようございます」

東海林は、向かいの椅子に座った憶羅先輩に、軽くあいさつを交わした。「そんなことより、」話を切り替えたのは、憶羅先輩の方だった。

「いくつか東海林君に聞きたいことがあるんだよねー」

いつもの口調で、それでいて、どこかいつもとは違う。

そんな憶羅先輩だったことを、東海林は見過ごしはしなかった。

憶羅先輩はあくまで憶羅先輩だが、何かに対して、あまり好意を抱いていないような、そんな視線をしている。

「まあ、大体聞きたいことは分かるかの」

小さく、ばやくように赤龍が言った。

憶羅先輩は、赤龍や青龍を認識できる。ビースターの一人ではあるが、その中で龍を認識できるのは、憶羅先輩くらいだ。

「何で、東海林君だけそんなことが分かったんだろうね」

そのことについて、東海林は答えられない。

答えが、そもそもまだ見つかつてはいなかった。

「それに、そんなことが起こっていたら、真っ先に分かるのは俺たち、ビースターだと思うけどね」

正論だ。

だからこそ、分からないのだ。

何故憶羅先輩が認識できなくて、何故東海林だけが認識できたのか。そして、何故青龍もが、認識できたのか。

分からない。

「そのはずです」

それについて、東海林は否まない。それは正論だったし、正しかった。ただ、事実がおかしいだけだ。

「それなら、何で俺たちには分からなかったの？」

赤龍は目を細める。

「そのことについては、未だ見当がつかん。じゃからこうして集まって、話し合おうというのじゃ」

緊張した空気が、辺りを包み込んでいることは確かだ。ただ、この緊張がいつほぐれるのか、なんてことは、やはり分からなかった。もしかしたら、永遠と続くのかもしれない。それは分からない。

「でもさー、」

はつきりと、憶羅先輩は言う。

「東海林君の言葉だけだと、本当にそうなのか、分からないんだよね。勿論、龍君たちの言葉を合わせても、その事実に至らない。もしかしたら、俺の知らないところで口裏を合わせてるかもしれないからね」

要するに、こういうことだ。

「……証拠」

雄大の隣で、ぼそつと青龍が呟いた。

証拠が欲しい、と言うことだ。今日が三回も繰り返されているという証拠が。

この際、物的証拠なんてものは存在しない。そんなものは、昨日一昨日が繰り返されている時点で、もう消滅してしまっている。その証拠に、今日バッグの中には、成績表も課題も入っていなかった。しかし、状況証拠なんてものも存在しない。そんなものが存在し得たなら、昨日と言う日が繰り返されたことに、そもそもならない。今日の朝は、昨日の朝でもある。昨日の夜にあるものが、昨日の朝にあるとは限らない。

ここで証拠に出来るのは、一つだけだ。

東海林は、それを持っている。

「証拠、そう証拠、証拠証拠、それが無かったら、俺はこの件に関して、東海林君には関わらないよ、いい？」

今気が付いた。

憶羅先輩がずっと、ショウジンではなくて東海林君と呼んでいることに。

つまり、いつもの視点で見ること出来ない。と言うことだ。それがどんな関係であれ、そう呼ばなければならぬ状況ではある、と言うことだ。

聞いた東海林は、少しだけ息を整える。

「俺が知ってる唯一の証拠があります」
呟いた。

興味深そうで、それでいて疑いの視線と呼べるものを、憶羅先輩は東海林に向けている。はっきり言って、東海林はそんなもの、どうでもよかった。

疑う疑わないではない。

もう、そう言ったレベルの話ではないのだ。

「ほう、面白いね」

言つと、問いかけてくる。

「何だい、その証拠っていうのは」

東海林は、簡単に答える。

「今日、猫がおぼれます」

それだけだ。

はっきり言つて、それ以外には無いとも思える。しかし、それは決定的で、余りにもはっきりとした証拠になる。

一瞬、驚いたような表情を、憶羅先輩は向ける。

「ん？」

訳が分からない、と言いたげな表情を、雄大は東海林に向ける。

「猫、とな？」

赤龍も、訳が分からなさそうな声を東海林に呟く。「一体、どういうことなのじゃ……？」尋ねてくるが、そんな面倒くさいことは答えたくない。説明する時間が、この際もつたいないともいえる。

しかし、憶羅先輩には分かった様子だ。

「……、」

沈黙を極めると、東海林の目に映っている物を、把握しようとする。そこに映っているのは、憶羅先輩だった。綺麗な瞳に、くつきりと、憶羅先輩が映し出されている。

「まさか、それを答えるとは思わなかったよ」

意外そうな雰囲気で、憶羅先輩は空気を壊す。

そして、どこかおどけたような表情を東海林に向けると、「確かに、繰り返されてるみたいだね」東海林に言った。聞いた東海林は、一度頷いておく。

「どういうことじゃ？」

やはり訳が分からなさそうに、赤龍は呟く。東海林と憶羅先輩の方に、視線を往復させる。

「ショウジン、説明してやってよ」

はっとなった。

今日初めて、憶羅先輩が東海林のことを、『ショウジン』と呼んだ。若干の緊張感が、粉々になってもまだ空気に漂っている。だが、さつきより緊張感が高まっているわけではない。むしろ、少しだけ朗らかになっている。

「あ、はい」

言っと、東海林は赤龍の方に視線を向ける。

「赤龍は二回だけど、俺は、今日を含めて三回、終業式の日を繰り返してる」

聞いた憶羅先輩は、「わお」おどけた口調で小さく言った。

赤龍には、それが分かってている。

「うむ、昨日は部活をさぼって、ゲームを買いに行ったの」

残念ながらそのゲームは、今東海林の手元にはない。きっと店頭になんてあるというのがオチだ。東海林は思いながら、言葉を繋げていく。

「でも、俺は一番初めの日、ちゃんと部活に出てたんだ」

言いながら、憶羅先輩の方に一瞥をくれる。どこか楽しそうな表情をしながら、憶羅先輩は東海林に微笑んでいる。その微笑に、さやかな悪意が孕まれていたことは確かだ。それが何なのか、東海林はよく知っている。

「それで、憶羅先輩に一昨日の……、つまり今日の運命を一つだけ、聞いたんだ」

まだ納得がいけないような表情で、赤龍は首をかしげている。

「……なるほど」

納得しているだけで、全く教える気がなさそうな青龍が、呟いた。赤龍は、東海林の説明を促した。

「つまり、どういうことじゃ東海林」

まだ分らない。

それが赤龍クオリティーだ。東海林は、赤龍が話の裏を読むタイプでないことを、重々承知していた。だからこういうことになるのだ。

「つまりさ、その『運命』っていうのが、さっき言った猫の事なんだよ」

聞くと、「猫が、川におぼれること、かの？」確認を取るように、赤龍は呟いた。

「ああ、」

一度頷く。

「しかし、」

更に、赤龍は東海林へと説明を求めていく。

「何故それが、憶羅を納得させるだけの証拠になったのじゃ？」

東海林は別のことを納得した。

本当に、赤龍は話の裏と言う物を読まない。たまにしか、東海林の説明負担を軽減させてはくれない。

憶羅先輩は、東海林の方に小さく笑っている。「ショウジンも大変だねー」なんとなく、憶羅先輩に悪意を覚えたのは、きっと気のせいではないだろう。

「……、つまり、もし昨日一昨日が終業式じゃなかったら、俺はこんなことを知ってるはずがないだろ？まだ今日は、憶羅先輩とメールでしかやり取りしてないし、今日の『運命』なんて、テレビでやってるわけがないし。だから、俺がそんなことを、本来はこの時点で知っている筈がなかったんだ」

それを聞いて、やっと「なるほどの」数回肯いてくれる赤龍だ。少しだけ疲れたような気がしたのは、きっと東海林の気のせいではない。このまま眠ってしまっていだろうか。

「なーるなる」

雄大まで、東海林の説明に納得している。

「おいおいおい、」

小さく東海林は呟くが、その言葉は雄大にまで届かない。

「まあ、大体そんな感じかな」

憶羅先輩は言つと、不敵な笑みを東海林に浮かべる。「まさか、本当にそんなことが起こつてるだなんてね、驚いたよ」

その言葉から読み取れることは、こうだ。

「先輩、俺の事信用してなかったんですね」

東海林は、どこか納得がいかないような、そんな表情で憶羅先輩に言った。信用されていない、と言つのは、あまり気持ちがいいものではない。それだけは確かだ。

「それじゃあ、シヨウジンは誰かから、『UFOが飛んでた』って言われたら、それを鵜呑みに出来る？」

はつきり思う。

出来ない。

しかし、それを言われてしまうと、東海林は返す言葉がなくなってしまう。「……、」沈黙を保つ。

「確かに、そんなこと言われて信用したら、シヨウジンは多分精神病院に行った方がいくらいの頭ポンぽコリンのくるくるぱーだつてことになるな」

「お前だけには言われたくない雄大」

声のトーンを低くして、東海林は雄大に呟いた。「えー、」雄大はごちゃごちゃと何かをぬかすが、そんなことをいちいち気にしていられる場合でもない。

「でも、本当となると、かなり厄介だね」

憶羅先輩は、静かそうに言った。

本当に厄介なのは、これからなのだ。憶羅先輩を納得させること以上に、厄介なことがこれからある。

それだけは、確かだった。

「そうなるよ、これが歪みなのかどうかっていうのも、怪しくなってくるしね」

それは予想外だった。
考えにすらなかった。

しかし、そう考えるのは確かに普通だ。東海林はその言葉について、色々と考えてみる。

ビースターは、歪みを感知することが出来る。時間や空間、それから『運命』の歪みのことだ。だが、今回、歪み『のようなもの』を東海林が認識したが、ビースターはそれを認識しなかった。

東海林や赤龍、青龍には分かるが、ビースターには分からないような物。

歪みの条件外の物だ。

まずは、これが歪みかどうか、と言うことを疑わなければならな
いと言うことだろうか。考えてみる。

「はっきりと認識できてるわけじゃないからわかんないんだけど」
憶羅先輩は言う。

「運命は歪んでないと思うよ。ショウジンが証拠として挙げた、猫
がおぼれるっていうことが運命だったからね」

言っていることがよく分からない。

「それって、つまりどういうことなんですか？」

東海林は、憶羅先輩に尋ねてみる。

それに続いて、「分かりやすく、説明するのじゃ」赤龍は言った。
聞いた憶羅先輩は、「赤龍君にもわかりやすく、か……。難しい
なあ」おどけた口調で呟いた。その一言を笑えるほど、今余裕がな
いと言うことだろうか。東海林の中からは、微笑みが絶えている。

「もし、運命が歪んでいるんだとしたら、俺が今認識している運命
っていうのは、歪む前にショウジンへ教えたらしい運命と、食い違
ってるはずなんだ。歪んでるからね」

頭の中で、東海林は図を考えてみる。

一昨日聞いた運命≠今日の運命。終業式が繰り返されているのな
ら、この場合運命が歪んでいることにはならない。

一昨日聞いた運命≠今日の運命。前と条件が同じなら、この場合、

運命が歪んでいることになる。

納得する。

繰り返されていても運命が同じ、と言うことは、運命が歪んでいるわけではない。

「でも、時間が歪んでるっていう可能性は？」

思わず、東海林は尋ねてしまう。

少しだけ考えるように、憶羅先輩は「うーん……、」とうなる。

何か難しそうな顔をして、考えに耽入っていく。

「……、その可能性もあるけど、でも、こんなにも規則正しく時間が歪む、なんてこと、まずないと思うんだ」

はつきりと、憶羅先輩は言った。

東海林の方へと視線を向けると、確認を取るように、こう尋ねる。

「東海林君にとって、丁度昨日と一昨日が、終業式だったんだよね？聞いている話からすると」

疑いの余地もなく、頷く。

「その間に、時間の流れが変則的になったりなんていうのは、してないんだよね？」

これも、東海林が経験したことだ。

頷く。

「それでいて、きっかり昨日と一昨日、終業式だった。っていうことは、可能性はあるけど、少ないんだ。かなりね」

憶羅先輩は、そう告げていく。

それに対して、東海林は怪訝そうに視線を送るしかできない。

「どう言うことですか？」

尋ねる。

聞いた憶羅先輩は、「考えてもみてよ」東海林に思考を促していく。

「時間の歪みなんて、人のことを考えない。何もね。そもそも感情がない。だから、東海林君が、丁度一日だと認識できる範囲で、時間が繰り返される、なんてことはまずあり得ないんだよ。もしかし

たら、夕方になったら突然夜になるっていう可能性もあるし、朝だったのが突然夕方になる、なんていうのも考えられる」

考えてみたら、確かにそうだ。

歪みそのものが何かの考えを持っているのなら別だが、こんなに規則正しく一日が繰り返される、なんてことは、可能性としては少なくないが、高いわけではない。

「確かに、」

東海林は納得する。

赤龍は納得しない。

「どうということじゃ？」

やはり、赤龍は何も考えていないようにしか思えない。きっとそう思うのは、東海林だけではない気がする。

青龍は目をつぶって、何かを考えているようにも見えなくはない。雄大は、何も考えていないように見える。

「だからさ、ただの歪みなんて、適当に出来るだろ？だからそれと同じで、夜だったのが急に昼になっても、歪みだとかしくないんだ」

しかし、とも赤龍は考える。

「じゃが、丁度零時と零時が繰り返されているのじゃったら、どうなるのじゃ？」

何も言い返せなくなる。

聞いた東海林は、憶羅先輩の方へ視線を向ける。「確かに、その可能性も低くは無いんだよね」と答える。

「ただ、もし本当にそうなのだとしたら」

逆説的にも、憶羅先輩はつなげる。

「俺たち（ビースター）が気付かないわけがないんだけどね」

その問題点もあった。

そもそも、ビースターは時間と空間、それから運命の歪みを正す。つまり、何か一つが歪めば、客観的に判断することが可能、と言うことになる。

しかし、今回ビースターはそのことについて、何も感知していない。勘付いてすらいなかった。

「そもそも、これを『歪み』だっていう前提を、取り払わないといけないみたいだね」

正論だ。

それは、確かに正しいことだった。おかしいところは見当たらない。ただ、そうするとおかしいことになる。

「……だとしたら、」

青龍が、口を出す。

憶羅先輩は、青龍の方に視線を向ける。

細めながら、青龍は、何かを威嚇するような視線で、憶羅先輩の方を見つめる。小さく口を開く。

「……一体これは、何」

当たり前な疑問だった。

東海林は、『歪み』だとずっと思っていた。これが歪みでないのなら、一体何なのかとも思っていた。つまりは、これが歪みでないと、東海林には納得できなかったのだ。東海林の頭は、そんなに柔軟な構造を取っていない、と言うことがよく分かる。

「確かに、歪みじゃなかったら、なんなんなん？あ、ナンっておいしいよね」

最後の一文は気にしないとして、雄大も疑問に思ったようだ。それから、雄大はナンが好き。

「さあ、知らない」

一言は、余りにも無責任に聞こえる。憶羅先輩の一言で思えたことは、それだけだ。しかし、それ以外に何を答えることもできない。それが、憶羅先輩の中では正しいことなのだ。これは何か、知らない。

それに、憶羅先輩が責任を持っているわけでも何でもない。歪みなら、憶羅先輩に責任があると言うことが出来るが、これは出来ない。そもそも、憶羅先輩に責任なんてものは無いのだ。

「でも、」

とも、憶羅先輩は続ける。

逆説だ。

瞬間的に、東海林は憶羅先輩の方へ視線を向ける。どこまでもいたずら気で、どこことなく威厳を放っている、不思議な雰囲気を持っている。

つまり、

憶羅先輩は、少なくとも何かを知っている。情報の一部か、情報の根源。

「聞いてみれば、分かるんじゃない？」

あるいは、他力本願ともいう。

それを聞いた赤龍は、少しだけ呆れた風な表情を憶羅先輩に向ける。「一体、誰にと言うのじゃ？」

なんとなく、心当たりがないわけでもない。

憶羅先輩は、小さく鼻で笑い、赤龍を一笑する。どこか深い視線を向けると、その向こうには、狼が隠れていると分かる。

そうだ、憶羅先輩は、狼だった。真っ黒な、漆黒の、黒。

「まあ、行けばわかるさ、」

不敵な笑みが、東海林たちに向けられた。

綺麗な結晶

言われた場所は、知っている場所だった。

ここを知らないわけがなかった。東海林たちにとつても、きっとこの関係者にならだれでも、この場所はいろいろな方面で、色々な意味を持っている。ゲーム屋としても、あるいは、情報屋としても、^{ながみや}「長宮の店ではないか」

赤龍は言葉を繋げる。

今、東海林たちがいるのは、新宿の裏にある店の一つ、ゲーム屋でもあり情報屋でもある場所だった。

店主は、^{ながみや}長宮 ^{しゅうれいこうき}秋冷高貴と言つて、今まで様々なことを教えてもらった。もしこの人がいなくなったら、きっと東海林は、ここまでたどり着けなかっただろうと思えても不思議ではない、そんな人物だ。「憶羅先輩は俺の寮で待つてるつて言うし、全く……、」

東海林はばやきながら、小さくため息を吐こうとする。しかし、赤龍の表情を一瞥すると、そのため息を腹の奥底にしまい込む。

「またここ？」

ばやいているのかそうでないのか、どちらとも取れない口調で雄大が言つた。

確かに、この店にはかなりの回数訪れている。ゲーム屋としても、情報屋としても。

だからこそ、東海林は緊張していたともいえる。歪みでなかったら、一体何なのか、それを東海林は知ることになるからだ。

まだ東海林は、あの憶羅先輩が言つたことを覚えている。

東海林君は、100%幸福にはなれない。

二通りの解釈が可能だ。

絶対に幸福になれない、と言うとらえ方と、100%の幸福は得られない、と言う解釈。

どちらにしても、最大の幸福は得られない、と言うことだけは確

かだ。もしかしたら、東海林が選んだその方向に、もう運命が流れて行っているのかと思うと、どうしても、心が平常を保っていらなくなる。

だが、そんなことを言っではいられない。

平常を保てていらなくても、東海林はこの道を選んでしまった。それはもう変えられないし、もしかしたら、東海林は変えようもしないかもしれない。これは東海林の選んだ道だ。だから、東海林が何とかしなくてはならない。

もし運命がその方向に流れているのだとしたら、その方向に流れて行かなければならない。それが東海林のしなければいけないことだからだ。運命に沿って、突き進んでいくしかないのだ。

「なんとなく、分かってたけどな」

小さく、東海林は赤龍に言った。

この店に行く状況、と言う物が、なんとなく東海林には分かってきていた。この店に来る時の状況、情報不足だ。

まさに、今がそれだ。東海林たちは、『歪み』ではない何かにとられ、それを殆どみんな認識しないでいる。まずは、それが一体何なのかを知る必要があるし、あれば、どうやってこれを元に戻すことが出来るのか、まで知らなければならぬ。

「……、」

青龍は沈黙する。

「分かっていた、とな？」

赤龍が東海林に尋ねてくる。

聞くと、「だって、今分からないことだらけだろ？まずそれを埋め合わせないと、どうにもできないってことだと思う」東海林は答える。

「なーるなる」

その言葉に意味があるのかないのかは別として、雄大は小さく呟く。

「しかし、やはり憶羅も知っておったのじゃな」

店を見ながら、赤龍は小さく呟く。

この店を知らない東海林の関係者は、もしかしたら、いないのかもしれない。少しだけ考えてみる。

「まだー？」

気怠そうな、やる気のない雄大の声が、東海林に向けられた。

東海林は、ポケットの中の携帯電話を取り出す。携帯電話はいつもと変わらない。何の知らせも来ていない。

「まだ来ない」

憶羅先輩に言われたことがある。

長宮の店に入る前、俺がメールをするから、それまで待機してて。それだけを聞くと、いつまで待機していればいいのか分からない。だが、そう言われたからには、東海林は待機していなければならぬ。

「メールで、何を知らせようというのじゃ？ 知りたいことなら分かっていることじゃし」

呟くように、赤龍が言った。

確かに、その通りだ。

東海林は思う。

聞きたいことは分かっている。それに、東海林はこの店のお得意さんだ。ゲームを買うという点に関しても、情報をもらうという点に関してもだ。顔もお互い知っている。聞くことが分かっているのに、わざわざメールを待つ、と言うのも変な話だ。

きつと何か考えがある。

そう思いながらも、その考えが何だかわからない。憶羅先輩が考えていることを、東海林はあまりうまく理解することが出来ない。何かの野望があるのか、それともただのボランティアなのか、全く分からない。

ビースター軍団だってそうだ。憶羅先輩は、傷をいやすのと同時に、先輩たちをビースターへと変えた。それ以降は、憶羅先輩の下で動いている。

こう考えると、憶羅先輩を信じていいのかわからなくなる。

しかし、信じる信じないの問題でも、はっきり言ってこの際ない。この際あるのは、憶羅先輩と言う標識だけだ。それがなければ、目的地へたどり着けない。憶羅先輩は、必要不可欠なのだ。

「まあ、きつと何か考えがあるんだろう」

分らないが、東海林はそう答えておく。

その時だった。

ブルルルルルル　ブルルルルルル

携帯電話のバイブレーションだった。東海林の携帯電話だったことは確かだ。

「……来た」

青龍が、小さく呟く。

携帯電話には、メールのアイコンが現れる。差出人は、分かり切っている。勿論、憶羅先輩だ。

「さて、どんなメールかな」

言いながら、東海林はメールのアイコンをタッチする。

『差出人　憶羅先輩』

添付　21126513・San

件名　添付ファイルを

本文　今の店主に見せるんだ』

その意味が、よく分からなかった。

それ以上に引かかる単語が、その中には存在している。訳の分からない添付ファイルの名前も、いつものことだ。

「へ………」

一瞬、東海林は困ってしまう。

長宮が店を辞めたという知らせは聞いていない。そもそも、長宮がこの店を辞めたら、この店ごとなくなってしまうような気がする。のは、東海林の気のせいだろうか。それとも、この店は案外、継がれてきた店なのだろうか。

「……？」

訳が分からない、と言わんばかりの表情を、携帯電話に放つ。

「東海林、メールは届いたのじやろ？」

赤龍の声が、東海林の耳に響いてくる。

聞いた東海林は、赤龍の方に視線を向ける。

「ならば、店の中に入ろうぞ」

言うとおりのだ。

メールの中にあつた気になる単語、新しい店主。

それは、店の中に入りさえすれば、すぐにわかることだ。長宮で

なくても誰でいても、この添付ファイルを見せさえすればいいのだ。

「ああ」

東海林は言うつと、小さく息を吸う。

鬼が出るか蛇が出るか。

おそらく、この件に関しての真相は、きっと見えてくることだろう。そう東海林は信じている。

いたのは、子供だった。まだ小学生くらいの背をしている子供だ。

子供が、いつも長宮の座っていた場所に、座っていたのだ。

「……子供？」

青龍は、小さく呟く。

もしかして、この子も龍が見えるのだろうか。

考えながらも、東海林は少しだけ口を歪ませる。

「東海林、何とかせぬか」

後押しするように、赤龍が東海林に言った。そんなことを言われ
ても、東海林は少しだけ困ってしまう。

「ほーら、シヨウジン」

雄大が言った。

つまり、もうどうにでもなれと言うことだ。

思うと、小さく深呼吸をする。酸素を肺の底まで保つと、体の中

に酸素を行き渡らせる。二酸化炭素が多くなった空気を、東海林は吐きだす。

「えっと……、や、やあ」

朗らかに、東海林は言った。

「シヨウジン不気味いー」

軽く、東海林は、雄大の鳩尾にひじ打ちする。雄大の視界が、一瞬暗転しかけたことは事実だ。

その子は、まだ何も話していない。東海林の顔をじつとのぞきながら、呆然と眺めているように見える。

「お、俺は東海林、よ、よろしき、ね？」

「東海林、口調が固くなっておるぞ」

赤龍のアドバイスだった。

聞いても、改善の余地のないアドバイスだった。少しだけ口の中を乾かしながら、東海林の顔が引きつってくる。

「あ、あのさ、お兄さん、知りたいことがあるんだけど……」

東海林は、何とかそこまでその子供に話を持っていく。

その瞬間だった。

「かんきょうおさんのたんじえんとしーたがじげんてきほうかいをむかえることはけいたいでんわのらつかにつながります、おにいさん」

雄大以上に、限りなく意味のない言葉を呟いた。

「……はい？」

一瞬沈黙すると、東海林はその子供の方に視線を向ける。

「おのぞみとあらばへっどほんのきょうかいせんまでけんばんをたたきつづけるからそのせんとらるどぐまをがびようにさしてれきしのいろがくさい」

とりあえず、意味が分からない言葉を呟いていることだけは確かだ。

「ど、どういうことじゃ東海林、翻訳せよ」

赤龍が言ってくる。

「さあ、どうだ」

小さく呟いた。

その時だった。

「……、」

さつきと変わらない表情で、その子供は東海林の方に視線を向ける。一瞬、またあの無意味な語列が炸裂するのかもしれないが、その声は、さつきよりも静かで、それでいて穏便だった。

「これはあくまでこいつのあたまのなかにきおくさせてあるぶんであつてこいつじしんがしゃべっているわけではない」

意味があつた。

しかし、その言葉に心がこもっていないのも事実だったし、その言葉の意味が、東海林にはよく分からなかった。

「記憶……、だつて？」

小さく、東海林は呟いた。

訳が分からない、と言いたげな視線を赤龍は向ける。

「む?! どういうことじゃ?!」

混乱しているようにも見えなくはない。ただ、これを見ておかしいと思わない方が、この場合おかしいのかもしれない。

そんな言葉がないも同然と言うように、その子供はどんどんと、言葉を進めていく。

「ほしいじょうほうはなにか」

さつきと変わらない、東海林たちを見上げるような、顔を覗いてくるような、そんな事前。

思考の停滞を感じる。

この言葉を聞いているだけで、東海林の思考がどんどん凝り固まっ
て行くような、そんな気がしてならない。いい凝り固まり方ではなくて、悪い凝り固まり方。

「えつと……、」

東海林は言葉をはさむ。

「今日、と言うか昨日から、一日が繰り返されているんだけど、そ

れについての、情報が……、」

言いかける。

これで、本当に情報が手に入るのだろうか。

思わず、東海林は疑問に思ってしまう。以前は店の奥底に連れていかれ、そこで本と資料をかき集めてから、情報をもらっていた。その方が、なんとなく情報をもらっている、と言うような感覚になれていた。それは確かな話だった。

だが、この状況はどうなのだろう。

ただ子供に話しかけて、ただ子供が応答しているだけだ。ただその子供が、どこまでもおかしいと言ってしまえばおかしいのだが。

「……ある？」

尋ねる。

「そんざいする」

即答だった。

安堵の息を吐く暇もなかった。

「しかしそのことについてのじょうほうをほつするということはそれをただすつもりなのかいなか」

棒読みだ。

何の感情も籠っていない。

そのはずなのに、東海林は、どことなくその言葉に威圧されているような、そんな気がしてならなかった。たかが子供だ。東海林たちよりも年齢が低い。そんな子供なのに、東海林は威圧されている。……、」

喉が渴いてくる。

口の中が乾燥し、言葉がうまく発音できなくなってくる。そもそも、東海林が言葉をなぞれる状態にあるのかどうかすら、本人には疑問だった。

「……これ、東海林、答えんか」

小さく、傍で赤龍が東海林に言った。
はっとなる。

「あ、ああ、」

赤龍を一瞥すると、東海林は固唾を飲む。

何故こんなに緊張しているのか、それは東海林にも分からない。きつと誰にもわからないような気がする。それが気のせいではないような、そんな気もする。

「勿論だ」

東海林は言った。

そのために、新宿まで来たのだ。そう答えるのは当たり前だ。

「りようかいしたそれならばしょうほうをあたえるがこころしきくこと」

片言でもなんでもない、ただの音の样だった。聞いているだけだと、何の意味もないような、そんな言葉を並べただけのようにも思えてくる。しかし、上っ面にしか意味がない。上っ面を見るしかないのだ。

「これはただのゆがみではなくあるそんざいをしさするゆがみだ」
喋り方が、少しだけゆっくりになった。

ここまでは、理解出来ている。それだけなら、東海林にも簡単に理解できる。

「そのそんざいはぜったいてきなちからをもつぜったいてきなそんざいにかぎりなくちかいものだしかしそのぜったいてきなそんざいはあくまでぜったいてきのようなそんざいであってかならずしもぜったいてきというわけではない」

なんとなく、東海林には話が読めた。

少しだけ目をつぶって、東海林は「なるほどな、」小さく呟く。

聞いた赤龍は、東海林の方に一瞥をくれる。少しだけ驚いたようなその視線を、東海林も窺い知ることが出来た。

「その存在を、倒せてことか？」

その子供に、聞いた。

あくまで、これは東海林の解釈だ。もしかしたら違うのかもしれない。しかし、東海林は知っている。

自分は100%幸福になれない。

「そのとおり」

全く何の驚きも進展もない口調だった。

ただ喋っている、とでもいうべきなのか、棒読みよりもさらに感情と言う物がそがれているしゃべり方、としか東海林には分からない。

「そ、それでは……ッ」

赤龍が、その子供の方に視線を向ける。

「一体赤龍らは何を倒せと言うのじゃ！」

子供の視点は、あくまで東海林に向けられている。赤龍の方には向いていない。そもそも、目に映っているのかさえ怪しいものがある。

「何と戦えって？」

軽く、雄大は質問する。全く何も考えていないことが筒抜けな口調だったが、それはどこまでも、雄大らしさを持っている。

「それはいずれわかる」

答えになっていない。

「ひとつだけかぎをわたしておこう」

鍵は答えではない。

あくまで、答えにたどり着くために必要なものだ。なくてはならない物、と言うことになる。

答えを初めから求めるのは、もしかしたら傲慢なのかもしれない。答えはあくまで、自分で探せと言うことなのだろうか。

「きょうあまのしたがかくえんだいがくふぞくちゅうがくこうとうがつこうのなかにわにてんかいされつつあるそらへのとびらへとあしをはこぶといい」

それを聞いて、東海林が驚嘆を覚えないわけがなかった。

聞いた東海林は、目を丸くしてその子供の方に視線を向ける。子供の目は透き通っていて、どこまでも真っ直ぐと、東海林たちの方へ向けられている。それが一体何なのか、東海林には分からない。

「蒼空への……、扉」

つまり、龍（竜）の世界へとつながる扉。

開けたなら、竜（使われる物）が押し寄せてくると思われている扉で、絶対に人為的には開けてはいけない、と言われている。

「今度は、俺のターン」

どこか、軽い声が聞こえる。

雄大だ。

「え、俺のターンって」

東海林は言いながら、雄大の方に視線を向ける。少しばかり笑いながら、雄大はネックレスにしている正八面体の結晶を、東海林の方へ軽く見せた。

「これが無かったら、開かなかったでしょ？」

天野下の中庭。

そこに、蒼空への扉へとつながる道がある。道を開けるための鍵は、雄大の言うとおり、その結晶にある。その結晶が、蒼空への扉へとつながることも確かだ。

「これをわたす」

下の方から、手が向けられた。

「ん？」

言いながら、東海林は子供の方に視線を向ける。

子供の手に持たれているのは、透き通ったガラスのような、六角柱の物体だった。綺麗にカットされているそれは、これ以上こんなきれいな六角柱はないと言えるほど、はつきりとした光を放っている。

東海林は手に取ると、少しばかり目を細めた。

「……、これは？」

子供に尋ねてみる。

揺らがない視線と、静寂にも似た何か。途轍もない冷たさを持つ透き通った六角柱。

「いずれわかる」

そう言われるのは癪だったが、子供が何かを知っていることだけは、確かだった。

ずっしりとした感覚があるわけでもなく、空気みたいに軽いと言えは言い過ぎな気がする。しかし、その六角柱は限りなく、重量と言う物がないのも事実だった。重量がない、と言っよりも、存在そのものが危ういような、そんな気がしてしまう。

もう昼過ぎになっていた。赤龍の背中に乗りながら、東海林は携帯電話で時間を確認する。まだ学校に行く時間まで、たっぷり時間がある。しかし、何か、とてつもない胸騒ぎがしている。六角柱から、それがひしひしと伝わってくる。

「なあ、赤龍」

腹の奥底に溜まった何かを、吐き出すように東海林は言った。聞いた赤龍は「なんじゃ？」声を発する。声は軽快で、それでいてどこか明朗としている。

「俺たちは、何を倒さなくちゃ、いけないんだ？」
尋ねる。

それしか、今の東海林には出来ない。

「そんなこと、赤龍が知っているわけあらんじやろう」
それもそうだ。

考えても見る。

赤龍は、さっき子供から話を聞いたばかりなのだ。東海林だってそうだ。だから、赤龍が詳しいことを知っているわけがないのだ。しかし、さっきの子供が言った言葉に、不安がないわけでもない。この歪みは、ただの歪みではない。ある存在を示唆する歪みだ。ある存在↓倒すべき相手

そのある存在は、絶対的と言ってもいいくらい限りなく絶対的な力を持つ。

ある存在↓ほぼ絶対的↓倒すべき相手

これに不安を抱かないわけがない。絶対的な力を持った存在と、どうやって戦えと言うのか、それすら東海林には分からないし、為を張れるとも思えない。赤龍が一緒にいても、それが可能な気がしないのは、東海林だけの不安なのだろうか。

「絶対的な存在……、か」

ただし、『ほぼ』が付く。

『ほぼ』絶対的な存在。しかし、限りなく絶対的に近い力を持つ、と言うことは、他を寄せ付けけないほどの力、と言うことだ。

絶対的な存在、と言う物なら、東海林には心当たりがある。

神だ。

しかし、そんなものが存在するとは思えないし、そもそもそんなものとどうやって戦えと言うのか。東海林には分からない。ゲームの世界でなら、神が敵になることもあり得る。しかし、これはゲームの世界でもなんでもない。

これは、東海林にとっての現実なのだ。

全て、うまく行くわけがないのだ。

「不安、かの？」

小さく、赤龍は尋ねてくる。

聞くと、「う……、そんなことは、……、」東海林は口を閉じる。本当に静かに息を吐くと、東海林は「ある」と答える。

「そもそも、『ほぼ』絶対的な存在とはなんなのじゃ？」

赤龍にも、それは分からない様子だった。龍でも分からないことを、僕が知っているわけがない。

「知らない、」

簡単に、東海林は答える。

「うむ……、」

どこか落胆するように、赤龍は小さく言葉を吐いた。一体何がどうなっているのか、東海林には情報が、まだ足りないような気がする。

「でも、」

東海林は言う。

「俺たちがやらないと、きつといけないことなんだろうな」

ある意味、それだけが確かと呼べることもかもしれない。もし、あの子供が嘘をついていなければ、の話ではあるが。

あの子供にも、色々な疑問が残っている。一体誰なのか、言うことすら東海林たちには分からないし、一体何故、子供が店主を務めているのか、と言う点に関しても、東海林には全く分からない。そもそも、あの台詞を誰が記憶させたのか。長宮はどこへ消えてしまったのか。

分からないことだらけだ。

「確かに、そうかもしれない」

小さく、赤龍は呟いた。

ただ子供の言うとおりになっているだけ、と言うわけでもない。あの子供は、何かを知っているのだろうか。それとも、本当にただ記憶していることを、ずらずらと並べているだけなのだろうか。あるいは、そう言った体系化された何かを、教え込まれただけなのだろうか。

「じゃが、まだ分からないことだらけじゃ」

赤龍が言うことも、正しかった。

情報屋に会ったからって、全てが解決するわけではない。全てが分かったわけでもないし、全てが納得できたわけでもない。そんな事では、解決できるわけがないのだ。

思いつつも、解決と言う意味がよく分からなくなってくる。

一体、何が解決で、何が未解決なのだろう。

ほぼ絶対的な存在を倒せば、何もかも解決なのだろうか。それとも、全く別の何かなのだろうか。

分からない。

分からないし、それ以上考えたところで、東海林に答えが出せるわけでもない。考えるだけ無駄と言うわけでもないが、これ以上考

えるのは、ある意味での、精神的負担になりかねない。

深呼吸すると、頭の中が少しだけ、すっきりしていくのを感じる。未解決は未解決のままだが、それはそれで、これはこれだ。それだけの話だ。

「まあ、とりあえず、憶羅先輩に報告しておくか」

東海林は言うつと、ポケットの中から携帯電話を取り出す。それを開くと、憶羅先輩の番号に電話を掛ける。

「でもさー、なんでなんだろうーねー」

ふざけているのか、どうでもいいのか、それとも何でもないけれど、わざと停滞している風な口調を見せているのか。

雄大が、青龍に呟いた。

聞いても、青龍は特に何も答えない。それだけでは、答えようもない。

「青龍がこれを認識できたっていう理由みたいなの？」

それを、青龍が答えられるわけがなかった。

「……、」

沈黙を極めながら、翼を飛ばたかせる。ただそれだけだ。それ以外、考えることしかできない。

「俺が思うにー、何か毒電波受信みたいなのそんな感じだと思うんだよね、違う？」

聞かれて困るのは、青龍だ。

青龍はただ考えているだけで、それが正しいとも間違っているとも思わない。それはあくまで、ただの仮説だ。どこかの学者みたいに、自分の仮説を信条にしようなどとは毛頭思っていない。そこまですべて青龍の思考は、凝り固まっていなかった。

「……、可能性はありうる」

それだけ言っておけば十分だ。

思うと、青龍は小さく吐息を吐く。この気温は、青龍にとっても過ごしやすく、赤龍にとっても過ごしやすい様子だった。冬は寒いと聞いていたが、清々しい程度に涼しいくらいだった。今年は暖冬

らしい。

「それじゃあ、青龍はどう思ってるの？」

自分の考えていることが正しいとは思っていない。

ただ、仮説段階でも、言うてはいけない道理はない。あくまでそれは仮説だ。それ以上でもそれ以下でもない。

「……歪み、絶対的な存在が、龍と関係があるのかもしれない、と言うこと」

それだと、疑問が生じるのだ。

だから、あくまで仮説段階。

「あ、なるほど、だから青龍も感知できた……？ あれ？」

浮かび上がる疑問は、想定で二つ。

一つ目、もし龍と関係があるのなら、何故他の龍は何も言っていないのか、繰り返しを認識していないのか否か。

そして、二つ目、

「何でショウジンが認識できたの？」

それが、最大の謎。

もしそれが正しければ、の話ではある。

東海林は、このことを誰よりも早く認識した。繰り返しが起こっていると言うことを、青龍たちが認識する一日前から、東海林は認識していた。龍と関係があるのなら、全員でなくても、せめて青龍たちから認識すると言うのが、普通に考えられることだ。

それと相反するように、東海林から認識した。

「……不明」

それだけ言えば、十分だった。

不明は不明だ。分からないと言うことが分かっているだけで、その内容自体は不明、つまり明らかにされていない。

「それに、他の龍が認識してない理由は？」

尋ねてみる。

雄大も、考えるときは考える様子で、少しではあるが、声に、好奇心と呼べるものが孕まれていた。それは確かなことだった。

「……不明」

言うしかない。

分からない、と言うのは芸がない。

「……、それに」

しかし、一つだけ考えられることがある。

仮説の中の仮説だ。全く信憑性と言う物は無い。だが、一つだけ思い浮かんだことはあった。あくまでも、可能性の話。

「……もしかしたら、龍全員認識しているかもしれない。ただ、それを龍が隠しているだけなのかもしれない。……理由は不明」
言う。

勿論、分からないとは言わない。

「あ、そっか、」

雄大は、何かを考えているのだろうか。それとも何も考えていないのだろうか。青龍には、よく分からないことでしかなかった。ただ、それはどうでもいいことでしかない。

「それじゃあ、もしかしたら龍は分かっているかもってこと？」

青龍には、これが鸚鵡返しのようにしか聞こえない。

ただ、間違った内容でもない。可能性的に考えれば、それはありえない話でもない。ありえない話ではないと言うだけで、もしかした違う、と言う可能性も大いにある。後者の方が断然、確率的には高いかもしれない。

「……、」

少しだけ考えたが、一度、青龍は頷いて見せる。

「それじゃあ、」

何かを思いついたようで、雄大はポケットから携帯電話を取り出す。そして、大介のアドレスを表示すると、電話番号をクリックする。今は昼だ。きつともう終業式も終わっているはずだ。それに、東海林の話が正しければ、今日は部会ではなく部活だ。緑龍にばったり出会う、なんてこともないだろう。

「ぴっぽっぽと」

口で言うと、携帯電話を耳に押し付ける。
無機質な発信音を裂くようにして、携帯電話から音が聞こえてくる。

『もしもし』

それは、憶羅先輩の声だ。憶羅先輩に電話をしているのだから、他の人が出るわけがないのだ。

「憶羅先輩、とりあえず、行動指示が出ました」

受話器に向かって、東海林は話しかける。

聞くと、『どんな？』状況を完璧に把握している、と言わんばかりの流暢な口調で、憶羅先輩は呟く。

「今日、蒼空への扉に向かいます」

一瞬、『へ？』と憶羅先輩は声を放つ。はつきり言って、その意味が分からない。それは東海林も同じだ。

『何でいきなり？』

納得したことがある。

憶羅先輩は、蒼空への扉を知っている。

だが、今さらそれが分かったところで、東海林には何もならない。憶羅先輩がそれを知っていようがいまいが、やることは分からない。「何だか、敵を倒さなくちゃいけないらしいです」

徐に、東海林は続ける。

「何でも、ほぼ絶対的な相手、だとか」

奥から聞こえてくる声は、『……ほぼ絶対的……、ねえ』どこか猜疑的な、そんな口調であったことは確かだ。

『それで、蒼空への扉の中に、そいつがいる訳？』

静かに、憶羅先輩は尋ねてくる。

聞いた東海林は「あ、正確には、天野下の中庭にある、蒼空への扉らしいです」言っておく。

それに対しての答えが、これだ。

『あー、あの』

どこからどこまでを知っているのか、東海林には分からなくなる。

憶羅先輩は、どこからどこまでを知っているのか、この際そんなことは問題ではない。問題にしてみたいが、今はそれどころではない。それが分かっているから、東海林も問題にしようとは思わない。「そこに行けって、言われました」

何が待っているのか。

言ってみなければわからない。

それが一番、東海林にとって不安要素になる。それは間違いない。余り快さは感じない。辺り前だ。

『そこに、何かいるって?』

分らない。

そこに何かがいる、だなんてあの子供は一言も言っていないかった。ただ、言っていないからと言って、何もいないとは考えられない。そもそも、何も無かったら、「足を運ぶといい」なんて言わないはずだ。

「……、いいえ、でも、」

東海林は言葉を、前に進ませていこうとする。

「いずれ、ほぼ絶対的な存在と、戦うことになる、らしいです。この、歪みみたいなものを、なくしたいのなら」

語尾に小さく、「らしいです」、と東海林はつける。あの子供が言ったことの真偽を問うつもりなんて、東海林には全くない。

あくまで、指標があるだけなのだ。そこに指標があるから、東海林はそれに沿って歩いて行くだけだ。大きな流れに流されながらも、自分の選択があつての行動だと言うことを、忘れてはいけない。

『なるほど、あの人らしいや』

おどけた風に憶羅先輩は言つと、受話器の奥で小さく笑う。その光景が、目の前にありありと広がってくるような、そんな気がしてならない。

「あの子供、誰なんですか?」

話が逸れた。

しかし、もう本題はほとんど終わった。あとは寮に帰って、一時

形勢を立て直してから、天野下に行くのが一番いい。少なくとも、東海林はそう思う。

『ああ、長宮だよ』

分らない。

「……子供、ですか？」

はつきり言つて、想像すらできない。あの長宮の息子、なのだろうか、あのへんな子供は。

ただ、考えてみると簡単だ。長宮がいなくなって、情報屋を『継ぐ』のは、子供の役目に他ならない。それが、あんな変な子供であつても、だ。

『うん、知らなかった？長宮だよ、長宮 ながみや 視仇 しあた』

これで、よく分かったことがある。

長宮家は、変な名前の人が多い。

「……視仇、ですか？」

一度、耳の中にこつてりと残っている感覚を、口で放出する。それが名前だと考えると、口の中にすら変な感覚が残っているような、そんな気がするのも確かだ。

だが、それになにかしらの反発のようなものが、東海林の中にあつたのも事実だ。少しだけ、その反発を覗いてみる。

東海林は、考えてみる。

やはり、何かしら突っ掛るものがある。長宮秋冷高貴、それから長宮視仇。

「でも、息子にしては似てないですね、全然」

雰囲気や、体形、顔づくり、何から何まで、秋冷高貴とは違う。それに、まともに言っていることが、情報関係の事しかないというもの、少しばかり気になる。

「でも、息子つてことは、もしかして記憶させたのって……、」

電話の中の憶羅先輩が、『そう、』一度頷くような勢いで、東海林に呟いた。

『記憶させたのは秋冷高貴。あの子の頭の中に、全ての情報につい

てが入ってる』

聞いた東海林は、「全て……？」その単語に気を取られ、復唱する。

数回、長宮の情報庫のような場所に足を運んだことがある。大量の本とファイル、大量の情報があそこにはあった筈だ。それを視仇の頭へ、全て移したというのだろうか。東海林には考えられない。

『うん、秋冷高貴には、情報屋よりやらなくちゃいけないことが出来たみたいなんだ』

聞いても、東海林はよく分からない。

分からない、と言うよりも、そもそも東海林は秋冷高貴のことを、あまり理解していなかった。

秋冷高貴がそう言った人物なのか、それを全く理解していなかった。

だからと言って、東海林に何か損があるかと言われると、それは無い。あくまで東海林は、長宮が持っている情報が欲しかっただけであって、秋冷高貴のことを知りたかったわけではない。別に、秋冷高貴がどこに行っても、はつきり言って、それを継いでくれる人がいさえすれば、もしかしたらよかったのかもしれない。

「だから、視仇を」

納得するように、東海林は言った。

全く納得していないし、理解すらしていない。していることと言えば、情報の詮索だけだ。今この状況を、どうやって持ち直すのか。秋冷高貴よりも、東海林たちにはそっちの方が数倍大切だった。

「とりあえず、帰ったら計画を立てようと思うんです。学校に行く時間とか、色々」

憶羅先輩は、『そうだね』東海林に肯く。

『それじゃあ、待ってるよ』

軽く言つと、いつの間にか、携帯電話の奥に響いてくる音は、無機質な機械音だった。電話は切れた、と言うことだ。

何でもない、と言った風な表情で、東海林は携帯電話を耳から離

す。電源ボタンを押すと、小さく吐息を吐きつける。

「ふう……、」

どこからどこまでを憶羅先輩は知っていて、どこから知らないのか。それが東海林には、いまいちつかみにくかった。

「何じゃって？」

赤龍の声が、東海林に尋ねてくる。

それを聞いた東海林は、さっきの内容をつまぐ頭の中でまとめようとする。言葉にまとめようとすると、齟齬が起きることに気が付く。

「とりあえず、寮に帰ってからだつて」

はつきり言つと、それは東海林が考えたことだ。寮に帰って態勢を整えてから、天野下に行く。

「まあ、そうじゃろうな」

赤龍は言つと、翼を羽ばたかせる。風を斬り、それは音を立てて、東海林たちから離れていく。

「何だ？」

電話の奥から聞こえてきた声、それは大介の声だ。

大介に電話を掛けたのだから、それはある意味あたりまえと言つてもいい。これでもし、どこかの会社にでもかかってしまったら大変だ。

「あのさー、緑龍に代わってくれなーい？」

全く力のこもっていない、どこか気怠そうにも聞こえる声だった。しかし、いつもの口調、と言つてしまえばそれで終わりだった。いつもの口調で、いつも通りの雰囲気だ。雄大はあくまで、そう言う雰囲気を保っている。

「緑龍か？何で？」

電話の奥から、大介が尋ねてくる。

そんなことを聞かれても、はつきり言つて困る。今までのことを全て説明するとなると、少しばかり面倒なことが起こってしまう。少なくとも、大介にこの状況を説明しなければならぬ、と言う状

況は出来る。

「何でも！」

少しばかり強引に、言葉を進めていく。

それを聞いた大介は、『な、怒んなくてもいいだろ別に……』少しばかり弱気に言つと、『ちよつと待ってろ、今代わる』呟いた。

それから、少しだけ無音が続く。無音と言つても、その奥には、籠った雑音のようなものが聞こえる。携帯電話の中で、何か砂のようなものがこすれる音が聞こえてくる。

それを破つたのは、声だった。

『はい、電話代わりました緑龍です』

礼儀正しさと言ひ言葉遣いと言ひ声と言ひ、全てが緑龍だった。当たり前な話だ。緑龍が実際電話に出ているのだから、他の誰かなわけがないのだ。

「緑龍君に質問！のコーナーです！」

声を張り上げて、雄大はふざける。

聞いた緑龍は、訳が分からなさそうに『はい？』小さく呟く。『そう言えば、雄大さんって今日、風邪で休んでいるんじゃない？』余計なことに気付く緑龍。

「そんなのはどうでもいいの。あのね、聞きたいことがあるんだけど、」

少しだけ、空気を肺の中にとどめる。言つことは、もうまとまっている。

「あのさ、最近変なことなかった？」

切り出しは、そこからだ。

そこから話を初めて、それから繰り返しの話に持っていく。一番いい方法、と雄大は考えている。少なくとも、雄大はそう思っている。

怪訝そうな口調が、電話の中から聞こえてくる。

『変なこと、ですか？』

雄大に尋ねる声だ。

それを聞くと、「うん！」なんとなく楽しそうな、そんな口調を放つ。実際楽しいことなんて何も無い。ただ、なんとなく楽しげにしているだけだ。

「だからさ、変なこと」

聞いても、緑龍には分からない様子だった。

『変なことなんて、最近はありませんね』

最近は無いです。

まるで、以前まではあったような言いぐさだ。

しかし、考えてみる。

以前より前を比較してみると、殆ど何もかもが変なことで、日常が本当に何も無い日、と思えるようなこともあった。以前より前は、変なことだらけだ。誰かに襲われたり、誰かに救われたり、世界を竜から守ったり。

普通しないような経験だ。

それだけは分かる。

「そう？」

雄大にとっては、今も変なことだらけだ。

本人が自覚しているわけではないが、青龍と一緒にいるとそれが大きく出てくる。東海林、赤龍、そして青龍は、終業式が繰り返されている、と言うのだ。それだけでも変な話だ。時間は常に一方方向に流れている、とは限らないが、それを認識する者が、時間の逆行や可塑など、認識できるはずがないのだ。逆に、出来たら別の意味で大変だ。

だから今、大変なのかもしれない。

「たとえば、一日が何度も繰り返されたり、とか」

聞くと、青龍は少しだけ、雄大に睨みつけるような視線を放つ。

『……それって、どういうことですか？』

訳が分からない、と言うような口調で、緑龍は電話に言い放つ。しかし、そう言うのも、ある意味あたりまえなのかもしれない。

「そのまんまの意味だよ」

おどけたように、ふざけたように。

しかし、確信を持って。

『それじゃあ、変なことはやっぱりありませんね。そんなことは起こっていませんし』

聞いた雄大は、「そーう？」ふざけているとしか思えない口調で、緑龍に呟いた。『ええ、そんなこと起こっていませんから』軽い口調で、しかし丁寧な呟く。ある意味、緑龍の特徴かもしれない。

「まあいつか」

言葉を切り上げると、緑龍は電話越しに尋ねてくる。『一体何が起こって……』気にせずに、雄大は言った。

「じゃね」

そして、電源ボタンを押した。

そうしなければ、話がややこしくなるのは当たり前だ。いちいち全てを説明しなければいけないし、何より、雄大は面倒くさいことが嫌いだった。面倒くさいことでも自分の好きなことならやっていられるが、面倒くさいことで、更に自分の嫌いなことだったら、どんな人でもやりたくないに決まっている。

「知らないって」

青龍に呟く。

はつきり言つて、そんなことはどうでもよかった。緑龍が知つていようが知つていまいが、それは一つの情報に過ぎない。

つまり、緑龍は知らなかった。

黄龍も知らない、とは一概に言うことが出来ない。しかし、知つていてもいなくても、分かったことがある。

龍でも、感知しているしていないがいる。

よく分かったことだ。

「……、やはり、ただごとではない、と言つこと」

ぼそつと、青龍は呟く。

もともと、これはただ事ではなかった。終業式が何度も繰り返されて、それを何度もやらなければならないなんてことは、面倒くさ

いことこの上なかった。

だが、面倒くさくはあるが、ある意味、今一番抱えている不安と言う物を解消できる鍵だという可能性もある。捨てきれない、と言った方がいいのだろうか。

ただ、それをして苦しむ人がいる、と言うのが、雄大には癪だった。

そもそも、雄大は繰り返しを認識してはいないし、そんなことが起こっているとも気づいていなかった。

「絶対的な存在の示唆？それを感じできるのが、赤龍と青龍と東海林ってこと？」

少し、答えにくそうな口調だった。

「……、そう言うことになる」

そこに、新たな疑問が浮かんでくる。

今までも、うつすらとは浮かんできてはいたが、今ははっきりとそれが浮いて見える。疑問の解決は、新たな疑問を呼ぶ。ある意味、定石のようなものだ。

「……しかし、解せない」

青龍は言った。

興味がなさそうな雰囲気で、「何が」雄大は呟く。
頭の中で、色々なことを整理していく。

二つの共通点と、それが示す一つの存在。

「……寺山東海林」

解せないものの一つ。

「ですー」

興味なんてものは無い。しかし、疑問があるかないか、と言う問題は、それと全く関連がなかった。

東海林は、『本来ビースターしか認識できない歪み』を認識することが出来て、『一部の龍しか認識できない存在の示唆』にいち早く気づくことが出来た。

直線の交点が指示した点は、その一点に尽きる。

「……、」

腑に落ちない。

解せないだけではない。

これはもう、『謎』と言う一言で片づけてはいけないような、そんな気がしてしまう。青龍は、少なくともそう思っている。

「でもよ、」

どこか、あまり面白くなさそうな口調で、東海林が赤龍に呟く。それを聞いた赤龍は、東海林の方に視線を向ける。「何じゃ？」

赤龍の呟きを聞くと、東海林は面白くなさそうに、赤龍へ当たる。

「昨日買ったゲーム、」

もう、赤龍には何の話か理解できた。

聞くと、「ああ、あれじゃな」納得したように、東海林へ声を発する。その軽快な口調も、どこか東海林には氣にくわない。

「あのセーブデータ、」

言う。

つまり、そう言うことだ。

それを聞いた赤龍は、「まあ、諦めるんじゃない」笑いながら東海林に言う。

「あきらめられない、絶対に」

どこか恨めしそうに、東海林は呟く。

「しかし、諦めないとしたら、一体どうするのじゃ？」

赤龍の言うことは正しい。正しすぎる。

確かに、昨日の話はもう今日に上書きされてしまっている。課題が消えてしまっているのがそのいい証拠だ。つまり、昨日手に入れたものは、殆どすべてリセットされている筈なのだ。赤龍は、記憶をそのまま引き継いでいるが。

「……、買って、また……、」

それも東海林には癪だった。

当たり前だ。昨日進めたゲームだ。もう一度初めからなんて、東海林には許せなかった。確かに、二回目はもっとスムーズにゲーム

が進むだろう。だが、ある意味それは、東海林の心に反する。

「……、」

気分がよくない、と言うのも当たり前な話だった。

その鬱憤が、どこに放出されるのか、それを東海林は理解している。

「ほぼ絶対的な存在だろうが何だろうが、この恨みは絶対に忘れない覚悟しろ」

苛立ちながら、東海林は小さく言葉を放つ。

なんとなく呆れながら、赤龍は「全く」小さく言葉を放った。小さく、雄大は心の中で逆説をする。

東海林が何であろうと、今のところ敵ではないことは確かだ。それならば、東海林を貶める必要も、殺す必要もない。

雄大は思うと、青龍の方に視線を向ける。

どこまでも遠くを見つめ、何かはつきりとしたものを見据えているような、そんな表情だった。青龍の視線が、一体どこを見ているのか。青龍や赤龍、東海林が一体どんな気持ちをしているのか。

雄大には、考えてもわからない。

考えてもわからないし、そもそも興味すらなかった。

それから蒼空への扉

作戦会議に慣れた憶羅先輩が言う。

「それじゃあ、計画を練っておこうか」

それが第一だ。全員それを分かっている。夜学校に忍び込むには、それなりの作戦が必要だ。セキュリティの問題も、そこには含まれている。

「蒼空への扉があるのは、ここ」

言いながら、憶羅先輩は手書きの地図にある、丁度中央を指さした。学校の上面図。中央にある大きなスペースは、中庭だ。

中庭の中央に、八角形が描かれている。蒼空への扉への入口だと言っことを、東海林たちが知らない訳なかった。正確には、その八角形の中に蒼空への扉があるのだが、憶羅先輩はそのことも知っているようだった。

「そして、警備員室は、ここ」

校門の近くにある、小さな四角いスペースを指さす。

いつも守衛がいる場所だ。確か、電気の管理なんかも、この警備員室でできた筈だ。監視カメラの確認なんかも、勿論そこでできる。「それでもって、校舎内は赤外線センサーだらけ。センサーに引つかからなくても、学校への鍵を開けただけで警報が鳴る。つまり、校舎内を通ることは出来ない」

言い終えると、赤龍の方に微笑みを送る。その意味が、赤龍には分からない。

「解決策としては、赤龍君たちが、それぞれ、俺たちを乗せて中庭に送ってくればいいんだけど、でも、問題がある」

聞いた東海林は、「問題って？」憶羅先輩に尋ねる。

「多分、赤龍君たちが、二人くらいの重量を乗せて飛んだとしても、多分全く問題は無いと思うんだ。でも、一番の問題は、監視カメラに映らないかどうか、だよ」

赤龍は目を細める。

「赤龍らは、器や術師にしか見えんぞ？例外的に見える奴もおるけどの、しかし、守衛が見えるとは思えん」

もし見えていたら、今頃学校重大パニックになっている。パニックどころの騒ぎではない。龍がいるなんて、世界的問題になりかねない。

「……問題は、赤龍じゃない」

となりから、ボソツと青龍が言った。

聞くと、少しだけ目を丸くして、赤龍は青龍の方に視線を向ける。
「その通り」

相槌を打つように、軽く頷く。続けて、憶羅先輩は「龍が見えないとしても、同じことなんだ」赤龍には理解できないことを呟く。

「何故じゃ？」

訳が分からない、と言うような表情で、憶羅先輩に尋ねる。

「つまりさ、」

代わりに、東海林が答える。ずっと憶羅先輩だけに話を進ませていたら、憶羅先輩が作戦を決行する前に疲れてしまう。戦力がそがれるのは、この状況で避けなければならないことの一つだ。

「お前たちが見られなくても、俺たちが魔法みたいなもので、空飛んでるようにみられるってことだ。それはある意味、問題だろ？」

赤龍は、「あ、なるほどの」納得したように頷く。

「そうそう、だから、」

憶羅先輩は、もう一度地図を指さす。守衛のいる場所だ。そこから、中庭へと指を移す。

「こうやって行ったら、守衛にも、道行く人にもばれる可能性があるんだ」

人通りが多い方向から行くのは、危険だと言うことだ。高度がビル並みに保たれていれば話は別だが、それだと、中庭に降りられなくなってしまう。

「それでもって、」

言いながら、憶羅先輩はテーブルの上に置いてあったシャーペンで、学校の周りに印をつけていく。

「これが監視カメラの配置。そして」

今度は、大通りの真反対にある場所に印をつける。

「ここが公道からの死角。ここから行けば、公道側の道から人に見られたり、守衛に見られる恐れはほぼゼロになる」

ほぼ。

あくまで、死角だと言うことだ。見えていない、と言っても、一瞬だけ見られてしまう可能性なら十分にあり得る。

「そして、この死角には、沢山の監視カメラがある」

学校側としては、それは当たり前な話だ。

一番見られない場所だからこそ、監視カメラをたくさん配置する。それはある意味、当たり前な話だ。学校の警備は、ほぼ万全、と言うことになる。

「それじゃあ、どうやって入るんですかー？」

あまり力の入っていない声で、雄大は尋ねる。

少し微笑んでから、「まあ慌てない慌てない、」言いながら、少しの余裕を保ち、東海林たちに説明を再開する。

「この監視カメラはね、空じゃなくて、全部地面へ向けられてるんだ。まあ、普通空に監視カメラを向ける学校なんてないと思うんだけど」

言いながら憶羅先輩は、監視カメラの視界らしき範囲を、ハの字型で表していく。そしてその一部を、黒く塗り潰す。

「ここだけが、一瞬だけ空を映し出す。でもって、それ以外のカメラは、空を映しはするけど、公道から見えてしまう空になる」

つまり、この死角をくぐって行けば、学校の中に、正確には中庭へと行くことが出来る、と言うことだ。

「まあ、この寮と同じで、鍵がかかっているかかってないは、学校側でも把握されてる。校門の鍵が開けば、それだけで警備員室がやかましくなるだろうね。でも、鍵はこの際開ける必要がないし、問題

はこんな感じかな」

言い終えると、憶羅先輩は、黒く塗った部分を丸く囲む。そこを飛ぶことを、危ないと示唆する円だ。

「多分、赤龍君たちの体格だと、ここを通ろうとしたときに、運が悪かったら、この黒い範囲に入る。ただ、監視カメラは常に動いてる。それで視覚範囲を広げてる。あくまで、地面に向かって」

聞くと、「それじゃあ、そのカメラが、この場所を映していない時に飛んでいけば、」東海林は言いかける。

誰でもそう思うはずだ。

それを東海林が思ったただけだ。ただ、それを思いついたからと言って、それがうまく行くうまく行かないは別だ。

「タイミングが勝負になるね」

憶羅先輩は言つと、監視カメラの位置が記されている場所を囲む。

「ここには、何があつたか覚えてる？」

尋ねる。

勿論、と言わんばかりに赤龍が答える。

「確か、木が植えてあつたはずじゃ」

頷く憶羅先輩。「そう、丁度この監視カメラは、木の陰に隠れてるんだ。飛行中だと特別見えにくいと思う。だから、このカメラがどこを向いているのか見るのは、結構大変だと思うんだ」

「それなら、」

声を発したのは雄大だ。

雄大は、そのカメラの位置を指さしながら、黒く塗られている場所に指を移す。

「ここで少し高度を上げれば、見られないんじゃないんですか？」

監視カメラは、地面の方に向けられている。もともと、空を映すための物ではない。だから、確かに高度を高くとれば、東海林たちが監視カメラに映ることは、まずないだろう。

「いや、」

それに反論するのは、憶羅先輩だ。

そんなに複雑でもない思考を巡らせ、そのままを雄大に説明する。
「もし監視カメラの視覚外まで高度を上げたとしたら、きつと警備員室から、見えちゃうかもしれないからね。勿論、道行く人にも」
つまり、監視カメラにぎりぎり映る程度が、守衛たちの死角すれすれ、と言うことになる。確かに、一瞬くらいなら視界に入ってもいい気はする。しかし、いつ誰が、東海林たちの方向に視線を向けているのかわからない。

「殆ど、二択ってことですか？」

尋ねるように、東海林は言った。

聞くと、憶羅先輩は東海林の方に視線を向ける。手書きの上面図を見ながら、憶羅先輩に言葉を続けていく。

「監視カメラに映るか、守衛に少しだけ見られるか」

東海林は、憶羅先輩の方に視線を向ける。

「そう言うことになるね、」

肯くように、憶羅先輩は東海林に言った。

「その選択によって、色々と変わるからね」

言いながら、どことなく楽しそうな、そんな笑みを浮かべる。それが、何故か東海林に向けられている。

「どちらのほうが得策なのじゃろうか」

考えていないのか、考えても分からないのか、赤龍は呟いた。

憶羅先輩は聞くと、「そうだね」一度独白のように呟くと、また考えただけを抽出していく。

「俺としては、少しだけ高度を上げた方がいいと思うね」

つまり、守衛に少しだけ見られてもいいから、監視カメラには映らない、と言う考えだ。勿論、憶羅先輩のことだ。きっと何かしらの考えがあるのだろう。

「……賛成」

青龍が賛成した。

と言うことは、憶羅先輩の考えを、読み取ったと言うことだ。
「何で？」

興味があるようで、実はどうでもいいような、そんな表情をしながら、力のない声で雄大は尋ねる。

「……、」

青龍は、何も答えない。

「東海林、何故じゃ？」

代わりに、赤龍が東海林に尋ねてくる。「え、」一瞬疎ましそうに、東海林は赤龍へ声を吐きだす。「少しは自分で考えろよ」物憂いそうに呟くが、東海林はため息交じりに、言葉を進めていく。

「つまりさ、監視カメラって、一番守衛が気にしてるやつだろ？」確認を取る。

流石に、赤龍もそれは理解している様子だった。

「そうじゃろうな」

聞くと、東海林は「だから、」話を前へ進ませようとする。

「監視カメラに映るより、直接守衛の目にとまった方が、まだ逃れられるって訳だ。監視カメラに映ったら、そこで終わりだからな。記録されて、確認されでもしたら、終わりだろうな」

そう言うことだ。

納得気に「なるほどの、」赤龍は呟く。

それに続いて、あまり力の入っていない声が聞こえてくるのも確かだ。

「なるほどねー」

雄大の声だ。

「……、」

あくまで、青龍は何を言う気もないらしい。現に、目をつぶりながら、沈黙の極みを見せつけている。

「俺としては、そう思うけどね」

憶羅先輩が言った。

ここで一番の経験者は、憶羅先輩だと思う。それはきっと間違いではない。憶羅先輩なら、色々なことを経験して、それを土台に、様々なことを考えているはずだ。だったら、経験豊富な憶羅先輩の

意見にゆだねた方が、東海林たちにとってリスクは低くなる。そうなるはずだ。

「それじゃあ、なるべく監視カメラに映らないことを目標にしましょう」

一度、東海林は憶羅先輩に言った。

勿論、それに反論する奴は、少なくとも、東海林の部屋にはいなかった。

静かに、闇に溶け込むように。

夜だった。恐らく吹奏楽部員も寮に帰り始め、学校に人がいなくなり始めたころだと、なんとなく東海林は想像する。今学校に行っても、恐らく先生や事務の人しかいないだろう。守衛もいると思うが、はつきり言って今は、そんな事重要でもなんでもなかった。

あくまで、うまく行くかそうでないか。それが問題なのだ。

赤龍たちは、音もなく飛んでいた。小さな風切り音は聞こえるが、それも、他の人に聞こえるかどうかは疑問だ。途轍もなく小さな音としか、東海林には認識できない。もしかしたら、深呼吸をした方が、大きな音が出るかもしれない。

「そろそろじゃな」

遠くを見据えながら、赤龍は言った。

龍の飛行速度は計り知れない。相当急げば、一分経たずに学校へ到着出来てしまう。龍はどこまでも速く、不思議な生き物だった。

音をたてないように飛行することもできるようだった。そんな特技を見たのは初めてだったが、もしかしたら、この飛行が一番静かだったかもしれない。

「……、あの木」

青龍は言いながら、学校を囲むようにして生えている木を見つめる。

見ていると、手書きの上面図が、とても正確だったことが分かる。上面図の尺度と、ほとんど同じだ。となると、

東海林は考えながら、黒い部分で塗られていた場所を見る。そこには丸も八の字も書かれてはいなかったが、東海林にははっきりと、どこがどうなっているのか理解できた。

「あそこだな」

小さく呟く。

尺度がほとんど同じだからこそ、東海林は、どこに監視カメラが設置されているのか、把握することが出来た。

「多分、あそこだね」

東海林の後ろ、つまり赤龍に乗っている憶羅先輩が、ささやくような声で言った。夜ににあった声で、それでいて、とても静かな声だった。

そして、憶羅先輩は指をさす。あの木のどれか、それが全部に、監視カメラが付いているのだ。

つまり、そういうことだ。

思いながら、東海林は固唾を飲む。

ぶつつけ本番だから、と言うのもあるかもしれない。もしかしたら、足が少しだけ映ってしまうかもしれない。もしかしたら、守衛に頭のとっぺん辺りを見られてしまうかもしれない。

だが、そんなことを考えている暇もなかった。

これに成功して、ちゃんと明日が来るのかどうか、それが東海林にとって、甚だ心配なことだった。

現時刻、十九時四十五分。

冬休み入りたてのこの時間帯は、もう夜だ。明日になるか、終業式が始まるまで、あと四時間十五分、と言うわけだ。

その時間までに、全てが終わらなければならない。

それは分かっている。

分かっているが、うまく行くかどうか、それが心配で心苦しかった。

た。

「きっとあの木のどこかの枝に、ついてるんだと思う」
学校が、近づいて来る。

違う、こちらが学校に近づいている。当たり前な話だ。こちらが学校に近づいて、学校は動かない。

「……、」

沈黙の末、青龍の声が聞こえてくる。

「……あつた」

淡々としていて、淡白な声。何も思っていないような、どこかつまらなさそうな雰囲気醸し出した口調。

「本当？」

確認を取るように、憶羅先輩は青龍に尋ねる。別になんでもないと云うような表情で、一度青龍は頷いた。

「今どうなってる？」

再度、憶羅先輩は尋ねてみる。

聞いた青龍は、少しだけ目を細める。翼を扇ぎ、風を掻きまわしていく。なのに、音がほとんど立たない。

「……、動いてる」

「上出来だ」

感心するように、憶羅先輩は青龍に言った。

それに続けて、青龍に指示を出す。

「それじゃあ、青龍は監視カメラがこちら側から視界が遠ざかった時に、指示をしてほしい。そうしたら、一気に入るから」

聞くと、「……了解」どうでもいい、と云うような表情で、青龍は呟いた。

続けて、憶羅先輩は指示を出していく。

「なるべく、中庭に入るまでは一定の高度を保って。でも、中庭が近くなったら、一気に高度を落とす感じ。急降下は、リスク回避のためになるべくしないこと。中庭には入れれば、もうそこから俺たちは見えないから」

憶羅先輩は、一味も二味も違う。

聞いていて、東海林は思う。こう言ったことに手慣れている、と言うような雰囲気、ひしひしと伝わって行く。

「監視カメラを通り抜けるときのスピードは、なるべく速く。最低でも、人の目でとらえられない程度には速くね」

雄大は小さく、「辛いかもしれないけど、がんばってねー」軽く青龍に言った。そんなに軽く言える理由が、東海林にはよく分らない。ただ、もしかしたら、こう言った緊迫した空気の中にこそ、雄大のような無神経さが必要なかもしれない。

「うむ、やるしかないじゃろうて」

赤龍は、小さく肯う。

「……了解」

相変わらず淡々としていて、しかし、意志がはっきりと込められている声。

青龍は、少しだけ息をのんだ。

その瞬間、無音がその場を采配した。全てが無音になり、空気には、波と言う波が、一瞬にして消え去る。

一瞬で、それは崩される。

「今」

しっかりとタイミングを、計ったように青龍は言った。

その瞬間だった。

一気に、周りの光が曲げられる。非常に速くなり、何が起こっているのか、把握が出来ない速さになる。

一回、これを経験したことがあった。

東海林は、これを一度経験したことがある。寮から学校まで、一分で着いたという例だ。もしかしたら、あれは一分以内だったのかもしれない。少なくとも一駅は離れた場所だったのに、一分以内。

とてつもない速さだ、と言うことだけは確かだ。

考える時間も、つかの間だった。

一瞬にして、東海林たちは中庭に降り立っていた。どうやって降

りたのかも、おぼろげにしか感覚がとらえられていない。

「うつひょー」

驚く、と言うよりは、とてつもない、と感じている様子の憶羅先輩だった。

「俺が走って出せるスピードの二倍くらいはあったね、すごい」

その前に、その速さで走ることが出来る先輩が分らない。そう思うのは、東海林だけなのだろうか。一瞬、東海林は気になって仕方なくなる。

「光が引き伸ばされて見えたー」

別のことに感動しているのは、雄大だ。どこか楽しそうに言いながら、さっきよりも転生が高めの声をまき散らす。

「うつひゃひゃー」

これだけを聞くと、変人にも聞こえてしまう。そんな気がするのは、東海林だけだろうか。一瞬だけ考えるが、それは違う、と思惟が至る。

「それじゃあ、本題に突入しますか」

言いながら、憶羅先輩は赤龍から降りる。東海林も、合わせるように降りていく。

その時だった。

振り向いた時には、もうそこに、さっきまでの憶羅先輩らしき影はなかった。あったのは、二足歩行の、真っ黒な狼の姿だ。

「ね、シヨウジン」

楽しそうで、それでいて、不敵な笑みだったことは確かだ。

月明かりに照らされたその表情は、尚更憶羅先輩の陰っている光を浮き彫りにさせる。なじむように、それでいて、とても狂っているように。

恍惚感、とでもいうべきだろうか。

東海林は思う。

「おー、憶羅先輩、獣化！」

はやし立てるような、そんな口調で雄大が言った。確かに、今の

憶羅先輩は、さっきまでの憶羅先輩とは違う。見た目が違うと言うだけだが、ある意味、これが憶羅先輩の、本来の姿なのだろうか。
「……、」

特に何も言わず、青龍は淡々としている。何を見ているわけでもない様子で、どこにも焦点を合わせていない。

地面から前足を浮かせると、赤龍は二足歩行に戻る。あまりにもスムーズで、どこまでも軽い移行。

「東海林、」

小さく、赤龍が言った。

聞いた東海林は、赤龍の方に視線を向ける。

何を言いたいのか、全く分からない。赤龍の視線が物語っているのは、若干の焦燥と、緊迫にも似た光。

「心の準備は、大丈夫かの……？」

尋ねられた。

それを聞いて、少しばかりの躊躇いがあったのは、嘘ではない。

東海林の中に、とてつもなく小さい、逡巡のようなものがあつた。

あまりにも凝り固まった何かが、思考を遮っているようにも思えた。しかし、そんなものはこの際、この場には不要だった。必要なのは、そんな凝り固まった何かよりも、思考でもない。

「ああ、」

吐き捨てるような、そんな感覚に近い声だった。

雄大は、全くなにも思っていないような、そんな表情を東海林に向けている。笑っているように見えて、実は何も考えていない、なんていうのは、雄大にはよくあることだった。何故そんなことが出来るのか、東海林には不思議でならない。

見ながら、東海林は固唾を飲む。

憶羅先輩の表情は、表面的には笑っている。自然に、二足歩行の狼が笑っているだけのようにも見える。

しかし目には、余りにもはつきりとした、揺らぎないものがある。それはひしひしと、東海林の中でも感じられる。

「勿論、」

呟いた。

聞いて、微笑んだのは憶羅先輩だ。

その瞬間だった。

「

」

音ではなかった。

耳で感じられる音ではない、そんな何かが、東海林たちのいる中庭に轟いた。轟音なのに、耳では何も聞くことが出来ない。それは、何かもつと別の所から聞こえてくる、遠吠えのようなものだった。

月に向かって吼えていたのは、憶羅先輩だった。黒い狼にふさわしい、遠吠えだったような、そんな気がする。

「うむ、」

赤龍が、小さく呟く。

「今のは、音だったのじやろうか」

誰の疑問でもあったかもしれない。

どこまでも、遠吠えが響いているような、そんな気がしてならなかった。いつも使われていない感覚が、一気に刺激を受けたようで、東海林の中の余韻は、今でも東海林の中で響き続けている。

「……、それじゃあ、」

不敵な笑み。

浮かべているのは、憶羅先輩だった。

目を炯々と輝かせ、狩りをしに行こうとしているような、そんな空気が漂ってくる。自然ではない、自然な風。

「行こうか、」

小さく、憶羅先輩は呟いた。

八角柱のそれが、学校の問題で上がったことは無い。つまり、この八角柱を認識できるのも、特定の人物だけ、と言うことになるよ

うだ。しかし、今回の歪みよりは、その閾値が高いように思える。東海林にも、憶羅先輩にも、雄大にも感知出来ている。龍は元々、そう言ったことの閾値が低い。

「俺のターン！」

声を発したのは、雄大だった。言いながら取り出したのは、ペンダントになっている、あの結晶だった。

つまり、この八角柱へ通じる鍵だ。

「……、」

一瞬だけ、青龍は何かを言おうとした。そんな雰囲気、須臾ともいえる時間に流れて行った。

それを取り出した瞬間に起こったことだ。

正八面体の結晶と、八角柱に刻まれているこまごまとしたマヤ文字が、示し合せるように、マゼンダで染まって行く。以前見たのと殆ど全く同じだ。以前は確か、八角柱に結晶をつけなければ、マゼンダにはならなかった。しかし、今回は取り出しただけで、マゼンダに染まって行く。

染まって行くと同時に、自身が起こる。中庭だけなのかもしれないが、少しだけ大きめな、そんな地震。マゼンダが、柱をさらに飾って行く。

「おー、」

何か物珍しそうに、憶羅先輩は呟く。確かに、この光景は珍しいと言っていていいかもしれない。東海林は心の中で思う。

「これで、第一関門は開いたかな？」

雄大が、適当にそう言った。

八角柱のマゼンダが消え、雄大が持っている結晶の色も、段々と元の色に戻って行く。八角柱を見ると、そこにはひし形の穴が開いている。これも、以前と同じだ。

「これが扉の開け閉め、って訳か。初めて見た」

楽しげで、うれしそうな憶羅先輩の声だった。東海林は、憶羅先輩のように、楽天的にはなれそうもない。そんな気がした。

その時だった。

一瞬、思い出したことがあった。

「あ、」

小さく呟く。東海林の方向に赤龍の視線が被るが、東海林は気にせずに、ポケットの中をあさって行く。確か、まだポケットの中に入っているはずだ。

思いながら、携帯電話の隣に、ごつごつとした何かを見つける。正確には手で触っただけだ。しかし、その小さいなりにごつごつした感覚のそれは、確かに東海林の手の中にあった。

「どうしたのじゃ？」

赤龍は、東海林に尋ねてくる。

ポケットから、綺麗な六角柱を取り出した。六角柱の、透き通った透明な結晶。天然の水晶にしては、あまりにも淀みが無いように思える。そもそも、これが水晶なのかどうか、東海林には疑問だ。

どこまでも透き通っているだけで、それは、八角柱に何も反応を示さない。

「……ここじゃないのか？」

訝しげに、東海林は小さく呟いた。

雄大の結晶がここで反応したのなら、この透き通った結晶も、この辺りで使えると思ったのだが、それは間違いなようだ。どうやらそれは間違いな様子で、その結晶は、何の反応も示していない。

「どうしたの？」

憶羅先輩の声が、東海林の耳に響いてくる。

それを聞いた東海林は、声のした方に視線を向けた。「これ、」
言いながら、その透き通った六角柱を、憶羅先輩に見せる。

「視仇にもらったんです。でも、一体何なのか分からなくて。だから、雄大が使ったここで結晶を取り出せば、何か起こるかもしれないって、そう思ったん、ですけど……」

声が、段々と減速していく。

当たり前な話と言えば、当たり前な話だった。

「あ、それたしか視仇からもらってたやつするーい」

一息で、雄大は東海林に言いきった。この場合、ずるいの意味はどうなるのだろうか、東海林には今一分からない。

「お前の方が、すごいことしてくせに」

東海林は、雄大が持っている正八面体を見ながら、少しばかり面白くなさそうに呟いた。雄大の物だけ動いて、東海林の物は動かない。なんとなく、そう言ったものが好きになれないのは、きっと東海林だけではないだろう。

「まあ、視仇がくれたっていうんだから、きっと意味があるんだよ、

」

なだめるように、憶羅先輩は東海林に言った。

すぐに話を切り替えるのも、憶羅先輩だった。

「それより、」

言っと、八角柱の方へと視線を向ける。

なんとなく、憶羅先輩が何を見ているのか想像しながら、東海林も八角柱に視線を向ける。手に持っている結晶は、ポケットの中にしまい込む。

「中に入ることが、先決だよ」

憶羅先輩の言っとおりだった。

そう思う間もなく、雄大が東海林に呟く。

「ショウジン、遅ーい」

もう既に、雄大と青龍はひし形の入口に足を踏み入れている。憶羅先輩は、まだ東海林の前にいる。笑い飛ばすように、「ははは、雄大君は行動が早いね、本当」雄大に言い放った。

「全く、集団行動の意識がないというか、何と云うか」

小さく、東海林はぼやくように雄大へ呟いた。大体、いつも雄大は集団行動をしないのだ。自分のしたいことだけをして、集団で目的としていることなんて目もくれない。ただ自分がしたいようにしているだけなのだ。

本当に勝手だ、全く。

「ショウジーン、置いてくよー」

その声は、雄大の声ではなく、憶羅先輩の声だった。つまり、こういうことだ。

東海林：雄大＋青龍＋赤龍＋憶羅先輩。

集団行動をしないのは、もしかしたら東海林なのかもしれない。そう思った瞬間、「あ、ちょっと待ってください！」言いながら、急ぎ足で憶羅先輩を追いかける。

ひし形の中、とてもいすべきなのだろうか。

そこは、以前来た時と何も変わっていなかった。籠った空気、淀んだ風、勝手に火がつく壁の松明。そして、細々と刻まれてるマヤ文字。

「なんて書いてあるんだろうね、」

見ながら、憶羅先輩は呟く。狼も、そう言うことを考えるのだろうか。

「あつるっこー、あつるっこー」

前で元気よく歌っているのは、雄大だ。何故こんなにテンションが高いのなんてことは、東海林に分かるわけがなかった。

「マヤ文字、でしたっけ？」

確か、そんなような名前の文字だったことは確かだ。そもそも、この象形文字のようなものが、本当に文字なのかどうかすら、東海林には分からない。それだけを見てみると、何かの装飾にも見えなくはないのは確かだ。

「うん、この変な文字」

憶羅先輩は頷く。

だが、憶羅先輩にもその文字は読めないようだ。はっきり言って、その文字が一体どんな発音をするのか、それすら東海林には予想がつかない。アラビア語の方が、まだ文字だという雰囲気があるくらいだ。

「やはり、蒼空への扉に関する、何かの文章なのかの」

赤龍が、小さく尋ねる。

確かに、その可能性は無きにしても非ずだ。この場所も場所、ここは蒼空への扉に通じる通路のようなものだ。蒼空への扉についての事が、この壁一面に彫られていたとしても、全く不思議ではない。「かもしれないけど、それを証明する手立てがないね」

マヤ文字を、松明が照らし上げている。

見ながら、憶羅先輩は答えていく。

「そもそも、マヤ文字が分からないんだから、それを検証する方法もないしね」

その通りだ。

思いながらも、東海林はマヤ文字の方に視線を向ける。蒼空への扉に通じる道に、奇怪なマヤ文字。確かに、雰囲気はぴったりだ。驚くほど合ってしまう。しかし、問題はそこではないのも確かだ。何故、日本のこんなところに、こんなものが存在しているのか、それがまず問題だった。

考えてもわからないことだ。それは、考えなくても東海林には分かっていた。

「まあ、」

東海林は、空気を揺らがせるように、言葉を吐き出した。

「こんなところにある文章なんだから、きっとそれなりの内容が書いてあるんだろうな」

あくまで憶測だ。憶測の域は出ない。

だが、その可能性が高いのも事実だ。わざわざこんな場所に、誰かの嫁がどうたらこうたら、なんて書いてあるわけがない。それ自体を読めるわけではないが、そうではないと言い切れるものが、そこにはあった。

「その可能性は、高いね」

鋭いが、どこか穏やかな狼の視線が、東海林の方に向けられる。憶羅先輩はどこまでも狼で、ビースターで、それでいて憶羅先輩だった。

「まあ、読めないけどさ」

そこはかとなく、申し訳なさそうな口調で、憶羅先輩は東海林たちと言った。

聞くと、「いえ、」小さく東海林は憶羅先輩に呟く。列の先頭では、「さつかみっちー、トンネル」何も考えていなさそうな歌声が、その通路に響き渡っている。響き渡っているだけだ。元氣でもなんでもない。

「……、」

気づいているのは、青龍だけなのかもしれない。

それに気づいているのは、青龍だけかもしれない。雄大が、どこことなく不安と焦燥にも似たものに駆られているという子に気付いたのは。歌声は、ただ単にそれをぼやかすための物だ。雄大の心が読みとられないように、靄がかかったように、誰にも見られないように、そうするためにとっている手段の一つにしかない。

この歌に、そもそも意味はなかった。

あるとしても、それは歌詞には沿わない、余りにも辛いことであることは確かだ。雄大の心を覆う、固い甲冑の一部でしかない。

「くだり、み、ちー！」

そして、D・S・（ダルサーニョ）。しかし、この場合だとD・C・（ダカーポ）でもいいかもしれない。雄大の歌詞は、ど頭に戻るだけだ。

「しかし、本当に元氣じゃの」

赤龍の声が、青龍には聞こえている。

雄大本人には聞こえていなくても、青龍には聞こえている。少しだけ青龍は目を細めるが、それをわざわざ訂正させようとも思わない。はつきり言って、これ以上何を思う気もなかっただけだ。

「雄大か？」

小さく、東海林が尋ねる。

一度赤龍は頷くと、「何故こんな状況で、あんな大声で歌が歌えるのじゃ、全く、理解を超えておる」呟いた。

確かに、とも東海林は思う。赤龍が言いたいこと自体は分かる。

それに、東海林もそう思う。きつと、赤龍と東海林はそのことに關して、同じことを考えているのかもしれない。そんな気がしたただが、なんとなく、そんな風に思えたのも事実だ。

「だって、雄大だもん」

おどけるように、東海林は言った。

雄大がおどけているのだから、東海林だっておどけていいはずだ。そんな考えも少しありながら、赤龍の方に視線を向ける。

「あんな雄大が、今に始まったわけじゃない」

始まったのは、随分昔だ。

ただ、今はそれがエスカレートしているような気がしてならない。現在は柔和した方ではあるが、いつこれが激化するのか、東海林には全く分らない物がある。

「確かに、そうじゃな」

相槌を打つように、赤龍は言った。

その言葉に目を細めたのは、他でもない、憶羅先輩だった。

階段を降りると、そこは迷路になっている。以前もそうだった。

迷路の中を通りながら、奥底まで足を運んでいった記憶がある。それは、そんなに古い思い出ではないことも、東海林や雄大には確かだった。

若干の緊張感、と言つべきものだった。

そんなようなものが、その場を包み込んでいた。はっきりしたものではなく、ひどく漠然としたものだったが、それは、ひどく漠然としたものに対する感情だからなのかもしれない。あまりいい思考の巡り方でないのは、誰しも分かっていた。

「それで？」

憶羅先輩は、雄大に尋ねる。

聞いても、雄大は面倒くさそうな視線を向けているだけだ。「うん……、」呟く。

確か前は、青龍が、奥の場所で演奏されていたオーボエの音を頼りに、奥底まで行けた気がする。ただ、そのオーボエの音が、今でもここに残っているのか、そう聞かれると、それは無いかもしれない。

「ここからどうやって行くの？」

目の前にあるのは、分かれ道だ。右か左か、どちらかの二択。ある意味、それは難題だった。

質問している側にとっては、そんなに難しいことには聞こえないのかもしれない。ただ、そう聞こえないだけで、見る方向を考えると、答えられないくらい難しい。答えを持っているのかどうかすら、怪しく思えてくる。

「えっと……、」

笑顔で、それでいて困った風に、雄大が言葉に詰まる。

見ている青龍も、さっきから沈黙を保っている。それはいつものことかもしれないが、今日は少しだけ違う。

「……、……」

何か、焦っているような感じがえるのも事実だった。それを見落とす憶羅先輩ではなかったが、わざわざ詮索するような憶羅先輩でもなかった。

「ん？」

愛嬌よく、憶羅先輩は視線をのぞかせる。

東海林は、少しだけ迷いながらも、赤龍の方に視線を向ける。目で、赤龍とアイコンタクトを交わす。赤龍は、困ったような視線を送ってくる。

つまり、そう言うことだ。

「……、」

青龍は、沈黙している。

「つまり、だれもここからどう行くか、分からない訳？」
そうともいえる。

ただ、それが意味することは、あまりにも単純で、余りにも不服

極まらない結果だった。それをわざわざ口にする気は起きない。

「なるほどね」

言いながら、憶羅先輩は鼻を立てる。小刻みにクンクンと、辺りの臭いを嗅いでいく。においをかいで何になるのか、と言うのは、嗅いでいる憶羅先輩にもわからない。とりあえず、何かの臭いを見つけられれば、奥まで行くことが出来るかもしれない、と言う思考だ。

「何やってるんですか？憶羅先輩」

それを見て、不思議そうになったのは東海林だった。

あたりの臭いをかぎながら、「やつぱり、」言って微笑んでいるのは、誰でもない、憶羅先輩の方だった。

「以前、シヨウジンたちここに来たんでしょ？」

憶羅先輩は、東海林に確認を取る。

覚えている範囲だと、確かそうだったはずだ。この道を通って、

奥の、蒼空への扉を開くための物がある部屋に行ったのだ。

「はい、」

一度、軽く頷いて見せる。

若干訝しげに、赤龍は視線を細めた。

「それが一体どうしたというのじゃ？」

そうだ。

以前、東海林たちがここに来たと分かったところで、一体何が分かるというのだろうか。つまりそう言うことだ。以前来たことがあると言っても、今行けるかどうかは分からない。そもそも、そんな事全く分からない。

どこか楽天的な口調で、憶羅先輩は小さく微笑み。それを声にしながら、それで言葉を作り上げていく。

「もし、その頃通った臭いが分かれば、もしかしたら、どういう風に行けば奥に着けるのか、分かるでしょ？」

あ、なるほど。

思わず、相槌を打ちなくなる説明ではあった。それは間違いない。

納得は波を呼び、辺りに拡散していく。

「うむ？」

赤龍は、小さく呟く。

しかし、「でも、」言いながら、憶羅先輩は苦笑いをする。言葉に、その空気を織り交ぜていく。

「以前って言っても、ちょっと僕の鼻ではつかみきれない臭いだね。あんまりにも臭いが薄すぎるのかどうか分からないけど、分からないね」

狼の鼻が、分らない、と告げている。

それは相当なことだ、と東海林は思う。勝手なあたりをつけているだけかもしれないが、犬が人より鼻が利くなんてことは常識だ。常識中の常識だし、本当に、それ以上でもそれ以下でもないことだ。それよりも、もっと野生に近い狼の鼻で、何も感知できないというのだ。鼻で道筋を分かつとするのは、アイデアとしてはいいが、どうも現実性に欠ける。

「それって、」

小さく、東海林が呟く。

それに続くようにして、雄大が言葉を強引につなげてしまう。

「行けなーいってこと」

間延びした、どこかやる気のない口調であることは確かだ。

雄大のそれは、いつもとそんなに大差がなかった。さっきもそんなに、大差がなかった。あったのは、東海林の中にある、少しの苛立ちだけだ。少しだけそれらが、東海林の中で増したような気がしたのは、きつと気のせいではない。

補足説明を加えてか、憶羅先輩は言った。

「あくまで、嗅覚を使ったのは、駄目みたいだ」

残ったのは、四つだ。視覚、味覚、聴覚、触覚。

考えるが、どれも使えそうにない。視覚は分からないとしても、後の三つで、この状況を打開できるとは思えない。

不意な、会話への闖入だったことは確かだ。

「赤龍の方が、鼻がいいと思うのじゃがな」

赤龍の声だ。

聞いた東海林は、赤龍の方に視線を向ける。はっきりとした視線を東海林に向けながら、そのまま言葉を繋げていく。

「じゃから、もしかしたら、憶羅が落とした臭いを、赤龍らが拾うと言うのも、可能かもしれんぞ？」

考えてみれば、簡単な話だった。

赤龍たちは龍だ。

龍の嗅覚なら、もしかしたらビースターより勝っているかもしれない、問ことだ。考えられないことではない。

「あ、そうかもね」

それに一番共感しているのは、憶羅先輩だった。とても自然な笑みで、赤龍に向かっていう。

「だったらさ、赤龍君、頼んだよ？」

憶羅先輩は言うのと、どこか楽しんでいるような視線を、赤龍に向けて。赤龍は「うむ、」言いながら、目を閉じる。

鼻を立て、辺りの臭いを軽く嗅ぐ。

臭いがある。たくさん臭いと、ぐちゃぐちゃした感覚。そのぐちゃぐちゃした感覚が、一体何なのかは分からないが、今はそんなことどうでもいい。

もう一度、臭いを鼻から取り入れる。

強い、東海林の臭いがする。当たり前だ。東海林が今近くにいるのだから。

雄大と、青龍、そして憶羅先輩の臭いもする。

それから……、

そう考えた時だった。その時、赤龍は思わずはっとしたのだ。目を開けて、それでもまだにおいが残っているのを、赤龍は鼻で確かめる。

はっとなった臭いだ。

「お、何かわかったー？番犬赤龍！」

茶化すように、雄大が言った。

「赤龍は番犬ではあらん。全く」

怪しからん、と言いたげな視線を、赤龍は雄大へ仄かに向ける。しかし、そんなことを気にしている暇なく、赤龍は臭いをかぐ。

「何か分かったか？」

東海林は尋ねる。

聞いた赤龍は、「うむ、とりあえずじゃが」小さく呟いた。

それを聞いた憶羅先輩は、「おー、」言いながら、そのまま赤龍に尋ねて行こうとする。

「どんなこと分かった？」

興味津々と顔に出ている。これは、もしかしたらビースターになった影響なのだろうか。東海林は、憶羅先輩の顔を見て、思わず考えてしまう。

「うむ、これは微かにじゃが、大介の臭いがするの」

その言葉に疑問そうに、「大介君？」尋ねる。龍が見えるのだから、大介が緑龍と一緒にいることくらい分かるだろう。

赤龍の代わりに、東海林が話を説明していく。

「以前ここに来たときは、大介も一緒だったんです。だから、もしかしたらその時の臭いが、まだ残ってるのかもしれないです」

静かそうに、しかし東海林も、内心はとても期待している声だった。

聞いた憶羅先輩は、「おお、それはいいかもね」笑むと、赤龍の方に視線を見直した。

「それじゃあ、その大介君の臭いを追って、この先を攻略しよう」攻略、と言ったら、どこかゲームのような感覚がある。

ただ、それに関しては、ゲームのような感覚でもいいのかもしれない。そんな気が東海林にはする。ただ、その奥に一体何がいるのか、なんてことは全く分からない。

ほぼ絶対的な存在。

神にも等しい力、と言うことにもなりかねない。そんな相手と、

東海林たちが戦える気がしない。しかし、戦わなければならない、と言うのはなんとなく分かっている。なんとなくだが、東海林には理解していた。

それに、戦って勝たなくてはいけない。

でなければ、きつと本来来るはずの明日は来ないことになる。明日なんてものは、絶対に来なくなってしまう。

「赤龍、頼む」

だからこそ、東海林が赤龍に頼んだのだ。

「うむ、任しておくのじゃ」

元気そうな赤龍の声が、辺りに響き渡って行く。どこか、不思議な感覚がそこにあったのは、嘘ではない。術のような不思議な感覚ではなく、もつと自然な何かだ。

赤龍は、さっきと同じように臭いをかぐ。目を閉じて、とても慎重に。

「あつちじゃ」

分かれ道の左を指した。

どちらに行ったかなんて、東海林には覚えていない。だが、赤龍がそう言うのであったら、きつと左なのだろう。

「それじゃあ、行くか」

音頭を取るように東海林が言うと、その奥に進んで行く。

ほぼ絶対的な何か

通路を通って行くうちに、段々と思い出していくような、そんな感覚がある。確か、以前もこんなような道を通った。以前は青龍が引きつれて、奥まで行くことが出来たのだ。そして、奥の広い場所まで行くと、そこに待っていたのは、確か、敵である夢見^{ゆめみ} 春貴^{はるき}だった。

歩きながら、その時の焦燥感が、この場所に残ったままだと言うことを知る。ここは、まだこのままなのだ。いつまでもここに漂っているのは、焦燥感に他ならない。空気が弛緩することなんて、この場においてはありえないのだ。

「次はこっちじゃ」

赤龍は、右の方向を指さす。それに従うように、東海林たちは右に向かう。

そこにあつたのは、長い通路だ。何かに行くための、長い通路のような、そんな気がしてならない場所だ。

東海林はなんとなく、それを理解していた。

何だか分かつていた、と言った方が、正確だろうか。ここを通るのは初めてではない。雄大も気づいているかもしれないが、この奥にあるのは、壊れたドアだ。本来一方通行のドアだったが、出るために壊された元ドアだ。

ただ、今でも仕切りとして機能することはある。仕切りでしかなくて、あくまで、外と中を隔てるための物。

つまり、この奥にあるのは、

蒼空への扉。

「ここ……、」

一瞬呟いたのは、赤龍だった。

この場所に、覚えがないわけがなかった。ここは、春貴と戦った場所の前で、ここで話し合ったことを覚えている。メンバーは違

うが、ここにいるという事実は、変わることは無い。

「ああ、」

一度ここに来たことがあれば、絶対に覚えている場所だ。

ここは、そう言う場所だ。

「……、ついに、ここまで」

考えてみる。

そもそも東海林たちは、視仇に言われてここまで来たのだ。視仇に言われると言うことは、何かしらの意味があることであって、それでいて、何かしらの意味があると言うことは、つまり、そう言うことだ。

「ここだねー」

どこか、のほほんとした声を、雄大は呟いた。

聞くと、憶羅先輩は「どういうこと？」尋ねる。目の前にあるのは、壊れたドアだ。東海林たちが、出るために壊したドアだ。

流石に、憶羅先輩は中の構造を知っているわけではない様子だった。蒼空への扉が、一体どういう物なのか、と言うことくらいだろうか、知っているとしても。

龍（竜）の世界と、人の世界をつなげる物。

「あのドアをくぐったら、」

蒼空への扉なんです。

そう言うことだ。

それを聞いた憶羅先輩は、「あそこが……、」小さく呟く。

反応がそれだけ、と言うのも、きつと頭の中で、色々と整理しているからだろう。憶羅先輩の事だから、きつとそうだと東海林は思う。

「なるほどね、」

納得したように、憶羅先輩は言った。

納得するまで、少し時間がかかったようだった。もしかしたら、その時間は、納得するだけの物ではなかったかもしれない。それは確かなことだ。

「それで、準備は出来た？」

逆に、尋ねられる。

つまり、そう言うことだ。

聞いた東海林は、少しだけためらいながらも、憶羅先輩の方に視線を向けようとする。憶羅先輩が、視界の端にうつすらと映った。

憶羅先輩の視線は、真っ直ぐと東海林の方に向けられている。

ある意味、辛辣なことでもあった。

「準備、とな？」

赤龍が、逆に憶羅先輩へ尋ねていく。

それを聞いた憶羅先輩は、「うん、準備」復唱する。きっと、準備の前に、四文字が入るのだろう。

「心の準備、ってやつだよ」

漢字にすると二文字。

どこか、はつきりした表情で、赤龍は数回頷いた。「あ、なるほどの」その口調から読み取れるのは、赤龍が気楽そうだと、言うことくらいだろうか。

どうしてここまで、赤龍が気楽そうにいられるのか。東海林には全く分からない。

「……心の、準備とな、」

口調が、一気に落ち込んだ。

聞いた東海林は、赤龍の方に視線を向ける。赤龍の目は、光を忘れそうではない。ただ、その中に、不純物のようなものが含まれている。十分な量、きつとそれは含まれている。

「うん、」

少しだけ目を細めて、憶羅先輩は言った。

「青龍、心の準備だつて」

気楽そうな口調が、辺りに響き渡った。それが雄大の口調であることは、一点の曇りもない事実だった。

「……、」

何もしゃべらないのは、青龍の得意技だ。

その沈黙の奥に、重いものが含まれてるような気がするのは、東海林だけだろうか。

ここから先は、大きなものが待ち構えている。そうだ。

視仇は言っていなかったが、この奥には、ほぼ絶対的な何かがいるかもしれないのだ。それに対抗できるかどうか、そんなことを考えている様では、あの扉をくぐることなんて、きっと、到底できない。

「青龍は心の準備できてるー？」

気軽そうに、雄大は青龍へ聞いてくる。それに答えるような青龍でないことは、この場の全員が理解していることだ。

勝てるかどうか。

分からない、の一言に尽きる。もしかしたら、こてんぱんにやられるかもしれない。それだけならまだいい。もしかしたら、目障りだから消される、なんていう可能性も捨てきれない。どの程度そういった強いのか、それすらも東海林には分からない。

否。

分かる。どの程度強いのか。

他を寄せ付けないほど、傑出して強いのだ。誰かと並ぶことを許されないほどの力を持った奴。それが、絶対的なやつだ。

だったら、ほぼ絶対的って何だ？

東海林が疑問に思うのも、当たり前な話だった。

他を寄せ付けず、並ぶことすら許されない。しかし、自分のすべてをささげれば、それと同等の力を得ることが出来る『かもしれない』奴。

もしかしたら、それが『ほぼ』絶対的な何か、なのかもしれない。しかし、と東海林は考える。

確かに、『ほぼ』が付けば、本当にそいつが倒せそうな気がしてくる。絶対的なやつではないのだ。だったら、そいつを倒すことも可能はずだ。だけれども、あくまでそいつは、『ほぼ』絶対的な

やつなのだ。

それは、さつきから変わっていないし、きっとこれから変わることがないだろう。

変わることがないだけではない。東海林たちが戦う相手が、絶対的ではないにしても、『ほぼ』絶対的と言っているほど、とてつもない力を有している、と言うことになる。それは前提だ。変わることは無い。

そんな奴に勝てるのか。

『ほぼ』がつけば、勝てる気がする。

しかし、と東海林は考える。『ほぼ』絶対的な奴を倒すとなると、一体こちらに、どの程度の力量が必要になるのだろうか。東海林たちがどれだけ強ければ、その『ほぼ』絶対的な奴を倒すことが出来るのだろうか。

分らない。

それに、そもそも東海林は、絶対的、と感じる力を目の当たりにしたことがなかった。今まで様々な力を見てきた。それは事実だ。たくさんありすぎて、頭の中だけではおさまりきれないほどだ。

どれを見ても、東海林は思わなかったことがある。

その力を超えることが出来ない。

そんな風には、全く考えたことがなかった。例えば、憶羅先輩には憶羅先輩なりの力量があつて、今ここにいるのだ。しかし、それが絶対的な何かなのか、と問われると、そうではない、と答えたくなる。そもそも、それは絶対的なものではない。絶対的なものでもなんでもなくて、憶羅先輩の力だ。

他もそうだ。

全てそうだ。

力を乗り越えて、今の東海林がいるのだ。正確には、今の東海林と赤龍がいる。他を乗り越えたから、と言うことに他ならない。

その考えで行くと、一体どうなるか。

さっきの問いに帰ろう。

東海林は、さっきの問いを自分の中でかき混ぜていく。ぐちゃぐちゃとした何かが、東海林の中でとぐろを巻いて行く。

そいつ、『ほぼ』絶対的な何か、に勝つためには、一体どの程度の力が必要になるのか。また、どの程度の力があれば、そいつに勝つことが出来るかもしれないのか。

簡単な話だ。

そいつよりも強ければ勝つ。弱ければ、負けるだけだ。勿論この場合、負けると言うことは即ち、死を意味することは言うまでもない。

これはゲームでもなんでもない。

ゲーム感覚でここまで来たわけでもないし、東海林は、なんとなくのような流れで、ここまで来てしまったという面も、捨てきれなかった。ただ、そこにはいつも、東海林の意志が込められていた。

今回はどうだろう。

今、蒼空への扉を開けるための部屋の前で、東海林は悩んでいる。不安がっている。恐怖に駆られている。

視仇の言葉が、頭の中でリピートされていく。

かならずしもぜったいてきというわけではない。

だから何なのか。

東海林たちが、そいつより強くなければ意味がないのだ。この繰り返し返される日々も、きつとそいつをたたかなければ、元には戻らない。

元に戻らないと、どうなのだろう。

元に戻らなければ、絶対に冬休みが訪れない。しかし、それと共に、利点のようなものもある。冬休みの課題、なんていう面倒くさいものに追われずに済むし、食費の心配だつてなくなる。今日一日で使い切ってしまったても、明日には元通りだ。多少豪華な食事をして、明日はまた別の豪華料理を食べられる。ずっと繰り返し返される至福が、東海林に巡ってくるのだ。それに、友人もいる。

赤龍もいる。

何も欠けてはいない。

ある意味、東海林の世界と言ってしまってもいいかもしれない。この日が毎日続くと言うことは、東海林はずっと繰り返される温かい世界を、堪能できるということでもあるのだ。

だめだ。

何かがそう言った気がする。

何故そうなのか、東海林には分からない。その瞬間に、それが言葉によって否定される。何が否定しているのか、それは分からない。違う、分からないんじゃない。

もっと周りを見るんだ。

瞬間的に、東海林の視界へ、様々なものが飛び込んでくる。本当に多種多様で、一度には見る事が出来ないのではないかと思えるほどの、何か。

それらは、とても大切なものだ。東海林にとっても、他の人たちにとっても。

その通りだ。

それらは、毎日を一生懸命になって生きている。一生懸命になって、ずっと存在しようとしている。

そう。

でも、もしこんな状況が続いたら、どうなる。

聞いた東海林は、考えてみる。何が起こるのか、一体、それがずっと続いたら、何が悪いと言うのか。

絆し。

それは、束縛、枷にしかない。とても哀れで、とても辛い、しかし絶対的で、とても巨大な枷。

その内容を、理解出来ない東海林ではなかった。

少しだけ息を詰めて、東海林は表情を暗くする。目の前にあるのは、蒼空への扉へ続く、一方通行だったドア。

「だめなんだ、」

東海林は小さく言った。

はつきり言つて、そう言うしかなかったのだ。そう言つて、それが本当であることを、音で確かめるしかできなかったのだ。

「このままだと、世界全てが、本来あるべき姿に行かなくなるんだ。それはとっても悲しいことだし、はつきり言つて、それを見る俺は、辛い」

セーブデータが消えた。

それと同じように、人々の膨大な努力が消えていく。今この瞬間にやっていることも、もしかしたら、明日には消えてしまっているかもしれない。努力が全て、無かつたことにされてしまうかもしれない。

「はつきり言つて、怖いですよ、勿論」

憶羅先輩は、少しだけ震えながらも、言葉を紡ごうとしている東海林に視線を向けている。言葉が尽きそうになるが、懸命に、途切れないように、紡いでいく。

「でも、だからって、諦めていいことじゃない。そもそも、諦めちゃいけないことだからこそ、俺はここにいるんです。分かつてなかったけど、今、分かりました」

そう言うことだ。

顔を上げ、少しだけ、吹っ切れたような表情を、ドアの方に向ける。小さく呼吸をしながら、東海林は憶羅先輩たちの方に、視線を向ける。

「俺は、俺だけで動いてるわけじゃないんだって」

本当のことだ。

間違えやすいことなのかもしれない。自分の物は自分だけの物。誰のものではない。そんなのは嘘だ。実際には、様々なものがあつて、様々な影響があつて、その上に、一つの物が成り立っているのだ。

それは、どんなものでも同じだ。

それがたとえ、人であっても、変わることは無いことだ。

「うむ……、何じゃか難しいことを述べたの……、」

腕を組みながら、赤龍は視線を細める。どこまでも、話の裏を読まないのは、いつもの赤龍だった。

それを、今さら言い咎める気はない。そもそも、言い咎めたところで、何が変わるわけでもないだろう。

「うーん、シヨウジン難しくてわかんない」

雄大が、おどけた風に言った。その声は、どちらかと言うと、そもそも理解することを拒絶している様にも聞こえる。

「……」

小さく、鼻で笑ったようにも見えた。

青龍が、沈黙をしながら東海林の方に視線を向けている。口元は、いつものように淡々としている。ただそれだけでも見えた。

「シヨウジン難しくてわかんない」

笑いながら、憶羅先輩が雄大の言葉をまねる。

それを聞いた東海林は、どこか、一気に力が抜けていくような、そんな感覚に近い物を感じる。憶羅先輩にそれを言われたら、どう反応をしているのか、分からなくなってくる。それはきっと、東海林だけではないだろう。

「でも、」

続く言葉が、憶羅先輩にはある。

東海林は、憶羅先輩の言葉に耳を傾ける。

「まあ、いいんじゃないの？シヨウジンっぽくて軽い反応だった。」

予想していた反応より、どこか明るくて、それでいて、軽い笑みが含まれていた。程よく潤った表情は、いつもと変わらない憶羅先輩の表情がうかがえた。それが、真っ黒な狼の姿でも、だ。

これ以上、特に何を言うこともなかった。

ある意味、これが決意であって、それ以外の物ではなかったからだ。決めたこと、と言うべきだろうか、この場合。

もしかしたら、これはある意味『C・Flag』なのだろうか。考えてみる。

そんなことは、どうでもいい。これが運命だろうが何だろうが、東海林は信じた道を突き進むだけだ。

「行こう」

言ったのは、憶羅先輩だった。

からっとした、無駄のない表情と、それからどことなく、うれしそうな雰囲気、口調には調和されていた。ただ、同時にそこには、酷く強張った緊張と呼べるものが、確実に存在していた。

先頭を切ったのは、憶羅先輩だった。ゆっくり歩きながらも、その足音は、辺りに反射してから、東海林たちの耳に入る。音の響き方が、少しだけ違うような気がしたのは、きっと気のせいではない。「……、」

あまりいい表情をしていない青龍だった。何かを危惧しながら、睨んでいるような、そんな感覚だった。

憶羅先輩は、ドアノブがあつた場所に空いている穴に、手を軽く入れた。一度、確認を取るように、東海林たちの目を見る。一瞥と言ってもいい時間だった。

雄大が、一体何を思っているのか、それが一番分からない。

青龍も、それに倣うように、何を考えているのか全く分からない。しかし、だからと言って、二人（一人と一匹）がここまでついてきたと言うことは、それなりの何かが、二人（一人と一匹）にとって存在した、と言うことだ。そうでなければ、ここまで東海林たちに付き合うわけがない。

確認するような感覚で、憶羅先輩に目を覗かれる。

手に力が入る。それを一瞬、東海林は感じる事が出来た。具体的に言葉には出来ない、見えない力の一種のような、そんな何か。一度、徐に頷く。

それを合図にしたように、憶羅先輩は扉を引く。重たく、それでいて何の飾り気もない空気が、そこから流れてくる。

以前見た時と、全く同じだった。広さと言い、ドーム状の天井に彫られている模様と言い、全て同じだった。勿論、東海林も細かく記憶しているわけではなかったが、雰囲気そのものは、その時そのままだった。

「ここだね、」

あたりを見回しながら、憶羅先輩は呟く。

同じようにあたりを見回して、「うーん、いないねー」どこかやる気のないような口調を、辺りにまき散らしていく。

いない、と言うのは勿論、敵のことだ。その敵は、勿論、『ほぼ』絶対的な者のことだ。

それが、一体どんな形状をしていて、一体どんな特性を持っているのか、東海林には分からない。きっと誰にもわからないだろう。

だが、どんな相手であろうとも、東海林が倒さなければならぬ相手である、と言うことは確かだ。

「うむ、ここにはいないようじゃな」

赤龍が、軽く辺りを見回した。

見た東海林は、心の中で小さく撤回をする。

東海林が倒さなければいけない相手、ではない。東海林たちが倒さなければいけない相手、だ。そうでなければ、意味が変わってきってしまう。

「……、」

少しだけ、訝しげそうな表情を、天井の方に向ける。天井の幾何学模様が、一体何を意味しているのか、青龍には分からない。だが、それが禍々しい何かであると言うことを、青龍は十二分に理解することは出来た。

一周を見てみると、東海林の視界に一つの階段が現れる。それが一体どこに繋がっているのか、それを東海林は知っている。

「もう少し、探してみるか」

呟くと、その階段の方に足を運ぶ。

気にかかることがないのか、と言われれば、あるとしか東海林には答えられない。

この部屋と、奥の部屋は、似たような部屋としか言いようがない。以前戦った相手は、奥の部屋で何かをしていた。恐らく、蒼空への扉を開けるための、何か、儀式のような物だろう。それでは、何故、こんな部屋が存在するのだろうか。

一瞬ではあるが、東海林の頭の中に、疑問符が浮かぶ。

もし、奥の部屋で儀式が行われるのなら、わざわざこんな場所を作らなくてもよかったはずだ。東海林には、この部屋がある意味を、いまいち理解できなかった。

それだけ、と言ってしまえば、それだけにならないこともない。

思いながら、東海林は階段の方に足を運ぼうとする。

「シヨウジン」

それは、憶羅先輩の声だった。

少しだけ後方から聞こえた声は、東海林の耳にピンポイントで響いてくる。聞いた東海林は、憶羅先輩の方に視線を向ける。

「はい？」

言っと、その方向に振り返る。赤龍も、東海林と一緒に憶羅先輩の方へ振り返った。

憶羅先輩は、自分がつけている腕時計を指さしている。どういう意味なのか、それを東海林は、一瞬理解できなかった。

東海林は憶羅先輩の方に走る。

「何ですか？」

言いながら、憶羅先輩の目の前に立つ。

「何か、時計に関することなのかの？」

隣から、赤龍の疑問げな声が、響いてくる。その声は、憶羅先輩を頷かせた。「実はね、」言いながら、憶羅先輩は腕時計を東海林たちに見せる。

そこには、勿論時間が表示されている。こうだ。

『22:48』

その意味が分からないほど、東海林は落ちこぼれていない。

現時刻、二十二時四十八分。つまり、十時四十八分。

それが一体、どうしたのだろうか。

「それが、どうしたんですか？」

思わず、東海林は尋ねてしまう。一瞬、憶羅先輩は戸惑うが、赤龍の一言で、東海林も理解できた。

「もうすぐ、『明日』の時間になるの」

はっとなった。

そうだ。

明日だ。明日は明日でしかなくて、それ以外のなんでもない、と言いたいのだが、この場合、それは間違いだ。

この場合、明日が意味している物は二つある。

東海林たちが、普通に繰り返されている終業式の繰り返しを見る羽目になるのか、全員が終業式の翌日であると言つことを認識するか、そのどちらかだ。

それは、はっきり言つて分からない。

分からない、ではない。

そうできる可能性はある。ただ、どちらにも可能性は行く。それだけのことだ。その可能性は、こつも言い換えられる。

東海林が、絶対的な何かに勝てる確率。

それを考えてしまうと、余りにも低確率のような、そんな気がしてしまふ。それは、東海林の気のせいなのだろうか。

「うん、」

憶羅先輩は、一度頷く。

時計は、刻一刻と時間を刻んでいく。時計がなくとも、時間は勝手に、自然と流れて行くものだ。

「そうか、もし十二時になりでもしたら……ッ！」

聞いて、思わず東海林はそう呟く。繰り返されるか、別の物が来るか。どちらにしても、変わらないことがある。

全員は、それを歪みだと認識していない、と言うことだ。
ただ繰り返し返されてしまうと、考えたくない事態が起こる。

今日をまた、繰り返し返さなければならぬ、そう言うことに他ならないのだ。特に、今日を繰り返し返すのは、もう散々だ。これは一回あれば十分な経験だとも、東海林は思う。

そもそも、憶羅先輩に説明するのが、そもそも面倒なことこの上なかった。

「また、一からやり直したよ」

はつきりと、憶羅先輩は東海林に告げる。

今回は、ゲームだけでは済まなくなってしまう。ゲームだけではなくて、何かもっと大切なものまで、初期化されてしまうような、そんな気がしてしまう。憶羅先輩への説明なんて、それに比べれば微々たるものだ。もっと、何か心の中をもそもぞする、じれったいように感じる、何かだった。

「でも、視仇がここによこした理由は、きっともう分かるよね」

憶羅先輩が、東海林に軽く呟いた。

それを聞いた東海林は、考えるまでもなく頷いた。「まあ、すこしは」少しなら、理解しているつもりだ。

ある意味、信用されている、と言うべきなのだろうか。

視仇だけではなくて、長宮に、信頼されている、と言うべきなのだろうか。東海林は軽く考える。

「少しで十分だよ」

微笑みながら、憶羅先輩は東海林に呟く。

そして、それと同時に、奥へと続く階段に視線を向ける。そこにはまだランプがともっておらず、明かりなんてものは、そこに存在していないかった。一寸先は、本当に闇しかないように見える。

かろうじて、のぼりの階段があるとした、東海林には分らない。

「急いだ方が、よさそうだね」

全員がそれを首肯するほど、それは正論に近い物だった。

「行きましょう、ここにはいないみたいです」

東海林は言った。

聞いた憶羅先輩は、「そうかな？」少しだけ脅すように、東海林へ呟いた。「え……、」憶羅先輩が一体何を言いたいのか、東海林には分からなくなってくる。

「もしかしたら、見えないところから急に姿を現したりして」

一番してほしくないパターンだ。

しかし、それはあくまで想像にすぎない。仮説でもなんでもない。ただの想像だ。起こるかどうかなんて、そもそも分かりはしない。しかし、そうなる可能性は、限りなくゼロに近い。

「そんな、脅かさないで下さいよ……」

か細く、東海林は呟いた。

聞いて、それを茶化すような声を上げるのは、雄大だけだ。

「わーいわーい東海林が脅かされてるーわーいわーい」

何が「わーい」だ何が。

一瞬東海林は思ったが、気持ちを少しだけ抑えて、あえてそれを口に出さないことにする。

東海林の思考に、疑問が浮かぶ。

「全く、あんな奴にあんなことを言われてしまっではおしまいじゃぞ、東海林、どうするのじゃ」

どこか真面目そうに、赤龍は咎めた。

それを聞いて、東海林が困らないわけがない。

「ンなこと言われてもだな……、」
言った。

そう言った瞬間だった。

学ランのポケットから、すさまじい光のようなものが、いきなり放たれたのだ。東海林本人も目がくらみそうな、そんな光だったことは確かだ。

「なッ！」

目を閉じて、東海林は言った。

「何じゃー!!」

訳が分からなさそうに、赤龍が呟く。

「わーいれつつ光！」

ふざけた口調でこの場の空気をかき混ぜるのは、雄大だ。それ以外に、そんな奴はここにいない。

「……、」

ひたすら沈黙しているが、その光に興味を持っている風な青龍。目を細めながら、東海林のポケットを見つめている憶羅先輩だった。

その光はどんどんと収まって行く。何が原因でこんなことになったのか、本当にまるつきりわからない。何故、一瞬にも等しい時間で、光が失せていくのかも分からない。

「……何が、」

東海林は呟く。

それしかできない。

憶羅先輩が、東海林に呟いた。

「そのポケットの中身って、確か、あの結晶、だったよね」

それを聞くと、東海林は憶羅先輩に「はい」一度小さく頷いた。

ポケットに手を入れて、その結晶を取り出す。

今もなお、仄かな光を帯びているように見えるのは、東海林の気のせいだろうか。

「これ、じゃな」

赤龍は言った。

推察でもなんでもない。

見ればわかる。普通、光って見える六角柱の結晶なんてない。LEDを付けない限りは、そんな事、そもそも起こりえないのだ。こう言った、説明が付きそうもない力が働いているわけでもなければ、
「だな」

東海林も納得する。

それに対しての異論はない。

「それだー、」

はつきり言つてどうでもいいが、とりあえず流れに乗ってみよう、
と言う気がバレバレの雄大。

「……、」

相変わらず、沈黙を極めているのは、青龍に他ならない。

さっきの光にも、全く動じていない様子だった。むしろ、更に冷静さが増しているようにも、東海林には見えてくる。

「でも、」

新たな疑問だ。

この六角柱に対しての疑問。そんなものは、初めてだった。はっきり言つて、そんなもの抱いてはいなかったし、不思議なほど、思考がそれを綺麗に避けていた。本来は、かなり疑問なアイテムであるにも関わらず。

「この結晶、何なんだ？」

呟いてみる。

答えが返つてくるとは思えない。ただ、その響きが、あらぬ方向に響いていることだけは確かだ。

それは、青龍の声だった。

「……、……」

来る。

何かを予感した、青龍の声だ。

その予感は、すぐに現実のものとなる。

いきなり、東海林たちの耳に、耳障りな音が響いてくる。甲高く、聞いているだけで気持ちが悪くなりそうな。

思わず、東海林は耳をふさぐ。塞いでも、その音は耳に響いてくる。直接、耳の中に音を流されているような、そんな感覚にも思える。しかし、考えてみると、少しだけ違う。

これは、音ではない。

音ではない何かを、東海林は今感知している。

「シヨウジン！」

憶羅先輩が、声を上げた。

それを聞いた東海林は、憶羅先輩の方に視線を向ける。真っ直ぐな視線が、東海林の方に向けられている。

「携帯だー!!」

聞いて、はつきりした。

空間が歪み始める。空中に存在していたものが、まるごと歪んでしまふ。蒼空への扉に綱がる、階段のすぐ前だ。

手探りで、東海林はポケットの中に入っている携帯電話を取り出す。頭が壊れそうな音は、徐々に耳から消えていく。それが、この場において唯一の救いだっただのかもしれない。だからと言って、悪くならないなんて可能性は無い。

東海林は、データフォルダを選択する。一番上にある、『TRY MSWJNskry(telos)』を構える。

「おーゆがんでるー」

どこか、それを見てまるで「面白そうだ」と言っているような、そんな雄大の口調だった。ただ、雄大にそれを言い咎めても、治ることはまずないだろう。東海林は考える。

「……、」

食い入るように、青龍はその歪みを見つめている。

歪みはだんだん大きくなり、中心から、何かが現れる。光の塊のような、そんな何かだ。

「……まさか、あれが」

小さく、赤龍が呟く。

歪みから、どんどん光が大きくなってくる。形は、まるで手のようにも見える。しかし、それは一部に過ぎない。あくまで手は、手でしかない。

赤龍が危惧していることを、何となく、東海林は把握している。小さく息を詰め、そして言葉を探す。

その名称かも知れない。名前なのかどうだかは分からないが、それがどう認識されているかと言う物。

「『ほぼ』、絶対的な、何か……」

徐な口調、東海林は呟く。

歪みから、光は全貌を表す。巨大な人型をしていて、どこかごつごつとした体つきを取っている。それだけが、見受けられる。

光がはじけた。

そいつの体に取り巻いていた光が四散し、光の中身があらわになる。歪みは無くなり、そいつは咆哮のようなものを上げる。

それは、巨大なゴーレムだった。

迷わず、東海林は携帯電話のボタンを押す。

青龍はすぐに息をつめ、手を前に出す。そこから水があふれ出し、それは青龍の意のままに動いて行く。はじめは雄大と青龍の盾。それから、その巨大なゴーレムを縛るための物になる。

G g l l w w o o オヲヲヲを w r o o r o u h w p w o g
g g g G G G G G G H ! !

それは、どこまでも意味をなさない慟哭に他ならなかった。

俊敏に動きながら、憶羅先輩はゴーレムの体のあちこちを観察する。憶羅先輩は、ゴーレムの体に必ず書かれているという『E M E T H』と言う文字を探しているのだ。その文字を壊せば、ゴーレムは動かなくなる。

ゴーレムはすぐに水の縄をちぎり、青龍の方に腕を振るう。大きく、大振りで、それでいて速い。青龍の目に、一瞬止まらないほどの速さ。

さっき、青龍は水の盾を発動させていた。

そのはずだ。

だが、まるでその盾が存在しないような感覚で、ゴーレムは青龍を振り払った。青龍には、一瞬のことが分かっていた。

水の盾が、壊されたのだ。

飛ばされ、壁に体を思いつきりぶつける。途轍もない衝撃が、青

龍の中に迸って行く。

「ぐッ!!」

いつもの前置きがなくなるくらい、それは深刻な声だった。勿論、雄大はそれを見ている。周りには、さっきよりも強度が増した、水の盾がある。ゴーレムが壊せるのかどうか、考えてみると、きっと壊せるという思考に至る。だが、雄大の心はさっきから何も変わっていない。

「あ、青龍吹っ飛んだ」

どうでもよさそうな、そんな声を放った。

どうしてそこまで、青龍に無頓着な声を発せられるのか、東海林には不思議で仕方がない。

「行くぜ、」

東海林は、赤龍に呟く。

一度赤龍は頷くと、東海林が持っている、光り輝く携帯電話の方に視線を向ける。その瞬間、何もかもが一つになって行く。

光は止み、すぐにその中から、竜人の姿が現れる。何処までも赤い鱗と、それにまみれた剣を片手に持った竜人だ。

「……、赤……龍、」

うつすらと目を開けながら、青龍は竜人の方に声を放つ。その声が、竜人の方に届いたのかどうか、それは定かではない。

ゴーレムは、竜人の方に視線を向ける。そこにいるのは、さっきまで存在していなかった、赤い竜人だ。勿論、竜人が現れたことに気付かないわけがない。そこまでゴーレムは、周りに関心を持っていないわけではなかった。

「シヨウジン……」

微妙に呆然としながらも、どうでもよさそうな雰囲気で、雄大は竜人の方に声を放つ。

憶羅先輩が、竜人に声を放った。

「シヨウジン、こいつ、文字が何も書いて……」
瞬間だった。

その瞬間、ゴーレムの気にふれたのか、憶羅先輩の方に視線を向ける。拳を握ると、憶羅先輩の方に振り上げる。

それを見て、まずいと思わないわけがない。狼の瞬発力は、人のそれをはるかに超えている。しかし、憶羅先輩はそれに、うまく反応することが出来なかった。その拳の速さは、それ以上に、素早い物だった、と言うことだ。

まずいッ！！

一瞬で、その思考が巡った。憶羅先輩の足が動くころには、もう殆ど、拳は憶羅先輩との距離を、縮めていく傾向にあった。

走ってきたのは、竜人だ。

いきなり走ってきたかと思うと、その瞬間、勢いよく憶羅先輩を付き飛ばし、自分も全く別の方向へ飛んでいく。翼を駆使して、竜人は舞い上がる。

憶羅先輩は倒れ、その近くには、巨大なゴーレムの拳が置かれている。

「う……、うつわー」

若干の冷や汗をかきながら、憶羅先輩はそれを見ている。

ゴーレムはそんな場所を見ず、飛んでいる竜人の方に、視線が行っていた。飛び回っているのが癪なのか、目を細めているように見える。きっとそれは、気のせいではないだろう。

「先輩！」

竜人の声だ。

それは、憶羅先輩の方に向けられる。

「……！ん？」

声を張り上げて、憶羅先輩は、空高く飛んでいる竜人の方に声を進める。その声は、半ば落ち着きと緊張を、うまく保てていた。

竜人は言う。

「どこに、文字が？」

次の瞬間、

ゴーレムの手が、飛んでいる竜人の方に払われる。ものすごいス

ピードと、風切り音が聞こえる。

危惧した竜人は、その手から逃れるように、空中を飛び回る。ゴーレムは両手を使って、飛んでいる竜人をとらえようとする。

一見すると、間抜けにも見えなくはない。

しかし、こいつはあくまで、『ほぼ』絶対的な何かなのだ。侮つたら、絶対にその後、死が待っている。それは確かだ。

確か、ゴーレムは言葉を介さない筈だ。

憶羅先輩は考えると、すぐに、竜人の方へ言葉を放つ。

「文字は、書いてなかった！」

そんな事、今までは無かった。その感情と共に、憶羅先輩は竜人に言った。冷静そうな憶羅先輩でも、心の中では、どこか緊張を隠しきれずにいる。

「な……！」

一瞬だった。

その瞬間、竜人の気が、少しだけ抜けてしまった。文字が書かれていない、それでは一体、どこを削ればいいと言うのか。それが分からなければ、恐らくこいつに勝ち目はない。そもそも、勝ち目がどうたらという、生易しいレベルの問題では、きつとなくなってしまう。そんな気が、竜人にはした。

ゴーレムの手が払われる。

予想内の事だったはずなのに、今の竜人には、それは大きな想定外の事とも取れる。

その手は、見事に竜人へ直撃する。

「ぐうオオッ！！」

地面に叩きつけられ、竜人の周りに、砂煙が立つ。

「シヨウジン！！」

すぐに聞こえたのは、憶羅先輩の声だった。

とても心配げな、そんな口調をしていた。

その声はすぐに、竜人の耳に届く。

だめだ、と言う感情が、心の中で勢いよく吹き上げてくる。この

ままだと、絶対に勝てない。そういった確信が、竜人の中にはあった。

『ほぼ』絶対的な何か。

少なくとも、絶対ではない。

しかし、ゴーレムを攻撃したところで、その部分は、自己再生してしまふ。今までは、『EMETH』と書かれた文字を強引に削ることで、様々なことを解決してきた。しかし、今回ばかりはそうも行かない。

文字が書かれていない、と言うのだ。

憶羅先輩が言ったことだ。きっと正しさに違いない。

竜人の中で、そう言った思考に繋がる。それは同時に、絶望にも似た何かに直結していく。ただでさえ強すぎる相手だと言うのに、このままだと、何もできないまま終わってしまう。ゴーレムのことだ。きつとやみくもに攻撃したところで、どうにもならない。

何か、何か特別な方法があるはずだ。

竜人は考える。普段そんなに使わない頭を使うのは、かなり辛いものがある。

ただ、そんなに時間が残されているわけでもない。

青龍は既に、ゴーレムに伸されている。意識はあっても、きつと戦うことは出来ないだろう。憶羅先輩も、さっきの拳をよけられなかったところを見ると、これ以上戦闘しても、勝ち目がないようにしか思えない。

多少のダメージは負ったが、竜人はまだ戦える。

そう思う。

しかし、とも竜人は思う。

「危ないシヨウジン！」

憶羅先輩の声だった。

聞いた竜人は、一瞬憶羅先輩の方に視線を向けようとする。それ以上の物に気付いたのは、そんなに間もないころだった。

頭上に、ゴーレムの拳が振り上げられていた。

ここから推測される行動は、簡単なものだ。考えるまでもない、
と言っていいほど、それは直観的な何かでとらえられた。

拳は、潰すために。

つまり、竜人を潰すために振り上げられたのだ。

「ッ！！！」

声のない詠嘆を放つと、すぐに竜人は、今いる場所から急いで離れる。

ガゴンッ！

音を立てて、ゴーレムが叩いた床から、振動が伝わる。それでも、床は全く崩れることはなく、何の凹みも出来ていない。しかし、と思う。

確かに、ゴーレムから『EMETH』と言う文字がなくなってしまうえば、こちらは勝ち目がなくなってしまう。

ゴーレムは竜人の方に、炯々とした視線を向ける。どこまでも赤く、不気味に輝いているゴーレムの瞳。それを見ているだけで、気狂いを患いそうな。

とりあえず、と竜人は思う。

何もしないよりは、何かをした方がましだ。それはどんなことでも、と言うことが出来る。

思いながら、竜人は目を細める。ゴーレムは床から拳を上げ、竜人の方に視線を向けようとする。

竜人は走った。

右手には、確かな感覚を持つている剣がある。これは、ゴーレムの体を削ることが出来た。それは確かだ。

ゴーレムの足の間をくぐろうとする。

その瞬間に、竜人はゴーレムの足へ、腕を広げる。必然的に、剣も一緒に横へ突き出される。

剣は、ゴーレムの足を引き裂いた。

G G g R G g w j u h G G r g u W W W o W O W W W W G
を ご お お お お O W k k k g o o O O O ! ! !

狂ったような、ゴーレムの声。

つまり、反応はあった、と言うことだ。それが、少しばかりのダメージになったように見えたのも、きっと竜人の気のせいではない。ゴーレムにとって、それは苦痛になっているようだった。

すぐに、竜人の目に逆説的な光景が浮かぶ。

いくらゴーレムを切ったと言えど、ゴーレムにとっては擦り傷のようなものだ。それに、剣で切られた足は、周りの土塊が重なり合い、さつきと変わらない足になる。ダメージがあるないの問題では、なくなってしまう。

「やっぱりだめか……、」

小さく、竜人は呟いた。

その時だった。

うつすらと、ポケットから光が零れているのが分かる。

さつきまで携帯電話が入っていた方向だ、と言うことは分かる。

今そこに入っているのは、あの結晶だけだ。

しかし、さつきよりも光を増しているように見える。

思いながら、竜人はポケットの中に手を入れようとした。

風切り音。

聞くと、すぐに竜人は視線を上にあげる。そこにあったのは、巨大なゴーレムの頭だ。

さつきの拳代わりに、ゴーレムが自らの頭を使って、竜人を潰そうとしている、と言うことだ。それがすぐに理解できた。

理解できるのと、鼓動できるのは別だ。

ゴーレムの速さと、自分の足の速さを考えてみる。どう考えても、この頭をよけられるとは思えない。思えないという問題ではない。まず無理だ。

そこまで迫っている。

ポケットの中から、光が零れている。

何が起こるか分からない。それに、どうしてそうなるのか、きつと分かるものでもない。しかし、それをしなければいけないのは、

この場合明白だった。

走るよりも素早い行動。

それに、竜人は出るしかなかった。

手の中にある、六角形の物を前に突き出す。

それは、さつきまで仄かに輝いていた、透き通っていた結晶だ。

それそのものだと言うことも、なんとなく竜人には分かっている。

そう言った問題ではない。

その結晶は、さつきよりも遙に光り輝いていた。町中のネオンをかき集めても、こんなに明るくはならないかもしれないと思えるほどに、その光はまばゆかった。天まで届きそうな、そんな光。

そこにいる全員が目を閉じた。

目を開けていたら、絶対に目がつぶれる。それを納得したからだ。

「なッ！」

小さく言ったのは、竜人だった。

何が起こっているのか、はつきり言って分からなかった。光が四散していることしか、理解に及ばなかったのだ。

「わーい！」

雄大は、どこまでも気楽そうな声で、どこか投げやりな雰囲気で、その場に声をまき散らす。竜人には、聞こえたような気がしない。

光は突如治まった。

そのせいか、目は辺りの光に、全く慣れなかった。一瞬真っ暗なように見えて、見回しても何も見えなかった。

しかし、左手に持っていた結晶の感覚が、少しだけ違う。

目が慣れてくると、ゴーレムが自身の目を押さえているのが見えた。辺りにいる憶羅先輩や雄大、それから青龍も、未だに目を押さえている。少しだけ目がやられてしまった、と言うことを、竜人ははつきりと理解する。

ゴーレムがひるむほどに、だ。

逆に、もう目が慣れた竜人は、ある意味変なのかもしれない。

だが、そんなことを考えている暇はない。思いながら、竜人は左

手に持っているそれに視線をやる。そこにあつたのは、竜人の腕を中心に浮かんでいる、巨大な腕輪の様な何かだった。二つ重なった、巨大で透明な輪。

「な……ッ？」

はつきり言つて、何がどうなっているのか、竜人に把握しきることとは出来なかった。ただそれが、ずっしりとした重みのある何かだと言ふことしか、竜人には分からない。

腕輪が、回り始める。

勢いが、段々と速くなっていく。

その存在が、勝手に作動しているような、そんな感覚に近い。竜人の腕は、まるでその腕輪に動かされているような、そんなそんな風な動きをしていた。

いきなり、腕がゴーレムの方に向けられた。竜人が何をしようとしているわけではない。ただ、腕輪にインプットされている何かが、竜人をそうさせているのだ。

透明な腕輪に、文字のようなものが浮かび上がってくる。

「……ッ！ぐッああっ！」

竜人の腕が、一気にかあつと熱くなっていく。まるでそこだけ、血がものすごい勢いで巡っているような、そんな感覚。

それは徐々に、痛みを伴い始める。

手首から先だけが、まるで自分の物ではないような、そんな感覚に見舞われてくる。何かに痺れ、そこから先だけ、感覚がおかしくなってくる。まるで、強引に感覚が拡張されているような、そんな感覚に近い。

竜人の左手は膨張し、今まで見たことのないような、まるで、竜の悪魔のような、左手の形となった。

「……、」

歯を食いしばる。

目が自然と、ゴーレムの方に向かう。

左手が、熱い光を帯びていく。青白く、どこかピリピリするもの

ついている形状になった。その先には、ゴーレムを貫いて、さっきの意味不明な語列が並んでいる。

なんとなく、

この後どうすればいいのか、と言うのを、竜人は把握していた。それはある意味、本能的に行われたものだった。

左手を、軽く握った。

巨大で禍々しい左手が、その『0』を壊すようにして、握られたのだ。『0』の羅列は壊れ、その先に書かれている適当な語列も、散佚していく。ばらばらになって消えていく。

同時に、ゴーレムも、まるで空中に溶けていくかのように、ばらばらになって消えていく。もともとゴーレムは、空気だったような、そんな風に壊されていく。

文字が全て散佚するとともに、ゴーレムも、まるで空気に溶けるように消えていく。

竜人の左手が光を帯び、一気に萎縮していく。それとともに、腕輪も輝きを失い、竜人の腕にぴったりとはまるように、大きさを縮めていく。

腕に、二つの腕輪がはまった。その意味が、竜人にはどうも理解できなかった。しかし、ゴーレムが消えたのは確かだ。それはつまり、『ほぼ』絶対的な何かが、消滅した、と言うことになるのだろうか。

分らない。

考えながら、竜人は腕輪に一瞥をくれ。そして、さっきまでゴーレムがいた場所に視線を向ける。

まるでそこに、何もなかったかのような空気が漂う。

憶羅先輩は、少しだけ目を細めながらも、そこに立っている竜人を見る。徐々に竜人は光を帯び、その光は失せていく。

腕輪を付けた、東海林と赤龍がそこに入る。

「……シヨウジン？」

予想外だった。

それは、憶羅先輩ですら、予測できなかった事態が起こっていた。これが本当に、運命と言う物にのっとった行動なのかどうか、と言うことすら、憶羅先輩には分からなかった。

「今日はそんなに出番なし？」

雄大が、ぼやくように呟いたのは、唯一の救いだっただのかもしれない。

本当の二日目

次の日、玄関の郵便ボックスに、通知表と課題が強引にねじ込まれていた。どうみても通知表は東海林のだったし、どう見ても、課題も東海林の物だった。現に、もう名前記入欄は東海林の名前で埋まっている。字が丁寧なところを見ると、これはどうやら、先生の字に見えた。つまり、そう言うことだ。

「……、ふう」

少しばかりの安堵が、東海林の中で湧き上がった。

東海林は通知表を開く。どの数字も高く、まるでそれは、東海林がハイレベルになったかのようにも見える。実際は違う。赤龍がとってくれた点数が、殆ど東海林をフォローしているようなものだ。

それでも、東海林はよかった。

もしかしたら、ただの独りよがりかもしれない。しかし、東海林は東海林なりに、自分でやることはやっているつもりだ。例えば、今日と言う日が来るために、かなりの努力をつぎ込んだものだ。きっと誰も認識していないだろうし、認識されたら、逆に困ってしまう物がある。

未だに呆然とした思考を巡らし、東海林はリビングの方に向かう。赤龍は、まだソファアールの上で眠っている。

思いつき、東海林はテレビの電源を付ける。

聞こえてきた声は、昨日とは違うアナウンサーの台詞だった。

『今週の天気は、全体的に晴れる見込みです。気温は例年よりも少し高めで、コートや上着を着なくても、過ごしやすい気候となっています』

昨日までは、暖冬をあまりいい言葉では表現していなかった。だが、今日はその逆だ。温かいから、コートはいらない。そう言った認識になっている。

昨日は終わった。

今日が始まったのだ。

それだけ考えると、東海林の心が晴れ晴れとしてくるような気がする。実際そうであったし、それ以外、東海林は思ふべきことがない。とりあえず、今日と言う日が来なくなる危機は去った、と言うことだ。

引つかかる言葉がある。

『三位がふたご座のあなた。思考が冴えて、いつもより頼りになるチャンスかも。ラッキーアイテムは腕輪です』

これは、偶然ではないのかもしれない。偶然ではなくて、きっと占い師の腕がいいのだと、東海林は思う。

そう、腕輪だ。

未だに、東海林の左手首には、水晶のように透明な腕輪がついている。それは、東海林の腕にぴったりと張り付いているようで、取るうとしても取れないのだ。それがどうも、東海林の心の中で引つかかるのだ。

言葉に出来ない何かが、騒いでいるような気がしたのだ。

それに、とも東海林は考える。

昨日のゴーレムが本当に、『ほぼ』絶対的な存在、だったのだろうか。東海林にはそんな風に思えない。確かに、いつも通り戦っていたら負けていた。ゴーレムに刻まれている『EMETH』と言う文字がない時点で、それはおかしな話としか言いようがなかった。

だが、と心の中で反論する。

東海林（と赤龍）が剣を一度振っただけで、ゴーレムは痛がつたのだ。確かに、見た目は深々と足を切り刻んでいたし、切り傷程度でも、痛いものは痛い。だが、その後の流れが、余りにも単純すぎた気がしてならない。

東海林（と赤龍）が結晶をポケットから出した瞬間に、とんとん拍子と言わんばかりの勢いで、物事がうまく進んだ。旨く進み過ぎている、と言っても過言ではない。確かにあのゴーレムは強かった。あの結晶が無かったら、絶対に勝つことは出来なかっただろう。

そう言う問題ではない。

逆に、あの結晶があつたら、誰でも勝てたのではなかったのだろうか。ただ、あのゴーレムを見ている限りだと、何かに傷つけられなければ、こっちの流れもうまく行かなかつた、と言う考えもある。そう考えるのは、きつと間違つたことではないと思う。現に結晶が光り出したのは、ゴーレムが傷ついてすぐ後だつた。

その後だ。

その後が、もしかしたら逆に普通ではなかつたのかもしれない。

本当に妙なことが起こつた、としか東海林には表現できない。それ以上思うことは無かつたし、少しばかりの疑問はあつても、面倒くさくなつてくるだけだつた。ただそれだけだ。

「まあいつか、」

独白を呟くと、東海林はテレビの中に映っているデジタル時計に目をくれる。

『6：59』

表示されていた。

確か、今日の部活は八時半からだ。いつも通りの時間で、きつとみんないつも通り、その時間には来ないことだろう。

まだまだ時間はたっぷりある。

だから、きつと赤龍を今起こさなくても、きつといいだろう。東海林にはそんな気がした。赤龍の左手首にも、透明な腕輪がはまっている。東海林のよりも、少し小さい腕輪だ。

なんとなく、腕輪が未だに、疼きを抑えられないような、そんな感覚だつた。

そんな気が、東海林にはしていた。

きつと今日は、みんな練習に集まつて、いつも通りだけれど、いつもと違つた行動に出るのだろう。

今日が繰り返されていないのならば、きつとそのはずだ。

憶羅先輩にも、今日は絶対集中攻撃されない。そんな気が、なんとなくした。それにきつと、今日はゲームを買うことだろう。買つ

たら寮ですぐにやり込むかもしれない。

そうだ。

まだ冬休みは始まったばかりなのだ。

そう考えると、少しだけわくわくする。この先、一体どう言ったことが待っているのか。東海林の心には、期待と興奮で埋め尽くされていた。

勿論、

赤龍も、その隅にいるのを忘れてはいけない。

小さく、東海林は微笑みかけた。

「な、赤龍」

そして、小さく呟いた。

温かい風と、澄んだ空が辺りを覆い、そしてどこまでも、繰り返されることのない行動が、いつものように行われる。蒼空だけが、いつも通り青かった。何かが閉ざされていそうな、そんな蒼空だけが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1768y/>

蒼空への扉.WAT

2011年11月3日13時12分発行